



# 難波京の防衛システム

—細工谷・宰相山遺跡から考えた難波羅城と難波烽—

黒田慶一

## 要旨

『日本書紀』天武8(679)年11月条の「初めて関を龍田山、大坂山に置く。よって難波に羅城を築く」という「難波羅城」に関する一文は、4年後の複都制の詔と合わせ、条坊制を有する難波京の成立として論じられることが多かったが、先入観を排して読む時、畿内防衛のための「関防」に関する条文であり、難波宮を近江軍に押さえられた、天武帝の壬申の乱の反省からの防御的施策と考えられる。

2005～06年度の細工谷遺跡の調査で、上町台地東辺を開析した谷頭から7世紀後半～8世紀前葉の築版土塁や木樋、西で北に30～30数度振る東西方向の掘立柱遺構や溝が多数検出された。古代山城で谷頭を出入口(城門)に利用する例は多々見られる。加えて当地は、比売古曾神社蔵の「伝後醍醐天皇綸旨」(建武2[1335]年)で社領の南限とした「羅城土居」に当り、難波羅城の遺構が中世まで露出していた可能性が考えられる。

また2003年度の宰相山遺跡の調査で、8世紀の土壌から出土した巨大な六甲山系の花崗岩から「難波烽」の部材の可能性を考えた。

## 1、はじめに

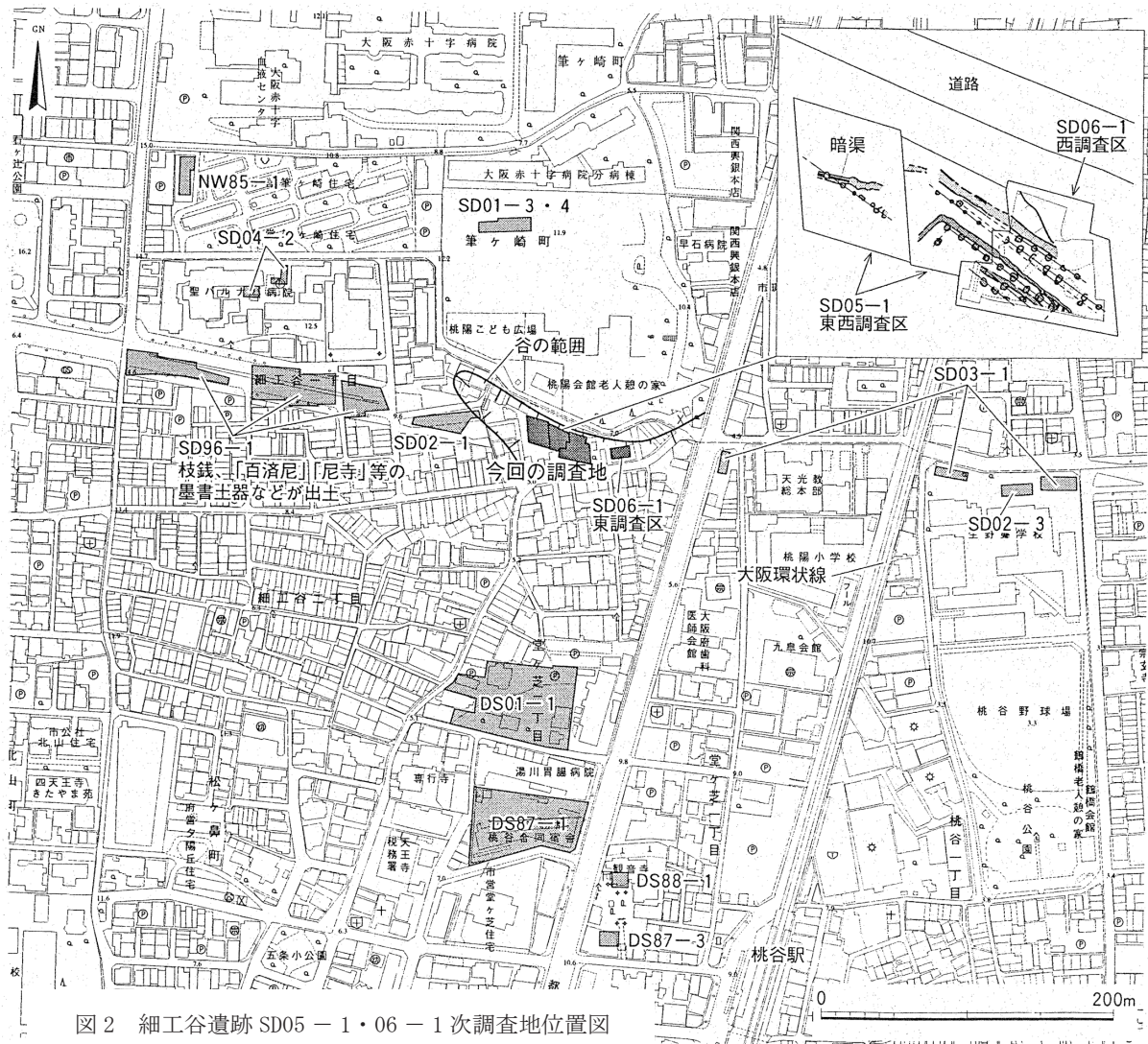
細工谷遺跡は和同開珎の枝銭や「百済尼」「僧寺」の墨書土器の出土(大阪市文化財協会1999)で、一躍学界の耳目を集めたが、東方の谷頭では版築土塁と思われる土層や木樋暗渠、西で北に30～30数度振る東西方向の掘立柱遺構や溝が数条検出され、7世紀後半～8世紀前葉の短期間に複数回造替されたことがわかっている。

近年、筑紫大野城(福岡県教育委員会2010)、肥後鞠智城(熊本県教育委員会2012)、備中鬼城山(岡山県文化財保護協会2013)など古代山城の正報告書が相次いで刊行され、その築城工法が明らかにされた。細工谷遺跡の遺構をそれに鑑みる時、難波羅城の城門であった可能性が高いと思われる。

またかつて滝川政次郎氏によって「難波烽」の推定地とされた真田山公園(宰相山遺跡)は、やはり河内湖に臨む上町台地東辺で、細工谷遺跡の北北東800mに位置する(図1)。8世紀の土壌から六甲山系花崗岩の特徴である桃色のカリ長石が目立つ黒雲母花崗岩の巨石が出土(大阪市文化財協会2004)し、前期難波宮の石組溝SD301や泉施設SG301(大阪市文化財協会2000)でも同



図1 細工谷・宰相山遺跡周辺図



花崗岩が石材の半数前後を占めることから、宰相山遺跡の花崗岩は、大和朝廷により当地に運ばれた部材の可能性が考えられる。高見峰と推定される暗峠北側の天照山を含めて、古代烽燧台遺構についても考えてみたい。

## 2、壬申の乱時の難波京

壬申の乱の際に難波の宮都を近江軍が押さえたという直接の文献史料はない。しかし天武紀元(672)年7月条の次の史料は、間接的にそのことを示している。すなわち「この日、坂本臣財〔大海人軍〕から平石野にやどる。時に近江の軍高安城に在りと聞きて登つ。すなわち近江の軍、財らが来ることを知りて、もって悉く税倉を焚きて皆散り亡ぐ。よって城中に宿る。会明に西の方を臨み見れば、大津・丹比の両道より軍衆多く至る。顕に旗幟を見る。人有って曰く、近江の将老伎史韓国之師なり。財ら高安城より降りて、もって衛我河を渡りて、韓国と河西に戦う。」

大海人軍の将である坂本臣財が高安城から早朝に西方を見ると、大津・丹比の両道より近江軍が押し寄せて来るのが見えた。これは近江軍が難波宮から難波大道を南下して、大津・丹比道に出たことを示す。吉野宮から伊賀を経て尾張方面に逃亡し、戦線も飛鳥古京など局地に止

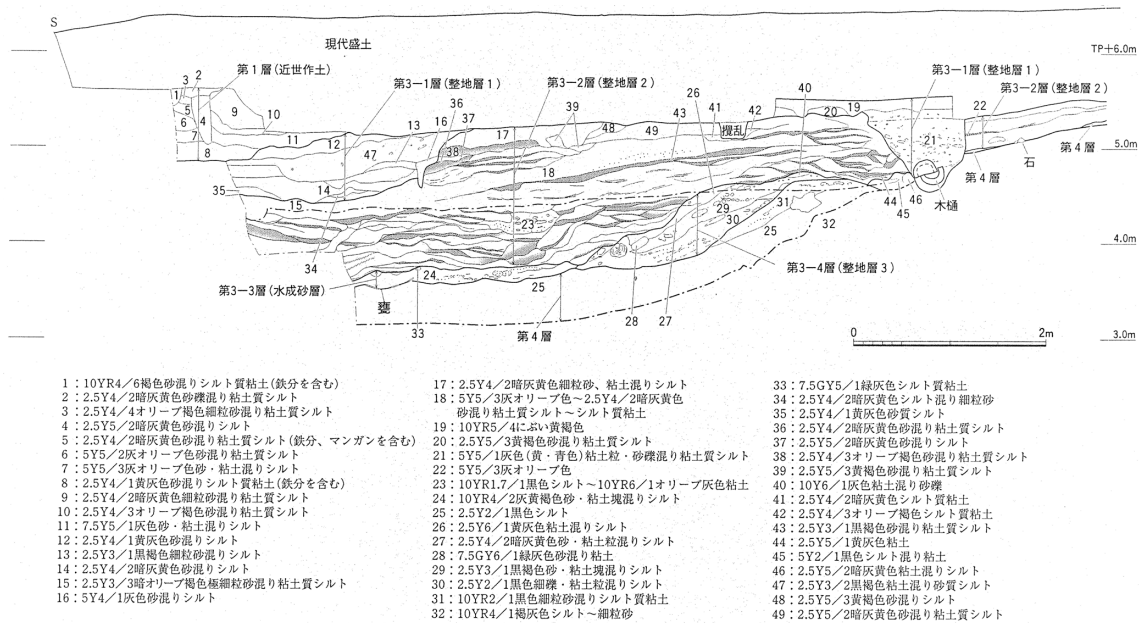


図3 細工谷遺跡 SDO5 - 1次調査地西壁断面図

まっていた大海人軍としては、近江軍の難波宮奪取は致し方のないところであった。反逆者の立場から為政者となった天武帝が、関防に力を入れたことは想像に難くない。

### 3、細工谷遺跡 SDO5 - 1・06 - 1次調査の成果

細工谷遺跡は都市計画道路難波片江線に伴う調査であり、未だ調査は完結していないので、正報告書は刊行されていない。調査担当者の松本啓子氏の完了報告書(大阪市文化財協会2007)をもとに、必要部分を紹介していく。

#### 層序(図2、写真1)

第1層は近世の作土層、第2層は古代末~中世の作土層である。

第3層は古代の整地層で、下位より大きく第

3-1・2・3・4層の4層に分かれる。第3-1層は暗灰黄色シルトや黒褐色砂礫などが主体の整地層で、後述の整地層3によく似ている。褐灰色細粒砂(第5層堆積物)やその下の青灰色粘土(第6層堆積物)が偽礫として混る。本層の上面で柱穴や溝が見つかった。SDO5-1次調査地の木樋暗渠も本層上面に設置された遺構である(以下、整地層1)。第3-2層は第4層の黒色シルトと第5層の褐灰色細粒砂を交互に盛った整地層で、黒と白のコントラストが鯉の鱗文様のように見える地層である。SDO5-1次調査地では良好に見られた。残りのよいところで層厚約150cmを測るが、遺物をほとんど含まない。最上部のみ7世紀末葉~8世紀初頭の遺物が出土した(整地層2)。第3-3層は黒色粘土質砂・礫が主体の7世紀末の水成砂層である。第3-4層は暗灰黄色シルトや黒褐色砂礫などが主体の整地層で、整地層1と同様に褐灰色細粒砂や青灰色粘土が混るが、やや大きな偽礫状になっている。本層は最初の整地層で、湿地性堆積層(第4層)の上に板や土器などを敷いた後、盛っている7世紀後半



写真1 細工谷遺跡 SDO5 - 1次調査地西壁および木樋検出状況

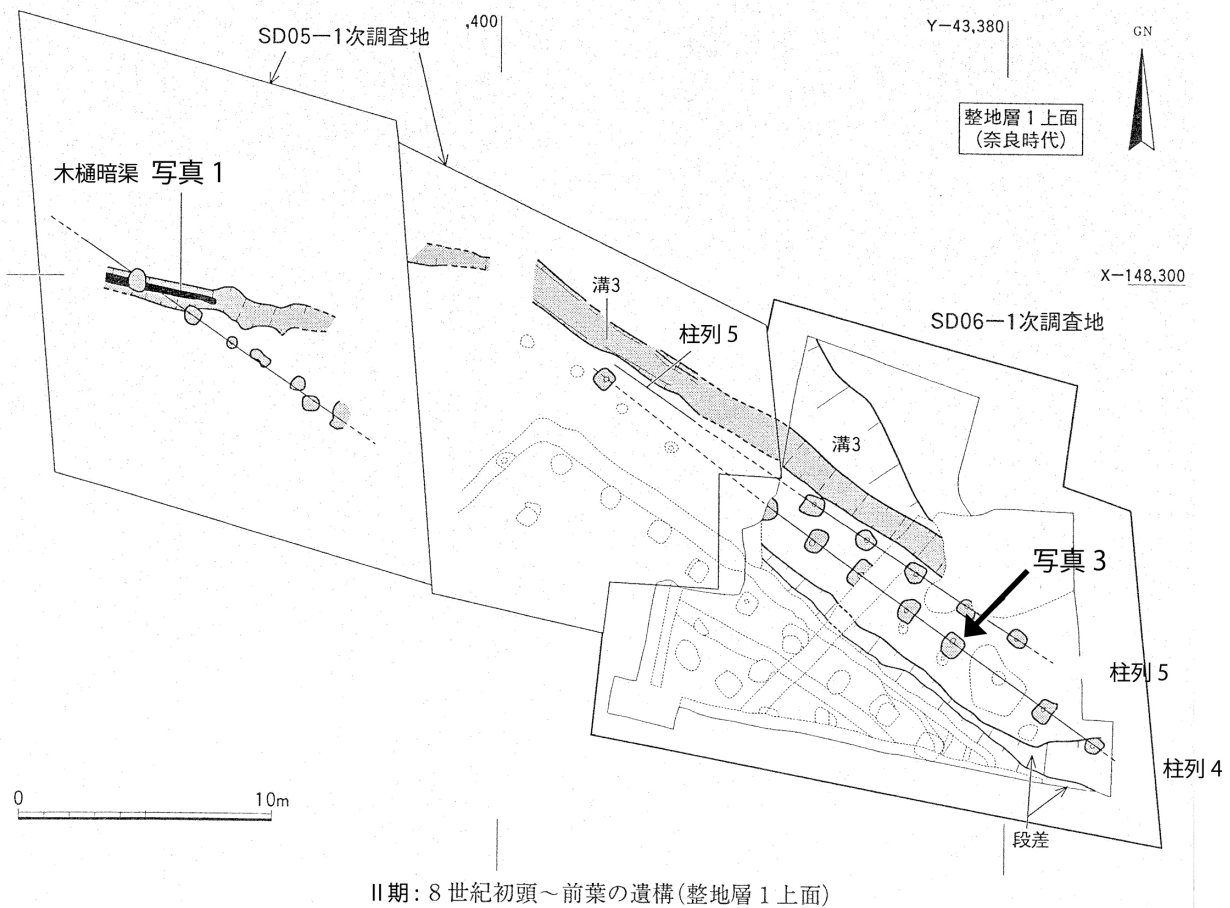
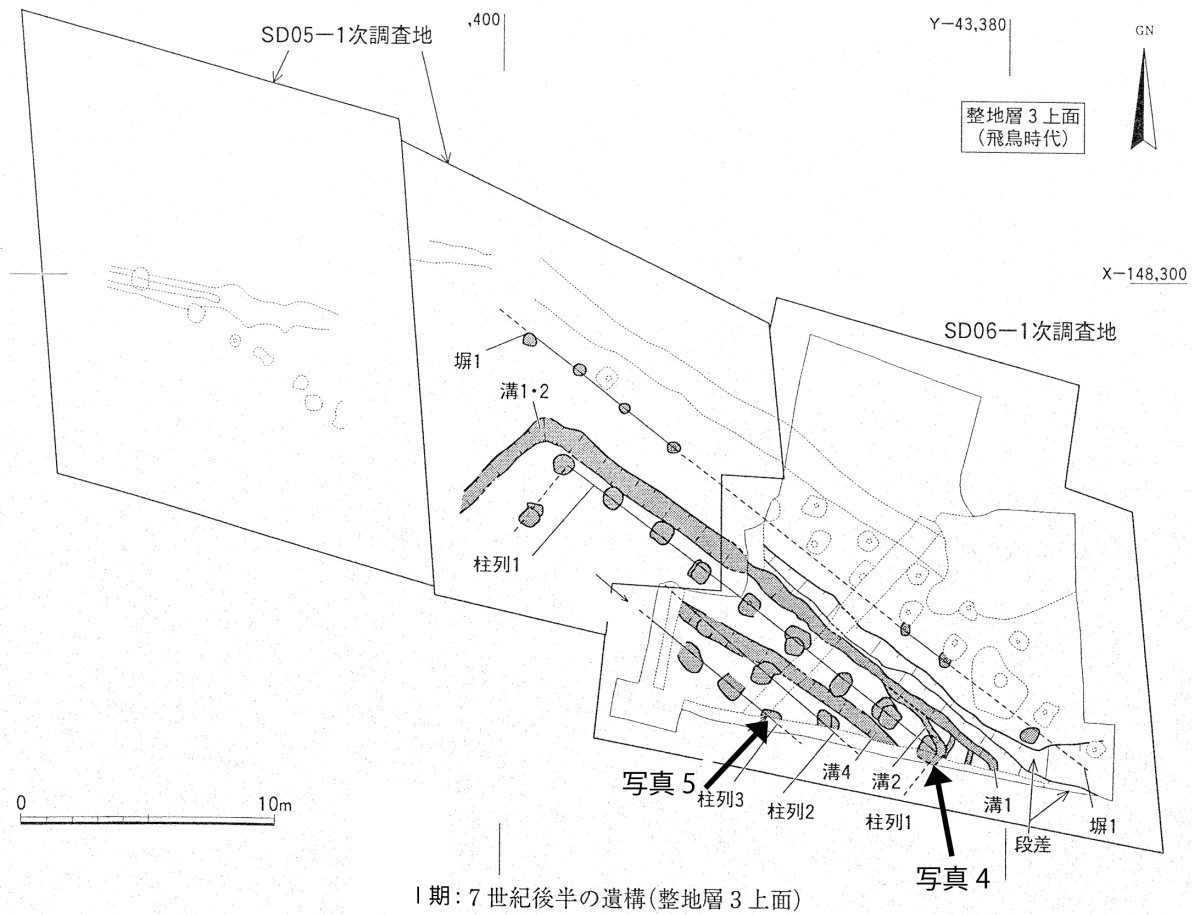


図4 細工谷遺跡 SD05-1・06-1次調査地主要遺構

の整地層である（整地層3）。本層の上面で柱穴や溝が見つかった。これらの遺構の上を第3 - 3層の水成砂層が覆っていた。

第4層は黒色シルト質粘土を主体とする湿地性の自然堆積層で、本層上半はシルトを比較的多く含み、ラミナが攪拌された状態で見られた。弥生時代前期新段階から古墳時代中期までの遺物を含む。本層上面では小穴がいくつか見つかっているが、性格のわかる遺構はない。

第5層は陸水成の褐灰色細～粗粒砂層で、遺物は出土しない。第6層は固く締まった青灰色粘土で、中位段丘層とみられる。

松本氏は第3 - 2層を、第4層の黒色シルトと第5層の褐灰色細粒砂を交互に盛った「鯉の鱗文様のように見える」整地層と表現しているが、版築土層である可能性が高いと思われる。

#### 木樋暗渠と柱穴（図3・4、写真1～5）

木樋暗渠は幅約1m、深さ0.6mほどの断面U字形の溝を掘り、その中に直径25cmほどの木樋を設置して、全体を埋戻している。木樋は針葉樹の丸太で、先ず縦に半截して身と蓋に分け、どちらも内側をコ字状に刳抜いて、再び合わせて管にした。身・蓋とも先端は欠損しているが、約7.5mの長さを測る。暗渠の方向は東で少し南に振り、溝3や柱列4・5とはやや異なっているが、いずれも斜面の等高線にほぼ平行して設置されている。谷の開く方向や溝の高低からみて、水は東、すなわち台地下方に流していたと考えられる。木樋は残存する年輪の数が少ないため、年輪年代を測定できなかったが、層序から8世紀前葉のものと考えられる。

写真3 整地層1上面の柱列4（SD06 - 1次調査区、SP305、北から）

写真4 整地層3上面の建物1（SD06 - 1次調査区、SP346、北から）

写真5 整地層3上面の柱列3（SD06 - 1次調査区、SP354、北から、スケールの折尺は1m）



写真2 細工谷遺跡 SD06 - 1次調査地全景（西から）



写真3



写真4



写真5

## II 研究報告

柱穴の建物・柱列・塀の組み方については、図4に示したとおりである。ただ柱穴を断割った結果、2種類に分かれることがわかった。それは図らずもI期・II期の柱穴の特徴でもある。I期のSP346・SP354は、写真4・5に見られるように柱抜取り穴を有する。建物1も柱列3も人為的に撤去されたことがわかった。対してII期のSP305であるが、柱痕跡が柱掘形の上部のみしか見られない。これは掘形を深く掘りすぎて、埋土で柱の高さを調整した結果ではなく、柱が斜めに埋められたゆえと考える。写真3は北側、すなわち高い方から低い方に向けて撮影したもので、柱は北側、すなわち台地側に倒して立てたものである。柱列4・5はやや方位を異にし、西方で交差すると思われるが、大野城跡の小石垣地区大谷東方土塁B区(図5)や屯水土塁地区F区(図6)の版築土塁を参考にする

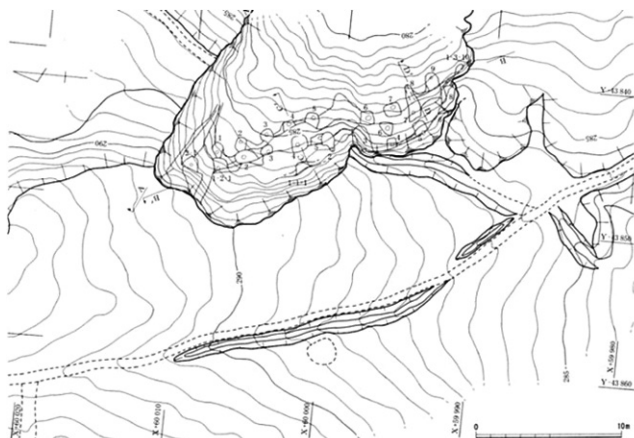


図5 大野城跡小石垣地区大谷東方土塁B区平面図

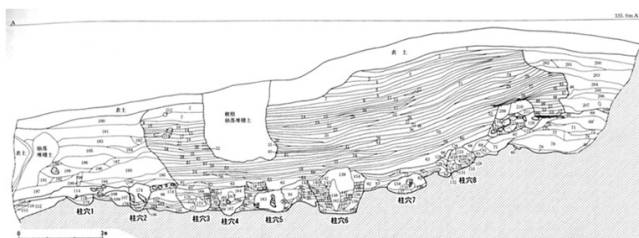


図6 大野城跡屯水土塁地区F区土層断面図

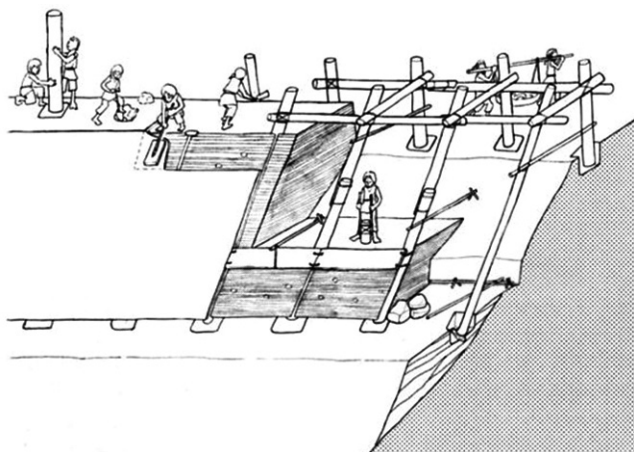


図7 大野城跡 版築工法モデル図

と、傾斜地に土塁を築造する時、2条以上の永定柱(国立文化財研究所2012)(註1)が斜めに立てられたことがわかる。版築土塁の城外壁面に勾配を付けるため、永定柱が斜めに立てられたことが大野城跡で確認された(図7)。細工谷遺跡では柱列4・5がこれに当り、図2で示した第3-2層の版築土塁と相俟って城門を構成していたと考えられる。鞠智城跡の深迫門(図8)は版築土塁をハ字形に配置して出入口を狭めている。また池の尾門(写真6)は、木樋ではないが石組の暗渠を城門付近に築造している。

以上みてきたように細工谷遺跡のII期遺構は、古代山城の施設と親近感がある。ただし層序の節で述べたように、整地層1の下層の整地層2で7世紀末葉~8世紀初頭であり、たとえ整地層1・2が同一工程の所産であるとしても、天武紀8(679)年条の難波羅城築造まで遡らせることは困難である。しかも朱鳥元(686)年正月には、前期難波宮は全焼している(難波大蔵省失火、宮室悉く焚く)。II期には難波羅城は守護すべき中枢を失っていたのである。

### 4、比売許曾神社文書「伝後醍醐天皇綸旨」中の「羅城土居」

ここで細工谷遺跡を難波羅城関係の遺構と考えるに至ったもう一つの根拠について触れておきたい。



写真6 鞠智城跡 池の尾門



図8 鞠智城跡 深迫門平面図

伝後醍醐天皇綸旨（大阪市教育委員会 2005）

比売古曾神社、従東高彦川、至西酒人領、北高津岸、南羅城土居、限四至

大神之、可為敷地之條

官符宣、執達如件、

建武二（1335）年 左大弁 花押

この綸旨は明らかに写しとみられるが、鎌倉幕府が倒れ、建武新政政権が成立した時点での社領安堵という点で、実在性が感じられる。延喜式内社 比売許曾神社は現在、JR鶴橋駅東方300mに位置するが、旧地は同駅北西400mの現、産湯稲荷神社の地であったと伝えられている（暁鐘成 1926）。その四至は、東限が高彦川で現千間川、西限が酒人領で高津宮周辺（高津宮に「比売許曾神社が地主神である」という社伝がある）、北限が高津岸で現東高津公園周辺の段差である。南限の「羅城土居」と推定した細工谷遺跡は、現産湯稲荷神社の南方450mにあり、蓋然性が高いと思われる（図1）。

## 5、宰相山遺跡の六甲山系花崗岩と天照山への眺望

「難波烽（とぶひ）」は文献史料には現れない。しかし大陸との門戸をなした九州北部から、瀬戸内海最奥部の難波を経て、帝都のある大和の地に急を報せる時、難波烽は欠くべからざるもので、その地は真田山公園（宰相山遺跡）であろうと、滝川政次郎氏によって指摘された（滝川 1958）。

烽（烽燧台）については、『養老軍防令』にいくつかの規定があるが、約20kmごとに設けられたこと。昼は煙を焚き、夜は火を放ち、伝達方向の烽燧台（前烽）が反応しなければ、走って行って伝えるべきことなどが記されている。そのためには前烽との間に眺望を遮るものがないことが必須である。

『続日本紀』和銅5（712）年正月条に「河内国高安烽を廃して、始めて高見烽、および大倭国春日烽を置き、平城に通ぜしむ。」と平城遷都に伴う烽燧台の変更が記載されている。難波烽から高見烽、高見烽から春日烽が見えなければならない。

今、六甲山系花崗岩が出土した8世紀の土壌SK201（図9・写真7）の地からは、建物が建て込

だとはいえ、暗峠北側の天照山を見通すことができる。天照山は江戸時代から近代に至るまで、堂島の米相場を東海地方に報せる「旗振山」であったことはよく知られている。滝川氏も天照山が高見烽であろうことは度々指摘された。

天照山は現在、稜線が大阪府・奈良県の府県境になり（図 10）、幅 2.5 m、高さ 0.5 m ほどの土塁が府県境に沿ってはしり、土塁上には国土交通省のコンクリート杭が打設されている。この土塁が何時築造されたかはわからないが、頂上部に約 5 m 四方の方形の石組とその西に 4 m × 20 m の作業場と思われる平坦地がある（図 11）。この石組が何時のものかは不詳だが、高見烽は当地を除いて他に候補地はない。

『出雲国風土記』には烽燧台の所在地が記されている。その内の暑垣烽推定地は島根県史編纂時に簡単な発掘調査が行われ（島根県 1926）、内田律雄氏はその地を再調査している（内田 1995）（図 12）。それによると島根県安来市車山の三角点のそばに 126 尺（38.2 m）× 72 尺（21.8 m）の作業場と思しき楕円形の平坦地と、石で囲われた直径 10 尺（3.0 m）の円筒形の焼穴があったようである。

韓国釜山市機張郡で発掘調査された南山烽燧台は朝鮮時代のものだが、長軸 14.0 m、短軸 12.0 m、高さ 5.0 m の煙台の横に居住区と作



写真 7 宰相山遺跡 SK201 六甲山系花崗岩出土状況（東から）

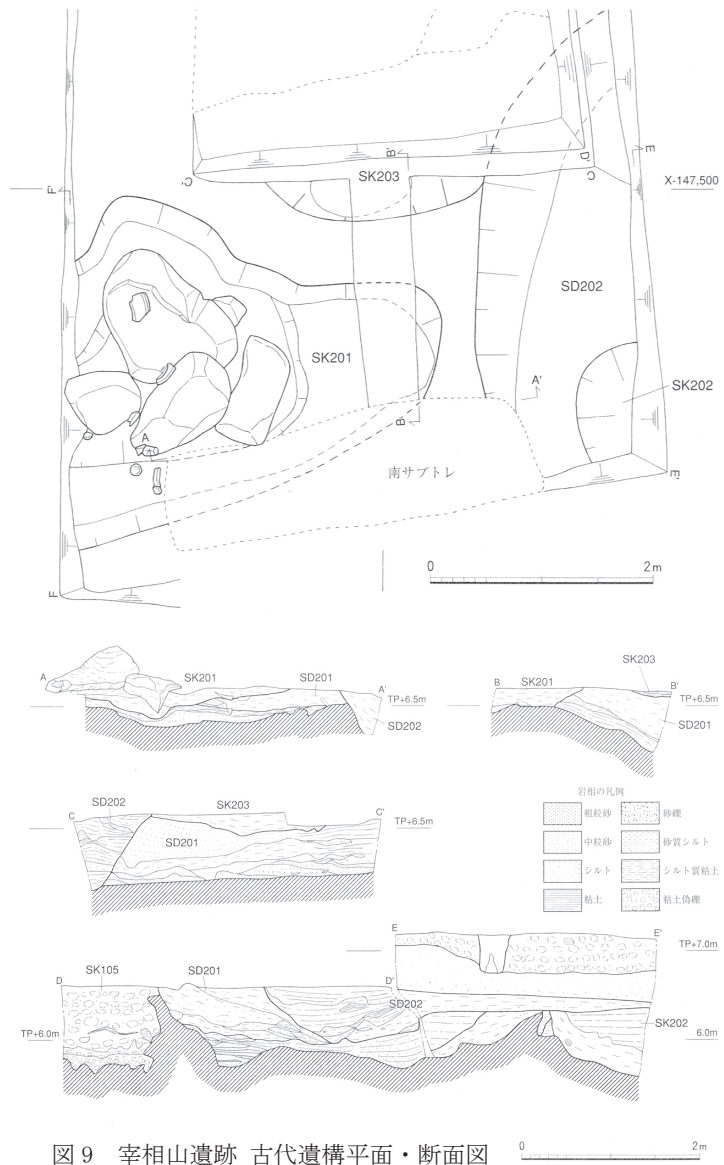


図 9 宰相山遺跡 古代遺構平面・断面図



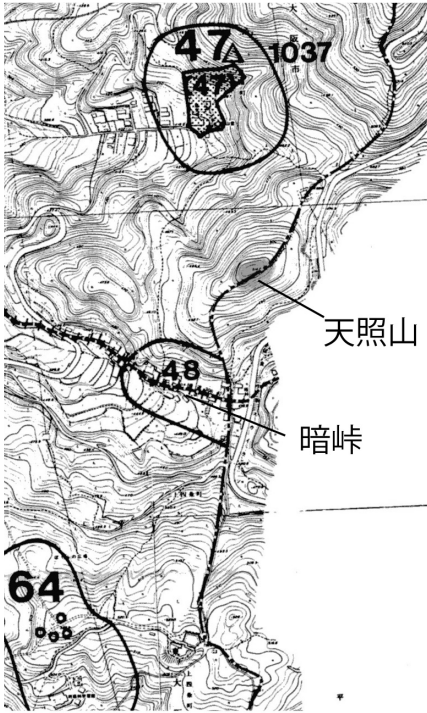


図10 天照山（高見烽推定地）位置図  
（大阪府教育委員会 1986 に加筆）

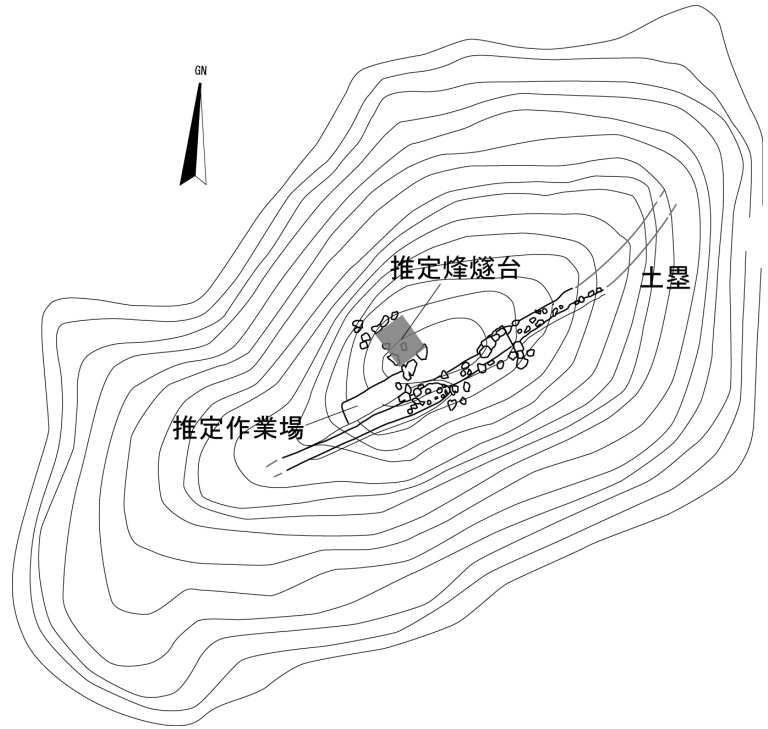


図11 推定高見烽遺構配置図（縮尺 1 : 2,500）



写真8 宰相山遺跡 SK201 検出地より  
天照山を見る

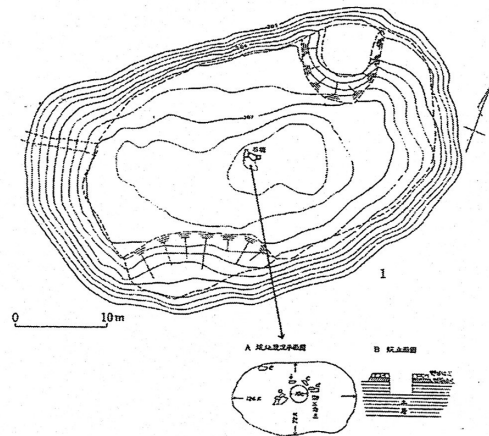


図12 出雲国暑垣烽推定地（島根県安来市車山）  
（内田 1995）

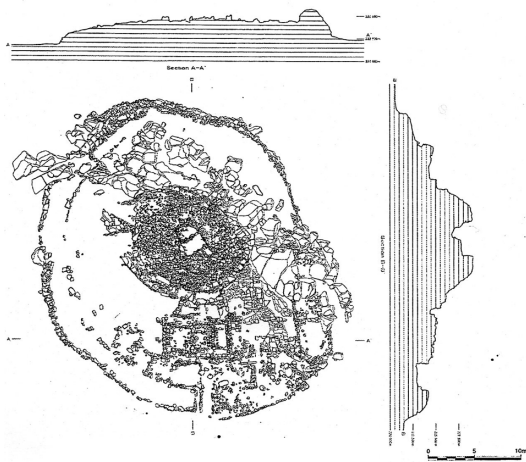


図13 韓国 釜山市機張郡南山烽燧台遺構配置図  
（機張郡・韓国城郭学会 2012）

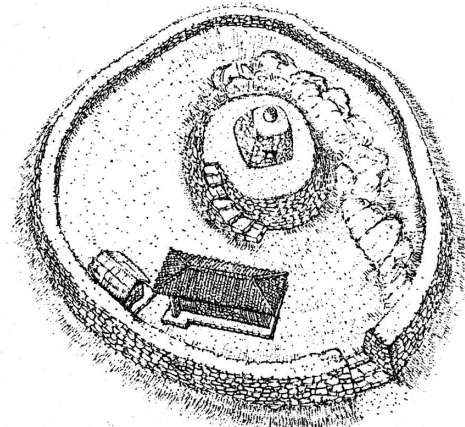


図14 南山烽燧台推定復元図（李喆永氏による）

## II 研究報告

業場をもつものである（図 13・14）。このように烽は 24 時間監視しなければならないから、煙台のみならず作業場や居住区が必要なのである。

### 6、結びに代えて

難波京の防衛システムを細工谷・宰相山遺跡から考えた。細工谷遺跡のⅡ期遺構は 8 世紀前葉の可能性が高い羅城の城門と考えられる。天武 8 年の初築の城門は掘立柱建物と柵列で構成されていたと思われる。宰相山遺跡の六甲山系花崗岩を、天照山との位置関係から難波烽の部材と憶測してみた。今後、古代烽燧台研究が発展することを心から望む。

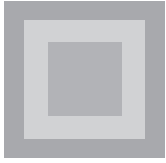
最後に、畿内の古代遺跡からは紀年銘木簡が土器に共伴することが多く、畿外の土器編年よりも実年代を押えやすい（佐藤隆 2000）。細工谷Ⅰ期の羅城城門は、掘立柱建物と柵列で構成され、Ⅱ期になって版築土塁と木樋暗渠に変更されたとなると、古代山城研究に与える影響は決して小さくない。正報告書刊行に向けて、更なる詳細な検討が望まれる。

#### 註

(1) 版築土塁を構築する際、堰板を支持するための柱を、福岡県教委は「堰板柱」、熊本県教委は「版築工法における支柱」と呼ぶが、韓国の城郭では、この種の支柱を「永定柱」と呼ぶので、それに従いたい。

#### 引用・参考文献

- 暁鐘成 1926 『摂津名所図会大成』 浪速叢書刊行会『浪速叢書』第 7・8
- 内田律雄 1995 『『出雲国風土記』の五烽』 山本清編『風土記の考古学』③ 同成社 pp. 217 - 233
- 大阪市教育委員会 2005 『比売許曾神社文書について』 大阪市文化財総合調査報告書 63
- 大阪市文化財協会 1999 『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 大阪市文化財協会 2000 『難波宮址の研究』第十一
- 大阪市文化財協会 2004 『宰相山遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 大阪市文化財協会 2007 『平成 17・18 年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査（SD05 - 1・06 - 1）完了報告書』
- 大阪府教育委員会 1986 『大阪府文化財分布図』
- 岡山県文化財保護協会 2013 『史跡 鬼城山』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236
- 機張郡・韓国城郭学会 2012 『機張南山烽燧照明のための国際学術会議論文集』（韓文）
- 熊本県教育委員会 2012 『鞠智城跡』Ⅱ
- 国立文化財研究所 2012 『韓国考古学専門事典—城郭・烽燧篇—』学研文化社（韓文）
- 佐藤隆 2000 「古代難波地域の土器様相とその史的背景」大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第十一 pp. 253 - 265
- 島根県 1926 「烽侯」『島根県史』第 4 巻 pp. 579 - 595
- シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会 1997 『烽 [ とぶひ ] の道—古代国家の通信システム』青木書店
- 滝川政次郎 1958 「難波の烽」歴史教育研究会編『歴史教育』第 6 巻第 5 号 pp. 19 - 25
- 長山雅一 1988 『難波土居』と書かれた文書について 大阪市文化財協会編『葦火』15 号 p. 8
- 福岡県教育委員会 2010 『特別史跡大野城跡整備事業』Ⅴ 下巻 福岡県文化財調査報告書第 225 集



# 発掘成果から見た平安時代の上町台地とその周辺

村元健一

## 要旨

平安時代の上町台地を考えることは難波宮停廃後の土地利用の変遷を考えることとなる。このテーマについては文献を用いた研究が多い中、発掘資料を用いた積山洋氏による研究が行われ、概要が示されている。本稿では積山氏の驥尾に付し、近年の発掘成果を加味し、平安期の上町台地およびその周辺の遺跡の消長を示し、その意味を考察した。結論として、難波宮中枢部の耕地化は周辺よりも若干遅れること、上町台地上から官衙的な施設が姿を消すのは10世紀ごろであることを改めて指摘した。また台地上の遺構が、難波宮の停廃やそれに伴う寺院の移転により姿を消していくのに対し、四天王寺周辺のみは遺構が継続し、中世へとつながっていく。

## 1、はじめに

後期難波宮が廃絶した後の難波については、難波津の土砂の堆積による荒廃、三国川開削による港津としての重要度の低下により、難波が従来より有していた地政学的な地位が大きく低下し、難波全体が衰退したととらえられてきた。しかし発掘成果によると難波宮北西地域の大川流域では平安時代の遺構や遺物が継続して発見されており、平安時代の難波の実態についての見直しが始まっている。発掘調査の知見を集成し、分析を加えたものに（積山洋 2002）があり、基礎となる資料の提示と遺構の消長が分析され、都市的な繁栄が北の大川沿岸、すなわち国衙周辺と南の四天王寺周辺とに分化したと述べる。以後、10年以上が経ち、発掘件数は大幅に増加し、これまで不明な点が多かった大川北岸の天神橋遺跡や、難波宮南方の上本町遺跡などの調査が進み、資料は着実に蓄積されてきている。また、難波宮址、大坂城跡、大坂城下町跡の報告書が相次いで刊行され、過去の調査成果の見直しが行われている（大阪市文化財協会 2003、2004a, b）。

本稿の目的は、以上のような新たな知見を含めて再度、平安時代の遺跡の消長を分析し、難波宮廃止後の上町台地の変遷を復元することを目的とする。まずは地域ごとに遺跡の変遷を追っていくことにする。

## 2、各遺跡の概要（図1・表1）

### ①難波宮中枢部

難波宮中枢部の朝堂院、内裏空間のこれまでの調査では、後期難波宮廃絶層の上は中世の作土が覆っており、平安期の遺構は見られず、遺物もほとんど出土していない。難波宮廃絶時の瓦がそのままの状況で堆積している様子から、廃絶後、ほとんど人の手が入らなかった様子が見て取れる。

一方で、朝堂院、内裏の空間から少し外れた地域ではわずかながら変化が見られる。内裏西方、上町台地の西縁に奈良時代末、おそらく難波宮停廃直後に火葬墓が造られており（大阪市文化財研究所 1992）、その後、北に数基の墓が営まれる（大阪府文化財センター 2002）。難波宮の北限と考えられ

表1 上町台地とその周辺の平安時代の遺構・遺物（その1）

	遺跡名	調査回数	遺構	遺物	特記事項	出典
1	東天満1丁目所在遺跡	HX99-1	奈良末～平安初期の溝、土壇、柱穴			積山 2002
2	天満橋遺跡	TJ00-2		奈良～平安中期の遺物、緑釉陶器、銅銭、八稜鏡破片	中世まで遺構が継続	積山 2002
3	大坂城下町跡	AZ87-3, 4	奈良末～平安初期の溝水成層。上面に杭群（棧橋か）	人面墨画土器、平安後期の八稜鏡、隆平永宝		大阪市文化財協会 2004a
4	大坂城下町跡	OJ91-11	平安後期～鎌倉時代の包含層	9Cの土器、緑釉陶器		大阪市文化財協会 2004a
5	大坂城下町跡	OJ92-18	9C前半の道路側溝、井戸、土壇、柱穴	黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器		大阪市文化財協会 2004a
6	大坂城下町跡	OS88-82	9Cごろの包含層 9～10Cごろの土壇	9C前半ごろの土器、緑釉陶器、隆平永宝		大阪市文化財協会 2004a
7	大坂城下町跡	OJ92-22	土壇、ピット	9C前半の土器、緑釉陶器、隆平永宝。平安中期以後の瓦器、白磁碗、複弁蓮華文軒丸瓦		大阪市文化財協会 2004a
8	大坂城下町跡	OJ97-1	8C末～9C前半の溝、平安時代の井戸、柱穴			積山 2002
9	大坂城下町跡	OJ00-13	古代の柱穴（時期不明）			積山 2002
10	大坂城下町跡	OJ92-33	8C末～9C初頭の井戸、10Cの井戸	青磁、緑釉陶器		大阪市文化財協会 2004a
11	大坂城下町跡	OJ97-6	9C前半ごろの土壇、柱穴	緑釉陶器、黒色土器		積山 2002
12	大坂城下町跡	OJ98-8	奈良時代後半の建物			積山 2002
13	大坂城下町跡	OJ96-11	奈良時代後期の井戸			積山 2002
14	大坂城下町跡	OJ97-7	奈良時代後半の水成層	人面墨画土器、曲物		積山 2002
15	大坂城	OS87-100	9Cの井戸2基、土壇、柱穴 10～11C以後の井戸、土壇、柱穴 12Cの井戸、土壇、柱穴（数は減少）	奈良末～平安初の東播系の複弁蓮華文軒丸瓦		大阪市文化財協会 2003
16	大坂城	OS92-19		奈良末～平安初の多量の土器、緑釉陶器	西から東への落ち込み	大阪市文化財協会 2003
17	大坂城	OS86-6		平安前期の複弁蓮華文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦、9Cの緑釉陶器		大阪市文化財協会 2003
18	大坂城	OS99-72	奈良時代後半～平安初の正方位の掘立柱建物、溝、土壇	陶質の新羅土器		積山 2002
19	大坂城	OS88-31・90-50	7C～9C初の建物群、井戸、土壇	拒鵠鷄尾、黒色土器の硯、水滴、「厨」墨書土器、蓮華文軒丸瓦	飛鳥時代以降継続した重要施設か	大阪市文化財協会 2003
20	大坂城	OS99-48	奈良末～平安前期の建物			積山 2002
21	大坂城	OS97-1	9C前半の板組の方形（下は六角形）井戸	緑釉陶器		積山 2002
22	大坂城	OS96-52	10C中ごろの柱列、土器埋納壇			積山 2002
23	大坂城	OS98-55	8C末の東西溝と塀	重圈文軒丸瓦、円面硯		積山 2002
24	大坂城	OS86-35		被熱した奈良末～平安初の唐草文軒平瓦		大阪市文化財協会 2003
25	大坂城	OS92-6		被熱した唐草文軒平瓦と平安前期の複弁蓮華文軒丸瓦		大阪市文化財協会 2003
26	大坂城	大阪府庁	東西方向の谷谷の北で8C前半～中ごろの火葬墓、8Cの火葬墓、9C前半の木棺墓、9C中ごろの木棺墓			大阪府文化財センター 2002
27	難波宮跡	NW87-20	平安初の火葬墓			大阪市文化財協会 1996
28	細工谷遺跡	NW85-1	9Cに埋まる井戸	黒色土器		積山 2002
29	細工谷遺跡	SD96-1・97-1	9C後半～10C前半の柱穴群の後、耕作地		平安になると遺物量は激減	大阪市文化財協会 1999
30	難波京朱雀大路遺跡	NS94-10	平安期に埋まる東西溝			積山 2002
31	難波京朱雀大路遺跡	NS89-22	奈良～平安の包含層	摂津国分寺跡同范の複弁蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、緑釉陶器		積山 2002
32	摂津国分寺			平安後期の花菱文軒平瓦、連珠文軒平瓦、「四」字がかろうじて判読できる軒平瓦		積山 2002
33	四天王寺旧境内遺跡	ST96-4	8C末に埋まる井戸 10C前半に埋まる井戸2	8Cの井戸から「米屋」「申」「東」「酒十」などの墨書土器、木製鏡、10Cの井戸から石製巡方		積山 2002
34	四天王寺旧境内遺跡	ST89-6	9Cに埋まる南北溝	黒色土器		積山 2002
35	天神橋遺跡	TJ01-1	古代のピット			
36	天神橋遺跡	TJ08-1	11C後半の井戸（SE201）12C前半の土壇（SK202）、12C後半の井戸（SE203）			
37	天神橋遺跡	TJ08-2	第4層	奈良～中世前期の磚、瓦		
38	天神橋遺跡	TJ10-1	8～11Cの溝、土壇	緑釉		
39	天神橋遺跡	TJ11-4		奈良～平安時代の遺物（土師器、瓦）		

表1 上町台地とその周辺の平安時代の遺構・遺物（その2）

	遺跡名	調査回数	遺構	遺物	特記事項	出典
40	天神橋遺跡	TJ12-4	土壌、溝 SK65(11C 後～12C 前)、 SD63(12C～13C)、SP64(12C)			
41	西天満3丁目所在遺跡	WT04-1		9C 中葉の緑釉陶器の碗か皿		
42	天満本願寺	TN04-1	10C～11Cの溝(SD303)			
43	大坂城下町跡	OJ05-1		8C 後半～9Cの遺物	周辺に遺構か	
44	大坂城下町跡	OJ05-7	奈良末に埋まる土壌(SK901) 平安初頭に埋まる井戸 (SE901, 902) 平安末に埋まる遺構 (SE903, SK902, SK903) 平安の溝(SD901)			
45	大坂城下町跡	OJ05-8		奈良・平安の土器		
46	大坂城下町跡	OJ06-1	8C 末の井戸(SE102) SB101, 102 平安末から鎌倉初の建物		奈良から鎌倉まで 遺構が継続する	
47	大坂城下町跡	OJ06-2	ピット(平安か)		0J98-12の遺構と 同時期か	
48	大坂城下町跡	OJ08-4		黒色土器 A	付近に集落か	
49	大坂城下町跡	OJ08-6	建物(9CSP18, SB1)	緑釉火舎	奈良前半と平安初期 の遺物が多い。 青磁、白磁など 平安後期の遺物若干。	
50	大坂城下町跡	OJ11-3	奈良～平安時代の古土壌(第8層)	緑釉陶器		
51	大坂城下町跡	OJ92-17		平安時代の土器		
52	大坂城下町跡	OJ95-4		8C 後半～9Cの土器		
53	大坂城跡	OS85-28		平安前期の複弁蓮華文軒丸瓦		大阪市文化財協会 2003
54	大坂城跡	OS03-13	奈良中期～平安前期の柱穴、土 壌		13世紀の作土で 覆われる	
55	大坂城跡	OS04-3	土壌	奈良～平安の遺物?		
56	大坂城跡	OS07-8	柱穴		時期の詳細は不明	
57	大坂城跡	OS08-5	東西の溝	平安の灰釉陶器 1点		
58	大坂城跡	OS09-1	作土	黒色土器	下層から奈良時代の 瓦、墨書土器、 土馬	
59	大坂城跡	OS11-4	奈良～平安初の建物		OS90-50 と一連	
60	大坂城跡	OS12-19	8C 後葉～9C 初の整地層		地震痕跡	
61	大坂城跡	OS06-3	ピット		OS95-12 と一連か	
62	難波宮跡	NW80-9	12Cの土壌、火葬墓			大阪市文化財協会 2004b
63	難波1丁目所在遺跡	NA05-1	奈良時代の包含層 平安後期～鎌倉時代の包含層			
64	細工谷遺跡	SD01-3	平安後～中世の南北溝			
65	細工谷遺跡	SD05-1・ 06-1	9～10Cに整地し水田化			
66	細工谷遺跡	SD06-3	SD83(9C) 段差		9c 末には五合谷 が壇状にされ、耕 作地にされていた。	大阪市文化財協会 2007
67	細工谷遺跡	SD08-1	平安後期の井戸(SE05)		斜面部の土地利用 の変化	
68	難波京朱雀大路遺跡	NS09-4	整地層	整地層より奈良後半～平安初期 の遺物多数		
69	上本町遺跡	UH09-2	8C 末～9C 初の井戸(SE542)、 11C 後半～12C の井戸(SE555)			大阪市文化財協会 2010
70	上本町遺跡	UH11-4	11Cの土壌(SK05)			
71	上本町遺跡	UH11-12	古代の建物			大阪文化財研究所 2012
72	上本町遺跡	US06-1	9C 半ばまで遺構存続	緑釉陶器(9C 中葉)		
73	摂津国分寺	SK07-1		鎌倉時代までの瓦	遺物は16世紀まで。 建物は鎌倉で 廃絶か。	
74	伶人町遺跡	星光学院	平安前期の建物15棟、溝	墨書土器、緑釉陶器、ガラス器、瓦	13世紀に次のピーク	西近畿文化財調査研究所 2006
75	伶人町遺跡	RJ05-1	10C 末～11C 初の井戸(SE201) と奈良時代の遺構群			
76	伶人町遺跡	RJ12-1	11C 後半～13C の落ち込み、溝 など			
77	四天王寺旧境内遺跡	ST04-1	奈良時代後半～平安初(10C 半 ～12C 前)の包含層、12C 半ば ごろのピット	瓦多い		
78	四天王寺旧境内遺跡	ST12-5	土壌(SK19(平安I～II古) SK20(9C 前半～10C 前半))、井 戸(平安II)	平安後期の複弁蓮華文軒丸瓦		

※1 番号の1～34は(積山2002)の番号を踏襲している。 ※2 出典については単行の報告書以外の完了報告書は紙幅の関係で省略した。

## II 研究報告

る東西方向の谷を隔てて墓地となっていたことが想定されるのである。一方で、東方官衙域では大きく遅れ、12世紀ころの土壙や火葬墓が見つまっている（大阪市文化財協会 2004b）。このように飛鳥から奈良時代にかけて宮室が営まれ、まさに中心であったこの地は平安時代には空白地となっていたのである。

### ②難波宮北西部

上町台地およびその周辺域では最も平安時代の遺構・遺物が分布する地域であり、（積山 2002）により難波宮廃絶後の一方の核とされている地域である。当地の特徴は、上町台地が北西方向に伸びており、北面は大川に向かって急速に落ち込み、西側は北側に比するとややゆるやかな傾斜で下っていく。台地の突端部、島町1丁目周辺には整然とした配置をもつ建物群が確認されており、明らかに一般的な集落とは異なる様相を示しており、「撰」字のある墨書土器が見つまっていることから、「撰津職」との関係が指摘されている。遺構の年代は奈良時代～平安時代初期が中心である。

北西の上町台地を降りた大川沿岸でも瓦が出土する地域があり、「国府」の遺称地との説もある「石町」地名があることから（井上正雄 1922、河音能平 1989）、付近に官衙があると想定されている。

### ③天神橋地域

近年、特に調査成果が蓄積されてきた地域である。しかし面積の狭い調査が多いことと古代にいたるまではかなり深くまで掘削する必要があることから、古代の遺構が分かっている調査件数は少なく、平安時代の遺構としてはTJ08-1次調査の11～12世紀後半に継起的に掘られた井戸や、TJ10-1次調査の8～11世紀の溝くらいである。一方で、遺物としては奈良～平安時代にかけてまとまった量が出土する例が多く、特に瓦や磚のほか、緑釉陶器も出土していることが注目され、付近に寺院や官衙の存在を想定することが可能であろう。

### ④上町台地西方

近世の船場地域にあたり、東横堀川の西側に分布する。平安時代を通してほぼ同じ範囲に継続して存在する。井戸や小型の柱穴が見つかっており、緑釉陶器の出土も見られる。中世へとつながる遺構群である。

### ⑤難波宮南方

難波宮南側は難波京推定域にあたり、近年は特に飛鳥～奈良時代の正方位に則った建物群や溝が見つまっている。ただ、難波宮の周辺域はその実態はあまりよく分かっていない。この地域の土地利用の変遷を示す上で興味深いのは細工谷遺跡の事例である。周知のように細工谷遺跡には飛鳥時代から平安時代初期にかけて「百済尼寺」が存在したものと考えられている。この寺の廃絶は平安時代前期にあたると思われるが、その後、谷の中の造成が行われ、耕地として整備される。同時期の井戸も見つまっているが、いずれも耕作に関係するものと思われる。難波宮廃止後に、宮の中核部より早い時期に耕地化が進んだと見なすことができるだろう。

細工谷遺跡の西南方、上町台地の脊梁部にあたる。近年、調査面積は少ないにもかかわらず、難波京域を考える上で大きな成果を上げている地域である。井戸や建物跡が見つまっているが、特徴的なのは、奈良時代の難波京に関連する遺構群を経てそのまま中世にも継続しているものが多いことであ



図1 平安時代の遺物・遺構検出地点

る。遺跡の南方には四天王寺があり、(積山 2002)が難波宮停廃後の核の 1 つと見ている。平安期になって以後のこの遺跡の動態は、四天王寺と関連付けて考えるべきものであろう。

#### ⑥四天王寺周辺

四天王寺旧境内遺跡と西側に広がる伶人町遺跡である。奈良時代以降、遺構の分布が顕著となり、平安時代の遺構が密集している。四天王寺の門前の隆盛を如実に示している。

#### ⑦周辺の寺院跡

このほか、寺院跡の様子も概観しておきたい。百濟寺の遺構という説が有力な堂ヶ芝廢寺は 7、8 世紀が中心となっており、平安時代以降は目立った遺物もなく、細工谷と同じ傾向を示す。四天王寺東方の摂津国分寺は出土瓦から鎌倉時代までは存在していたようである。このように、国分寺と四天王寺は難波宮停廃後も継続し、特に四天王寺は平安時代以降、地域の核となり、都市域を形成するようになるのである。

### 3、遺跡の消長 (図 2)

以上が平安時代の遺跡の概要である。これを時系列で遺跡の消長を示していきたい。ただし、掘立柱建物については遺構の年代を絞り込むことが困難な事例が多く、幅を持った年代となっている。年代については難波宮停廃後の間もない時期である 9 世紀初頭までは遺構が各所で見つかる傾向があるため、この時期を 1 期とし、以下、2 期 9 世紀、3 期 10 世紀、4 期 11 世紀と分けた。

図 2 を見て注目されるのは、まずは上町台地北西部、台地上にあった遺構群が 9 世紀に激減し、10 世紀以降、ほとんど見られなくなる。官衙的な施設の存在は比較的短期間であり、10 世紀以降は場所を移すと考えられる。関係すると思われる摂津国衙の移転の状況を (河音能平 1989) に従いまとめておく。

難波京内か? → 江頭 (延暦 24 (804) 年) → 豊島郡家の南 (天長 2 (825) 年) → 河辺郡為奈野移転案 (承和 2 (835) 年。実施されず) → 鴻臚館 (承和 11 (844) 年申請、認可) → 10・11 世紀には渡辺

近年の地形復元では、古代から中世には上町台地西裾の沿岸トラフを北流する河川が大川とは合流せず、高麗橋周辺の大川南岸に砂堆が東西に発達していた (趙哲済 2004)。そこにできた入江が港湾施設の候補地になるのだろう。延暦 24 年に遷された国衙の候補地として上町台地北西部の建物群を挙げることも可能だが、「江頭」という地名にはややそぐわない。承和 11 年の鴻臚館、10 世紀以降の国衙の場所についても不明だが、9 世紀、第 2 期以降の上町台地の状況を見ると、延暦 2 年以降の国衙は台地下にあった可能性が高い。例えば調査地点 15 で柱穴や井戸、瓦などが見つかったことは注目される。また大川両岸で見つかる瓦や磚なども関連する遺物である可能性がある。

一方で東横堀西側の船場地域では継続的に遺構が検出されており、集落が存続したことが分かる。これは中世にも継承される。大川対岸の天神橋遺跡もほぼ同じ動向である。上町台地上には 3 期の 10 世紀以降、ほとんど遺構が見られなくなるが、上本町遺跡の南部と四天王寺周辺は遺構が連続する。

難波宮の停廃に伴い、京城である台地上の建物は姿を消し、百濟王氏の移住に伴い百濟寺、百濟尼寺も移り、台地上の景観は一変する。やがてこうした地域が耕地へと変わり、中世には難波宮の中核部まで耕地がおよんでいくようである。また難波宮の西辺が、8 世紀末から墓地となる。遅れて東方





第1期 8～9世紀初頭の遺構遺物



第2期 9世紀の遺物・遺構検出地点



第3期 10世紀の遺物・遺構検出地点



第4期 11世紀の遺物・遺構検出地点

図2 平安時代の遺構の変遷

## II 研究報告

官衙域も墓地となっていくが、ここでは瓦が出土していることから、中世寺院との関係で注目すべき遺構となろう。

### 4、おわりに

以上のように平安時代の発掘成果を再度集成した。積山氏の論考から10年がすぎ、その間に天神橋遺跡、上本町遺跡の調査成果を中心に大きな成果を上げているが、新たな資料が増えたとはいえ、遺構・遺物の分布が旧難波宮中枢部を挟んで南北に分かれるという積山氏の指摘された事象は変わらない。以下、本稿での分析を通しての所見である。

- ① 難波宮中枢部の土地利用の在り方は依然として不明である。近年は難波宮の西・北・東の縁辺部にある谷部の調査も行われているが、いずれも後期難波宮の廃絶時の地層の上は中世の作土層となっている。平安期の遺物の出土も少なく、宮の廃絶後は空間地となっていたのだろうか。
- ② 台地上では細工谷遺跡での変化が注目される。平安初頭に寺院の廃絶にともない、遺構、遺物ともに減少し、耕作地へと変容する。一方で隣接する上本町遺跡は依然として建物などが検出されている。細工谷遺跡が寺院という中核施設を失ったことにより土地利用が大きく変化するが、上本町遺跡は継続して生活の痕跡が残されており、南隣の四天王寺との関連でとらえるべきであろう。
- ③ 上町台地北西部で確認される官衙的な建物は、上町台地の上であるが、10世紀から台地上の遺構はほとんど見られなくなる。大川にかけて台地を降りた地域および大川北岸の天神橋遺跡などで平安期の瓦が一定量見つかっていることは、港湾や国衙との関係も考慮する必要があるだろう。

### 参考文献

- 井上正雄 1922 『大阪府全志』 卷之二、大阪府全志発行所
- 大阪市文化財協会 1992 『難波宮址の研究』 第九
- 大阪市文化財協会 2003 『大坂城跡』 VII
- 大阪市文化財協会 2004a 『大坂城下町跡』 II
- 大阪市文化財協会 2004b 『難波宮址の研究』 第十二
- 大阪市文化財協会 1999 『細工谷遺跡発掘調査報告』
- 大阪市文化財協会 2007 『細工谷遺跡発掘調査報告』 II
- 大阪市文化財協会 2010 『上本町遺跡発掘調査報告』 I
- 大阪文化財研究所 2012 『上本町遺跡発掘調査報告』 V
- 大阪府文化財センター 2002 『大坂城跡発掘調査報告』 I
- 河音能平 1989 「中世渡辺津の形成過程－平安時代の難波」 直木孝次郎先生古稀記念会編『古代史論集』 下（のち同氏 2002 『大阪の中世前期』 清文堂出版）
- 積山洋 2002 「難波京の変容－奈良末から平安前期の様相をめぐって－」 『条里制・古代都市研究』 第18号 pp. 117-136
- 趙哲済 2004 「大坂城下町跡の自然地理的背景について」 大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』 II pp. 347-356
- 西近畿文化財調査研究所 2006 『伶人町遺跡発掘調査概要報告書』



# 受け継がれた都市計画—難波京から中世へ—

## 市川 創

### 要旨

本稿では、7世紀中頃～中世の難波地域における地割の変遷を考古学的なデータをもとに論じた。

まず古代においては、難波京の測設原点について私案を呈示し、また建物のあり方、とくに北河堀町所在遺跡で検出した大型建物群から、難波京の完成度およびその南端について論じた。

中世では、地割と耕作土の分布から、上町台地北端部と四天王寺周辺を対照的に把握した。前者では、地割の変更と耕作土が広く分布することにより、難波京の景観は大きく変更されたと考えた。いっぽう後者では、豊臣期直前まで難波京の条坊を踏襲した地割が残存し、耕作土は検出されない。よって、難波京の時期に形成された景観が中世末期まで維持されたと評価した。

### 1、はじめに

本稿が論じるのは、7世紀中頃～中世の難波地域における、地割の変遷である（註1）。上記の時間幅のなかで、とりわけ、前期難波宮（＝難波長柄豊碕宮）遷都～長岡京遷都までの難波京の時代と、その後、豊臣秀吉により大幅に改造されるまでの中世の地割を比較的に論じる。また地割は、すなわち古代から継続的に都市であり続けたと目される上町台地にあつては、都市計画と換言することができよう。

本論では、発掘調査で得られたデータをもとに、主として都市計画について論じることで、古代から中世へと大阪の町がどのような変遷をたどったかを概観したい。

### 2、難波京の景観

難波京については、近年、積山洋氏が精力的に研究を進めており、現段階における研究の集大成といえる書籍が公刊された（積山2013）。積山氏の論点は基本的に肯うことができるもので、筆者が新たに論じるべき点は必ずしも多くない。また紙幅の制限もあるため、ここでは積山氏の所説を逐一紹介

表1 難波京の時期設定と土器編年の対応（（積山2012）をもとに作成、一部加筆）

難波京	土器編年*	暦年代	天皇名	画期	備考	
I	1期	Ⅲ中	7世紀中葉	孝徳朝	大化2(646)年：難波遷都、白雉3(652)年：難波長柄豊碕宮完成、白雉6(655)年：飛鳥遷都	「初期難波京」
	2期	Ⅲ新	7世紀中葉～後葉	～天武朝前半		
II	1期	Ⅳ古	7世紀後葉～末	天武朝後半	天武12(683)年：複都制の詔、朱鳥元(686)年：難波宮焼亡	「前期難波京」
	2期	Ⅳ新	7世紀末～8世紀初頭	～聖武朝の再建	～神亀3(726)年：難波宮再建開始	
III	1期	V古	8世紀前葉～中葉	聖武朝	～天平16(744)年：難波皇都に、天平17年：平城遷都	「後期難波京」
	2期	V中	8世紀後葉	～桓武朝	～延暦3(784)年：長岡遷都	
IV期	V新	8世紀末～9世紀初	桓武朝	長岡京遷都～平安初期	「晩期難波京(仮)」	

(※)「土器編年」は、佐藤隆2000「古代難波地域の土器様相とその史的背景」大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』(第十一)に基づく。



図1 難波京条坊復元図と地域区分(条坊復元図は(積山2013)をもとに一部改変)

表2 地割に係わる古代～中世の遺構集成((積山2013)をもとに加筆)

番号	時期	調査地	遺構名(※)	世界測地系X	世界測地系Y	備考	報告書
1	I	NW31次	前期難波宮、 内裏前殿南面柱列心	-146, 183. 66	-43, 682. 70		61
2	I	NW1993-005	前期難波宮、南門中心	-146, 622. 67	-43, 687. 81		46
3	I	NW2002-008・ 1987-054	前期難波宮、 東八角殿中心点	-146, 236. 28	-43, 607. 99		47
4	I	NW33・34次	前期難波宮、 内裏南門中心点	-146, 235. 40	-43, 683. 29	東八角殿中心座標から算出	30
5	I	NW2000-006	SA201南端	-146, 766. 90	-43, 997. 97	南1路に干渉する可能性	13
6	I?	NW2000-006	SD210南端	-146, 765. 80	-44, 004. 27	SA201の西側	
7	I	NW1982-033・ 045	SA504東端	-146, 830. 75	-43, 883. 29		42
8	I	四天王寺南大門	現存門心	-149, 330. 64	-44, 319. 82		-
9	I	四天王寺西門	現存門心	-149, 242. 34	-44, 409. 82		-
10	I	OS2011-016	SD601c西端	-145, 232. 94	-44, 867. 62	難波津に関連?	52
11	I?	UH2012-006	SD10・12交点	-147, 292. 49	-44, 159. 61	南3路と1/4町路交点か	53
12	I?	UH1992-002	SD201北端	-147, 393. 46	-44, 014. 20		7
13	II	四天王寺東大門	現存東階段上端心	-149, 149. 64	-44, 161. 62	条坊X座標の基準点	-
14	II	OS1988-097	SD503西端	-147, 035. 45	-43, 844. 09	南2路の側溝か	42
15	II	SS1995-002	SD511西端	-147, 334. 76	-43, 189. 11	条坊とは係わらないか	44
16	II	SS1995-002	SF501西端	-147, 344. 96	-43, 190. 21	条坊とは係わらないか	
17	II?	SD2008-002	SD02	-148, 272. 16	-43, 181. 12	東2路の側溝か	18
18	II	UH2008-008	SD01南端	-147, 506. 03	-43, 965. 14	西1路側溝か/Ⅲ期には廃絶か	19
19	II	OS2011-016	SD601b西端	-145, 231. 68	-44, 867. 64	難波津に関連?	52
20	II?	OS1992-057	SD301西端	-146, 890. 92	-44, 160. 88	方位: 東偏7度/ 南1.5路側溝の可能性	42
21	II?	UH1994-001	SD東端(遺構番号未定)	-147, 294. 09	-44, 040. 79	南3路側溝か	-
22	II?	UH2013-003	【SD301北端】	-147, 865. 56	-44, 226. 05	西2路側溝か	54
23	III	OS1988-031・ 1990-050	SD501東端	-145, 435. 85	-44, 274. 67	北5路側溝か/但し他の遺構に比べ誤差大きい	4・21
24	III	OS1988-083	【SD02】	-145, 574. 45	-44, 302. 57		5
25	III	OS1998-055	SD03東端	-145, 718. 15	-44, 251. 07	南側に並行する塀SA301あり/宅地内道路か	37
26	III	OS1990-130	SD501南端	-145, 671. 55	-44, 509. 07	宅地内道路か	43
27	III	府庁5B6A	溝1北部	-145, 753. 15	-44, 063. 67	宅地内道路か	59
28	III	OS1990-112	【SD502西端】	-145, 969. 35	-44, 474. 37	西3路まで2.37mと近接	43
29	III	OS1999-068	SD02南端	-147, 067. 35	-43, 965. 59	西1路側溝か	40
30	III	OS1999-008	SD01南端	-147, 076. 15	-44, 246. 09	宅地内道路か	38
31	III	US2004-002	SD01東端	-148, 190. 20	-44, 337. 20	宅地内道路か	15
32	III	SD2008-002	SD01	-148, 272. 16	-43, 181. 12	東2路の側溝か	18
33	III	NW1985-037	SF01屈曲点心	-148, 446. 65	-43, 764. 32	宅地内道路か	28
34	III	UH2009-002	SB600・601中心	-148, 601. 25	-43, 978. 10	西1路上の橋脚遺構	49
35	III	ST1996-004	SD01南端	-149, 067. 85	-43, 985. 12	西1路側溝か	33
36	III	ST1989-006	SD02南端	-149, 079. 74	-44, 519. 52	西3路側溝か	29
37	III	NS1994-010	SD05東端	-149, 289. 05	-43, 764. 13	南10.5路側溝か	9
38	III	OS2011-016	SD601a西端	-145, 234. 28	-44, 867. 56	難波津に関連?	52
39	III	UH2010-006	SP6・7・13南端	-148, 372. 05	-44, 307. 96	1/4町を画する橋か	22
40	III以前	DA2013-001	【SD01南端】	-149, 495. 20	-44, 245. 03	四天王寺南方/ 西2路側溝か	56
【 船場地域 】							
41	IV	OJ1992-018	SD1001・1002	*	*	西偏8度/溝が並行、 道路側溝の可能性あり	45
42	IV	OJ1997-001	SD179	*	*	西偏8度	35
43	IV	OJ2013-003	SA462・463	*	*	西偏8度	57
【 難波大道関係 】							
44	II	大和川今池	難波大道北端	-155, 960. 00	-43, 803. 75		60
45	II～III?	ND2010-002	SD01南端	-152, 677. 49	-43, 775. 64	検出範囲短い	23
46	中世後期	ND2001-006	SD01南端	-153, 223. 15	-43, 759. 28	14～15世紀に機能	14
47	中世後期	KL2009-001	SD4001北端	-155, 176. 76	-43, 807. 42	15世紀の溝に切られる	50
【 中世の遺構(主要なもののみ掲載) 】							
48	中世前期	UH2011-008	SD13西端	-147266. 82	-44112. 45	非条坊路踏襲。区画溝か。	25
49	中世後期	UH2009-003	SD301東端(非溝芯)	-148, 353. 31	-44441. 21	南7路を踏襲か	21
50	中世後期	ST1994-007	SD102西端	-148893. 27	-44181. 12	南9路を踏襲か。深さ3.7m、 四天王寺の「堀」?	31

※【 】を付した遺構は、上位あるいは近傍に中世の溝が存在するもの。

## II 研究報告

介することを避け、原則として難波京に関する理解は積山氏の論考に従うものとする。

乱暴であることを省みず本論と関係する要点を挙げれば、難波京の都市計画（＝条坊）の特徴は以下のように抽出できよう。

- A. 測設時期： 孝徳朝に地割が施工された可能性があるが、それは宮殿周囲に限定されたもので、かつ施工の尺度も異なっていた。難波京の本格的な測設は天武朝に行われたとみられる。
- B. 造営尺： 900尺（≒265.5m）を単位とする。
- C. 測量の原点： 東西方向については、難波宮の中軸線を基線とする。南北方向については明確な原点（基線）が見出せないが、現在の四天王寺東大門を仮に基点とする。
- D. 京の範囲： 東は中心大路から2街区分、西は中心街区から4街区分とみられる。南北は少なくとも四天王寺～難波宮の範囲には測設され、さらにその南北にも京城が広がっていた可能性がある。
- E. 京の完成度： 台地上に位置し起伏が大きいという地形上の制約もあり、正方方位の地割が面的に京城を覆うには至らない。難波宮中軸線を延長した中心大路さえ、存否に疑問がもたれる（高橋2007）。

なお、難波京の時期区分と土器編年の対応については、表1に示したので参照されたい。また、難波京については北辺が確定しておらず、他の京のように〇条・〇坊との呼称を与えることができない。そこで本稿では、便宜的に図2に示した仮称により、京の道路を呼称する。また表2には、積山氏が集成された条坊関係遺構に、最近年の発掘調査成果、および後述する中世の遺構を加えたものである。

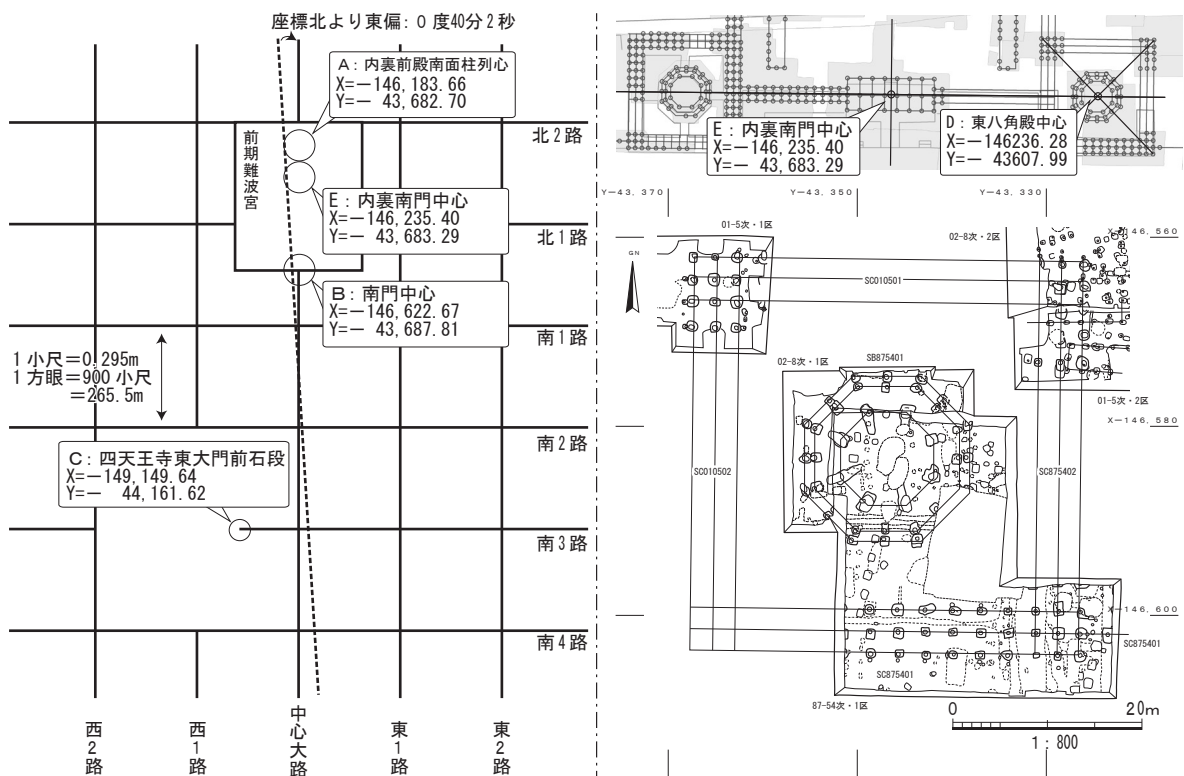


図2 難波京条坊の作図方法と呼称

以下では、2つの論点について、筆者なりに積山氏の難波京論の補足を試みたいと思う。

**難波京の測設原点（図2）** 上記Cでふれたように、難波京の条坊復元案を作成するにあたり、作業上、現在の四天王寺東大門の座標を使用している。しかしながら、天武朝における測量原点が、宮の南門から約3km離れたこの地点にあったとは、まず考えられない。本来の測量原点は、難波宮中軸線上（ないしその延長線上）の、難波宮の内部（ないしその周辺）に置かれていたであろう。

ここでは、有望視される候補として、内裏南門の中心点を挙げる（図2右）。この点を取り上げる理由は、①難波京と時期的に近い藤原宮・京の状況、および②四天王寺東大門座標を基点として作図された難波京条坊復元案において、復元線が当地点を通過すること、さらに③宮殿における内裏南門の重要性も加味して、である（註2）。

ただ、この地点は発掘次数が古く、直接的にその座標を求めることができない。そこで次善の策として、内裏南門の東に位置する東八角殿の中心座標をもとに、前期難波宮の偏角（東偏0度40分2秒）を考慮して内裏南門中心座標の復元を試みた（図2）。その結果、世界測地系に基づく平面直角座標系第VI系における内裏南門中心の座標は、 $X=-146,235.40$ 、 $Y=-43,683.29$ となる。この座標値に基づき、四天王寺東大門との南北距離を求めると、2919.64mとなる。この間には11区画が想定されるので、2919.64mを11で除すと、1区画あたりの距離（すなわち難波京の測設単位）は265.422mと求められる。この数値をさらに900尺で除すと、

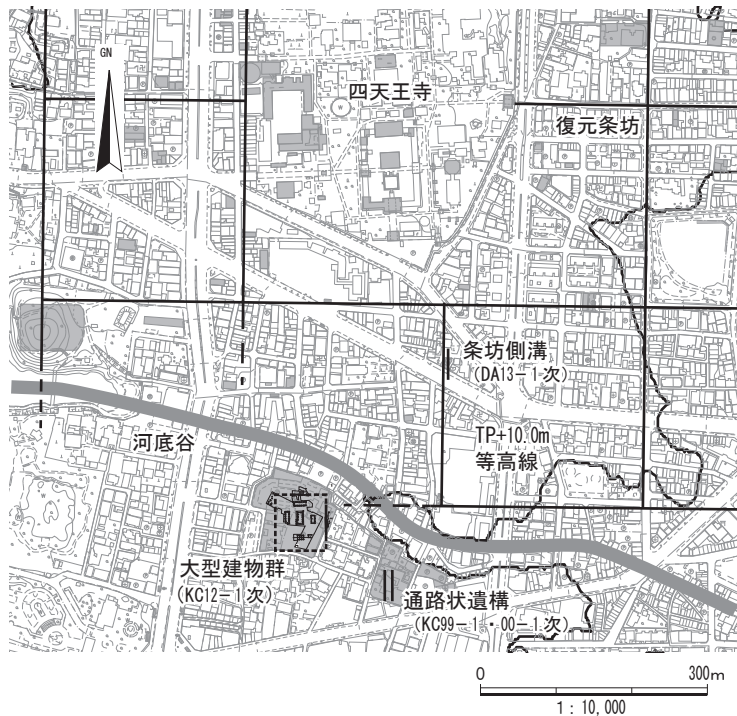
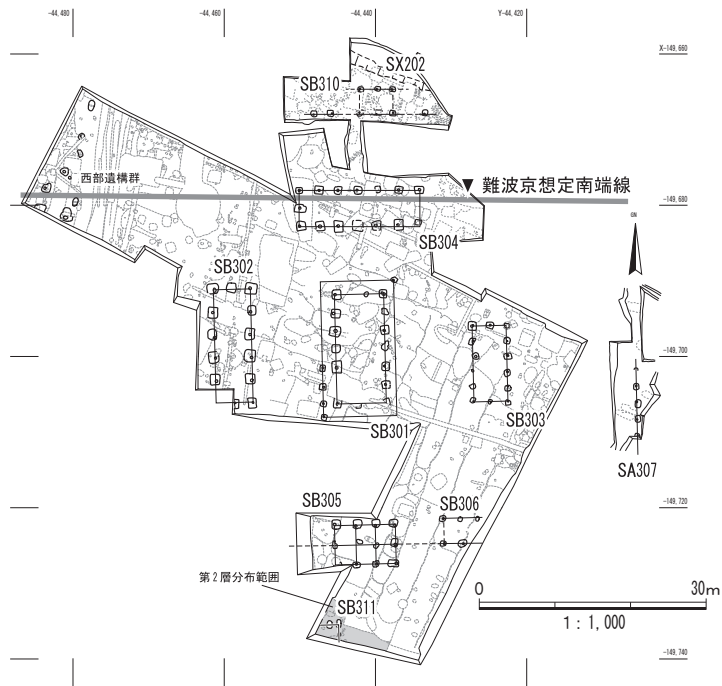


図3 北河堀町所在遺跡検出の大型建物群(上図)と周辺地図(下図)

表3 難波京建物一覧(1)

地域	番号	調査次数	遺構名	時期	間数		建物の形式		方向	方位	総長		報告書	
					桁行	梁行					桁行	梁行		
難波宮周辺	1	NW1990-020・NW139-NW61	SB701	未詳	未詳	3	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:1度	8.2	26.9か	6・27・62	
	2	NW1990-020・NW126-NW1982-41・NW1993-8	SB702	不詳	未詳	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:1度	31m以上か	4.33	2・6・8・26	
	3	NW1990-020	SB703	不詳	4	不明	掘立柱	側柱建物	東西か	東偏:1度	6.7	1.5以上	6	
	4	NW170	SB01	不詳	3以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	正方位	8.94以上	5.96	1	
	5	NW2009-001	SB419	Ⅱ期か	4以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:2度	8.45以上	4.10	20	
清水谷	6		SB501	Ⅰ期以降	4	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:1度	7.0	3.8		
	7	OS1991-003	SB506	Ⅰ期以降	3	1以上	掘立柱	側柱建物	南北か	西偏:9度	5.2以上	2.1以上	42	
	8		SB511	Ⅰ期以降	1以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:20度	1.3以上	3.5		
	9	OS1999-016	SB301	Ⅱ期	4	2	掘立柱	側柱建物	南北	西偏:5度	6.5	3.9	41	
	10	OS1995-012	SB01	Ⅰ期	不明	3	掘立柱	不明	東西か	東偏:5度	不明	3.6	10	
	11	OS1987-124	SB01	Ⅰ期か	4以上	1以上	掘立柱	側柱建物	南北か	西偏:3度	9.5	不明	3	
細工谷	13	SD1996-001・1997-001	SA648+649	Ⅱ期	5以上	2以上	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:13度	7.8以上	1.6以上	32	
	14	SD2005-001・2006-001	柱列1	Ⅱ-2期	8か	1以上	掘立柱	側柱建物?	東西	東偏:37度	18.4か	—	48	
上本町	15		SB301	Ⅲ期	2以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	ほぼ正方位	4.9以上	4.9以上		
	16		SB302	Ⅲ期	2以上	1以上	掘立柱	側柱建物	不明	東偏:約1度	2.8以上	2.4以上		
	17	US2006-001	SB303	Ⅲ期	2以上	未詳	掘立柱	側柱建物か	不明	西偏:約1度	2.3以上	—	16	
	18		SB305	Ⅲ期	未詳	2	掘立柱	廂付き?側柱建物	南北か	西偏:約1度	3.78以上	—		
	19	UH2010-001	SB125	Ⅱ期	2以上	1以上	掘立柱	側柱建物	東西か	東偏:0.5度	3.65以上	1.15以上	51	
20	TX1997-001	SB201	Ⅲ期	3以上	2以上	掘立柱	側柱建物	南北か	西偏:約9度	6.9以上	4.2以上	12		
四天王寺周辺	21	星光学院調査地(2地区)	SB01	Ⅲ期か	3以上	2	掘立柱	総柱建物	東西	東偏:2度	6.55以上	3.6	63	
	22		SB02	Ⅲ期か	1以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:1度	2.72以上	3.6		
	23	星光学院調査地(3地区)	SB01	Ⅲ期	5	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:1度	9.65	4.25	63	
	24		SB02	Ⅲ期	5	2	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:1度	9.25	3.6		
	25		SB03	平安	4以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:1度	8.3	4.15		
	26		SB04	Ⅲ期か	5	2	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:1度	11.15	4.65		
	27		SB05	Ⅲ期か	5	1以上	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:2度	6.1	1.8以上		
	28		SB06	Ⅲ期か	5	2	掘立柱	側柱建物	南北	西偏:1度	10.3	4.35		
	29		SB07	Ⅲ期	1以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:1度	3.75以上	4.2		
	30		SB08	Ⅲ期	2以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:2度	5.2以上	4.45		
	31		SB09	Ⅲ期か	2以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:3度	4.15以上	2.95		
	32		SB10	Ⅲ期か	2以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:1度	2.85以上	2.55		
	33		SB11	Ⅲ期か	1以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:1度	2.95以上	3.45		
	34		SB13	Ⅲ期か	3	2以上	掘立柱	総柱建物	南北	東偏:2度	6.35	3.9以上		
	35		SB14	Ⅲ期か	5	1以上	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:2度	10.4	2.2以上		
	36		SB15	Ⅲ期か	5	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:1度	9.45	3.6		
	37	SB16	Ⅲ期か	3以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	西偏:3度	7.9以上	4.25			
	38	SB17	Ⅲ期か	3以上	2以上	掘立柱	側柱建物	南北か	西偏:1度	5.5以上	2.35以上			
	39	SB18	Ⅲ期か	4以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	西偏:1度	8.6以上	4.2			
	40	SB19	Ⅲ期か	3以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:2度	6.4以上	4.2			
	41	SB20	Ⅲ期か	2以上	1以上	掘立柱	側柱建物	南北か	東偏:2度	5.7以上	3.15以上			
	42	UH2013-006	SB119	Ⅲ期か	3以上	2以上	掘立柱	側柱建物	南北か	東偏:1度	5.4以上	4.1以上	55	
大川沿岸	43	OS1990-050	SB501	Ⅱ期か	4以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:5度	7.0以上	3.6	43	
	44		SB502	Ⅲ期	4	2(?)	掘立柱	側柱建物	東西	偏角なし	8.6	4.6		
	45		SB503	Ⅲ期	4	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:2度	10	4.8		
	46		SB504	Ⅳ期か	5	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:2度	10.5	4.4		
	47		SB505	Ⅲ期	2以上	2(?)	掘立柱	側柱建物	南北か	偏角なし	3.8以上	4.4		
	48		SB506	Ⅲ期	6	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:1度	14.2	5.2		
	49		SB507	Ⅲ期	2	2	掘立柱	総柱建物	—	西偏:2度	4.1	3.8		
	50		SB508	Ⅲ期	2以上	1以上	掘立柱	側柱建物	南北か	西偏:1度	5.0以上	2.4以上		
	51		SB509	Ⅲ期	2以上	1以上	掘立柱	側柱建物	南北か	東偏:1度	3.6以上	2.5以上		
	52	OS1991-054	SB510	Ⅲ期か	3以上	2(?)	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:5度	6.8以上	4.9	43	
	53	SB511	Ⅲ期か	4以上	2(?)	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:14度	6.5以上	3.8			
	54	OS2011-004	SB50	Ⅰ期以降	4以上	2(?)	掘立柱	側柱建物	南北	西偏:1度	8.25以上	不明		24
	55	OS1995-019	SB501	Ⅳ期か?	2以上	1以上	掘立柱	側柱建物	東西か	西偏:約1度	4.0以上	2.0以上		11



表 3 難波京建物一覧(2)

地区	番号	調査回数	遺構名	時期	間数		建物の形式	方向	方位	総長		報告書	
					桁行	梁行				桁行	梁行		
大川沿岸	56	OS1990-051	SB501	Ⅲ期	2以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:7度	4.5以上	4.5	43
	57		SB502	Ⅲ期	3以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:7度	5.0以上	3.4	
	58		SB503	Ⅲ期	3以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:7度	5.5以上	4.2	
	59		SB504	Ⅲ期	2以上	1以上	掘立柱	側柱建物	東西か	東偏:7度	1.6以上	3.8以上	
	60		SB505	Ⅲ期	2以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:7度	3.9以上	4.0	
	61		SB506	Ⅲ期	2以上	2以上	掘立柱	総柱建物	不明	東偏:7度	3.2以上	2.7以上	
	62	OS1999-048	SB301	Ⅲ期	3	2	掘立柱	総柱建物	東西	東偏:5度	7.16	5.2	39
	63		SB303	Ⅲ期	2以上	2か	掘立柱	側柱建物	東西	東偏:7度	7.6以上	4.7	
	64	OS1997-001	SB101	Ⅲ期	3以上	2	掘立柱	側柱建物	東西	正方位	4.3以上	4.0	36
	65	OS1996-016	SB01	I期以降	2以上	2	掘立柱	総柱建物	南北か	西偏:3.5度	1.8以上	5.5	34
	66		SB02	Ⅱ期以降	2以上	2	掘立柱	総柱建物	南北か	西偏:3.1度	1.5以上	4.9	
	67	OS1991-032	SB501	Ⅲ期	3以上	1以上	掘立柱	側柱建物	南北か	正方位	7.8以上	2.2以上	43
	68		SB503	I期	2	1以上	掘立柱	側柱建物	—	西偏:約2度	3.2	1.9以上	
69	SB505		Ⅲ期	4以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	西偏:約5度	6.7以上	4.2		
その他	70	OJ2008-006	SB1	Ⅳ期	3	2以上	掘立柱	側柱建物	東西か	西偏:4.0度	5.50	1.8m以上	17
	71	SS1995-002	SB501	Ⅱ期	3	3	礎石立	総柱建物	—	西偏:10度	5.4	4.5	44
	72		SB502	Ⅱ期	2	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:27度	2.0	1.5	
	73	NW1988-014	SB401	Ⅲ期	3以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:29度	4.3以上	3.5	42
	74		SB402	Ⅲ期	2以上	2	掘立柱	側柱建物	南北	東偏:27度	3.0以上	3.5	
	75	KC2012-001	SB301	Ⅱ期	8(6)	5(3)	掘立柱	側柱建物(廂付)	南北	西偏: 0.5~1.0度	14.44 (18.04)	6.52 (10.12)	58
	76		SB302		5	2	掘立柱	側柱建物	南北		14.97	4.67	
	77		SB303		5	2	掘立柱	側柱建物	南北		10.08	4.54	
	78		SB304		6	2	掘立柱	側柱建物	東西		15.92	4.79	
79	SB305		3		2	掘立柱	総柱建物	—	7.98		5.10		

(表註)

- 1) 難波京域と想定される地域で検出された柱穴群のうち、隅柱を検出し建物と復元できる遺構を抽出した。
- 2) 時期は表1に示した難波京の時期区分による。
- 3) 建物の全形が把握できない遺構は、検出長の長い辺を便宜的に「桁行」とした。
- 4) 「方位」は、座標北に対する建物の振れを示している。閉合トラバースおよびGPS測量による座標取り付けによるもの、トータルステーションによる測量図を1/500道路地図に合成し求めたものは0.1度、それ以外の方法で測量されたものについては1度単位で記載した。「約」を付したものは、何らかの理由でこれらと同等の精度が期待できないものである。

1尺 = 0.2949m が導かれる。従来援用してきた藤原京の数値 (0.2950m) と1尺あたり1mmのわずかな差であるが、これが現状で算出可能な、遺構に即した難波京の造営尺である (註3)。

**難波京の建物と南端** 条坊に係わる可能性のある溝などに関心が払われる一方で、建物についてはこれまで体系だった集成と分析が行われてこなかった。表3として示したデータは、前稿 (市川2013) に若干の追加と修正を加えたものである。なお、表3の地域名は、図1に示したものと対応している。

難波京は台地上に立地する京であるため、後世の攪乱等による遺跡の破壊を考慮する必要があり、また調査密度の違いも影響する可能性がある。しかしそれを差し引いても、表3から読み取れるように、難波京の建物はその全域に分布するものではなく、また時期によって建物は主たる分布域を変えている。さらに重要なことは、京内とはいえ、必ずしも建物が正方位に乗らないことである。むしろ、安定して正方位に乗った建物が建設されたのは、比較的広い平坦面が広がる難波宮～四天王寺間に限定されると言える。

さて、2012年度に北河堀町所在遺跡で実施した発掘調査 (KC12-1次、図1-A地点) において、難波京の建物と、京の南端について考えるにあたり興味深い知見が得られたので、以下に紹介しておく。この調査では、上町台地を南北に分断する「河底谷」の南側で、復元条坊 (南12路) をまたぐ形で、大型建物群を検出した (図3、表3-75~79)。その中心建物 SB301 は四面に廂をもつ南北棟の掘立

柱建物で、廂を含めた平面プランは桁行8間(18.04m)、梁行5間(10.12m)と大型である。その性格(有力氏族の宅地ないし官衙であろう)、および立地(京内か京外か)は、直接的な証拠を欠くものの、難波京の評価に大きく影響する。筆者は報告書において、(1)難波京の他の地域では原則として条坊をまたぐ建物はないこと、(2)主殿が公的建物に一般的な東西棟でなく南北棟であることから、この建物群は京による規制を受けておらず、したがって当地は京外であると評価した。

最近の調査で、四天王寺よりも南で条坊側溝と見られる遺構を検出している(DA13-1次、図1-B地点、表2-40)。これにより、難波京の南端は四天王寺を越え、南12路以南に及んだ蓋然性が高まった。しかし北河堀町所在遺跡での知見と評価は、「河底谷」以南では、京は計画されながら実際には敷設されなかった可能性が高いといえよう。

**小結** 以上の事柄などから、不十分ながら条坊と呼べる地割が整備された難波京のイメージが把握できる。この難波京の景観は、長岡京への遷都後、どのような変遷をたどるのだろうか。次節で論じることとする。

### 3、中世難波地域の地割と景観

長岡京遷都後、平安時代～中世の難波地域における地割や景観について、考古学的な資料に基づいた論考は必ずしも多くない。船場地域の下層遺跡を扱ったもの(松尾1999)、上町台地北端部を扱ったもの(松尾2001)、四天王寺周辺の主に「堀」に防御的な性格を与え、周辺の景観と四天王寺の寺域について論じたもの(豆谷1996)などがあるが、いずれも地域的な言及に留まっているのが現状であろう。以下では、①地割に係わる遺構、および②耕作土の分布をもとに、中世難波地域の景観を概括的に考えてみたい。

**地割に係わる遺構** まず、中世の地割に係わる遺構として、溝を取り上げる。表2には、地割に係わる中世の遺構についてもその一部を掲載している。遺構番号の22、条坊に係わるとみられるUH2013-003次のSD301では、その上位に中世後期に機能したとみられる溝SD301を検出している。同様の状況は、表2-24のOS1988-083次、同28のOS1990-112次でも認めることができる。また、先に四天王寺以南に条坊が及んだことの根拠とした同40のDA2013-001次の調査では、古代の南北溝SD01の上位に、12世紀の東西溝SD02が重なり、さらにSD02を破壊して中世後期の井戸が掘られていた。古代から中世にかけて、地割に変更があったことがわかる。

これらは条坊に係わる古代の遺構と中世の遺構とが重複する例であるが、古代の条坊遺構が検出されなかった調査でも、正方位を採る中世の遺構が検出された例は多い。紙幅の制限から、表2にはその一部を掲載できたに過ぎないが、UH2011-008次ではSD13、UH2009-003次ではSD301、ST1994-007次ではSD102をそれぞれ検出しており、少なくとも四天王寺周辺においては、難波京を踏襲した正方位を採る地割が残存し、かつその敷地境界の位置は条坊を踏襲したものが多かったことが推測できる(註4)。

**耕作土の拡がり** いっぽう、かつて難波宮が存在した上町台地の北端部では、やや様相が異なっている。すなわち、本書の巻頭図版6に掲載した古環境GISチームによる中世の古地形復元図が明瞭に示すように、当該地域では中世になると耕作土が広く分布し、かつ少なくとも本願時期において、遺構

の方位は正方位を採らない。先にみた四天王寺周辺では中世の作土はほとんど検出されていないが、当該地域と同じく台地上に立地することを考えれば、後世の削平の度合いが検出例の多寡に影響しているとは考えにくい。

**小結** 簡単ながら検討を加えた2点から、中世の難波地域では、上町台地北端部と四天王寺周辺に対照的なあり方を認めることができよう。すなわち、上町台地北端部では難波京の遷都後に景観が大きく変わり、豊臣期までに地割は変更され、耕作地が広がった。いっぽう四天王寺の周辺では、条坊を踏襲した地割が豊臣期直前まで残存し、その一部は今日まで引き継がれている。土地利用についてみれば、四天王寺周辺では盛土の検出例はあるものの耕作土は極めて少なく、原則として居住地であり続けたことがわかる。

#### 4、まとめと展望

以上、本稿では古代から中世における難波地域の都市計画について概観した。

まず古代においては、難波京の測設原点について私案を呈示し、また建物のあり方、とくに北河堀町所在遺跡で検出した大型建物群から、難波京の完成度およびその南端について論じた。

中世では、地割と耕作土の分布から、上町台地北端部と四天王寺周辺を対照的に把握できた。前者では地割の変更と耕作土が広く分布することにより、難波京の景観は大きく変更されたと考えた。いっぽう後者では、豊臣期直前まで難波京の条坊を踏襲した地割が残存し、耕作土は検出されない。よって、難波京の時期に形成された景観が中世末期まで維持されたと評価した。こうしたあり方は、中世の主要道路が上町台地上にはなく現在の松屋町筋など台地下を通ることとも相まって（大澤 2012）、中世の上町台地北端部が古代に比べ相対的に影響力・存在感を低下させたものと評価できよう。

本稿では、科研の研究期間5年の中で集積したデータに基づき、古代から中世に至る大阪の変遷について、その着想を示した。今後、個々のデータに基づく綿密な論証を行う必要がある。後考を期したい。

今回の科学研究費補助金による研究期間を通じて、脇田修代表をはじめとする研究チームの方々には多くのご教示を頂きました。とりわけ、古環境 GIS チームの趙哲済・高橋工・平田洋司・小倉徹也・辻本裕也・松田順一郎の各氏からは多くのことを学び、本稿もその成果の一部です。こうした研究の機会を頂いたことに感謝いたします。

#### 註

(1) 「難波長柄豊碕宮」のように、史料中に「難波」を冠した建物・地名がみられる範囲を「難波地域」とする。おおよそ、現在の大阪市中央区・天王寺区・北区が該当する。

(2) この地点を復元条坊線が通過することは、積山氏も既に指摘している（積山 2004、p. 46）。

(3) 現在の四天王寺東大門から座標を算出していること、また内裏南門心の座標算出が推測値であることから、この数値の精度には問題がある。将来的には、内裏南門の再発掘、また京に係わる発掘調査の進展などにより、修正されていくべきものである。

## II 研究報告

(4) 難波京の研究が、近代の地図に条坊痕跡を見出したことにはじまることを考えれば、このことは当然の結論ではある。

### 引用文献

- 市川創 2013 「難波京の建物」大阪文化財研究所編『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』 pp. 70 - 86
- 大澤研一 2012 「道からみた豊臣初期大坂城下町」『大阪歴史博物館研究紀要』第10号 pp. 21 - 33
- 積山洋 2004 「孝徳朝の難波宮と造都構想」塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版社 pp. 41 - 63
- 積山洋 2012 「難波宮・京の廃絶とその後」『都城制研究』6 奈良女子大学古代学学術研究センター pp. 51 - 61
- 積山洋 2013 『古代の都城と東アジア 大極殿と難波京』清文堂
- 高橋工 2007 「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」大阪市文化財協会編『細工谷遺跡発掘調査報告』II pp. 61 - 68
- 松尾信裕 1999 「船場地域における大坂城下町下層の遺跡」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号 pp. 399 - 427
- 松尾信裕 2001 「中世の上町台地北辺の景観」『大阪市文化財協会研究紀要』第4号 pp. 161 - 172
- 豆谷浩之 1996 「四天王寺の寺域と「境内」について—調査の成果を手がかりに—」大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I pp. 120 - 130

### 引用報告書

※各報告書に付した番号は表2・3と対応。大阪市教育委員会は「大市教」、大阪市文化財協会は「大文協」、大阪文化財研究所は「大文研」とそれぞれ略記。）

1. 大市教・大文協 1981、「難波宮跡第170次調査」『昭和54年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
2. 大市教・大文協 1984、「難波宮跡(NW82-41)発掘調査略報」『昭和57年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 55 - 59
3. 大市教・大文協 1989、「上野邸新築に伴う大坂城跡発掘調査(OS87-124)」『昭和62年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 126 - 131
4. 大市教・大文協 1990、「鳥居ビル建設に伴う大坂城跡発掘調査(OS88-31)略報」『昭和63年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 76 - 82
5. 大市教・大文協 1990、「立体駐車場建設に伴う大坂城跡発掘調査(OS88-83)略報」『昭和63年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 92 - 96
6. 大市教・大文協 1991、「木本起佐子氏による建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW90-20)略報」『平成2年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 11 - 17
7. 大市教・大文協 1993、「専念寺庫裏建替工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH92-2)略報」『平成4年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 69 - 77
8. 大市教・大文協 1995、「関合邸建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW93-8)略報」『平成5年度 大阪市内

埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 3 - 9

9. 大市教・大文協 1996、「岩井邸建築に伴う発掘調査（NS94 - 10）」『平成 6 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 57 - 63

10. 大市教・大文協 1997、「竹網氏による建設工事に伴う発掘調査（OS95 - 12）略報」『平成 7 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 59 - 63

11. 大市教・大文協 1997、「(株) ビルドによる建設工事に伴う発掘調査（OS95 - 19）略報」『平成 7 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 64 - 70

12. 大市教・大文協 1999、「石原商会による建設工事に伴う確認調査（TX97 - 1）」『平成 9 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 31 - 39

13. 大市教・大文協 2002、「吉岡昌治氏による建設工事に伴う難波宮跡発掘調査（NW00 - 6）報告書」『平成 12 年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 33 - 37

14. 大市教・大文協 2003、「難波大道跡発掘調査（ND01 - 6）報告書」『平成 13 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 103 - 105

15. 大市教・大文協 2005、「上本町南遺跡発掘調査（US04 - 2）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』（2002・03・04）、pp. 203 - 210

16. 大市教・大文協 2008、「上本町南遺跡発掘調査（US06 - 1）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』（2006）、pp. 251 - 259

17. 大市教・大文協 2010、「大坂城下町跡発掘調査（OJ08 - 6）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』（2008）、pp. 141 - 151

18. 大市教・大文協 2010、「細工谷遺跡発掘調査（SD08 - 2）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』（2008）、pp. 321 - 329

19. 大市教・大文協 2010、「天王寺区上本町四丁目における上本町遺跡発掘調査（UH08 - 8）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』（2008）、pp. 365 - 370

20. 大市教・大文研 2011、「難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW09 - 1）報告書」『平成 21 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』（2009）、pp. 115 - 128

21. 大市教・大文研 2011、「上本町遺跡発掘調査（UH09 - 3）報告書」『平成 21 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』2009、pp. 191 - 200

22. 大市教・大文研 2012、「天王寺区上汐四丁目における建設工事に伴う上本町遺跡（UH10 - 5）報告書」『平成 22 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 29 - 39

23. 大市教・大文研 2012、「東住吉区南田辺一丁目における建設工事に伴う難波大道跡発掘調査（ND10 - 1）報告書」『平成 22 年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 95 - 99

24. 大市教・大文研 2013、「大坂城跡発掘調査（OS11 - 4）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』（2011）、pp. 281 - 288

25. 大市教・大文研 2013、『中央区東平一丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査（UH11-8）報告書』

26. 大文協 1981、「第 126 次発掘調査概報」『難波宮跡研究調査年報』1975 ~ 1979. 6、pp. 25 - 26

## II 研究報告

27. 大文協 1981、「宮城南辺部の調査略報」『難波宮跡研究調査年報』1975～1979. 6、pp. 35 - 48
28. 大文協 1986、『殖産住宅（株）による集合住宅建設に伴う難波京朱雀大路跡発掘調査（NW85-37）略報』
29. 大文協 1989、『川戸登氏および誠光印刷（株）による建設工事に伴う四天王寺旧境内遺跡発掘調査（ST89-6）略報』
30. 大文協 1995、『難波宮址の研究』第十
31. 大文協 1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』 I
32. 大文協 1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』 I
33. 大文協 1999、「四天王寺旧境内遺跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1996年度、pp. 85 - 106
34. 大文協 1999、「大坂城跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1996年度、pp. 140 - 143
35. 大文協 1999、「大坂城下町跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1997年度、pp. 92 - 98
36. 大文協 1999、『大坂城跡』IV
37. 大文協 2001、「大坂城跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1998年度、pp. 69 - 74
38. 大文協 2002、「1999・2000年度調査の概要」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1999・2000年度、pp. 3 - 6
39. 大文協 2002、「大坂城跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1999・2000年度、pp. 77 - 83
40. 大文協 2002、「大坂城跡の調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1999・2000年度、pp. 90 - 94
41. 大文協 2002、『大坂城跡』V
42. 大文協 2002、『大坂城跡』VI
43. 大文協 2003、『大坂城跡』VII
44. 大文協 2004、『宰相山遺跡発掘調査報告』 I
45. 大文協 2004、『大坂城下町跡』 II
46. 大文協 2004、『難波宮址の研究』第十二
47. 大文協 2005、『難波宮址の研究』第十三
48. 大文協 2007、『平成 17・18 年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査（SD05 - 1・06 - 1）完了報告書』
49. 大文協 2010、『上本町遺跡発掘調査報告』 I
50. 大文研 2011、『苅田 4 丁目所在遺跡発掘調査報告』 III
51. 大文研 2012、『上本町遺跡発掘調査報告』 III
52. 大文研 2012、『大坂城跡』XIV
53. 大文研 2012、『中央区上汐一丁目 1 - 6 における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査（UH12-6）報告書』
54. 大文研 2013、『天王寺区上汐三丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査（UH13 - 3）報告書』
55. 大文研 2013、『天王寺区六万休町における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査（UH13 - 6）報告書』
56. 大文研 2013、『天王寺区大道一丁目 2 番における建設工事に伴う大道 1 丁目所在遺跡発掘調査（DA13 - 1）報告書』
57. 大阪文化財研究所 2013、『中央区道修町三丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査（A 区）（OJ13 - 3）報告書』

58. 大阪文化財研究所 2013b 『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』
59. 大阪府文化財センター 2002、『大坂城跡発掘調査報告』 I（大阪府文化財センター調査報告書 第 78 集）
60. 大阪府文化財センター 2009、『大和川今池遺跡 I－難波大道の調査』（大阪府文化財センター調査報告書 第 191 集）
61. 難波宮址研究会・難波宮址顕彰会 1970、『難波宮址の研究 研究予察報告』第六
62. 難波宮址顕彰会 1976、「第 61 次発掘調査概報」『難波宮跡研究調査年報』1974、pp. 20－22
63. 西近畿文化財調査研究所事務局 2006、『伶人町遺跡発掘調査概要報告書』







# 並び立つ都市の時代—中世後期上町台地の様相— 大澤研一

## 要旨

上町台地においてどのような中世都市が存在したのか。またその特質とはどのような点にみられたのか。本稿では、渡辺・天王寺・大坂という三つの中世都市を素材に、中世後期の上町台地の状況を都市の観点から述べることにする。また、これら中世都市の存在が前提となり、それらを克服・吸収することで豊臣秀吉の大坂城下町が建設されたことを跡づける。これら中世都市の存在があつてはじめて大坂城下町が誕生したのである。

## 1、はじめに

戦国末期、摂津・河内・和泉地域には門前町・寺内町・港町と表現される多様でかつ相当規模の都市が複数存在した（仁木 2006：図1）。上町台地とその周辺に限っても15世紀末の段階で天王寺、渡辺、平野、堺といった複数の都市的場が存在していたことが「明応御陣図」からわかり（図2）、さらに16世紀になると上町台地北端部に本願寺による大坂寺内町も誕生した。これらは当時の都市規模としては京都に次ぐようなクラスであり、しかもそう離れていないところに並立していた点が注目される。

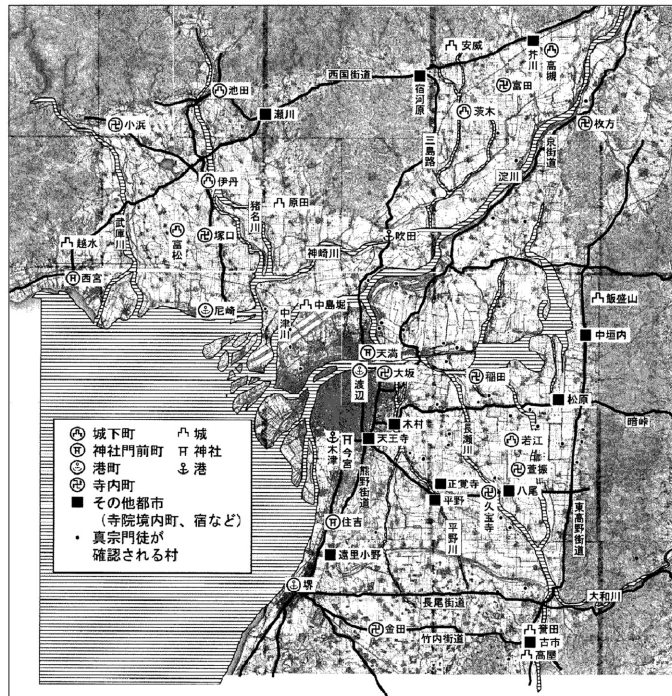


図1 戦国時代の大阪平野想定復元図（仁木 2006）

これらの“都市”は領主を異にしながらも住民が同族であったり、税免除や非常時の際、都市民

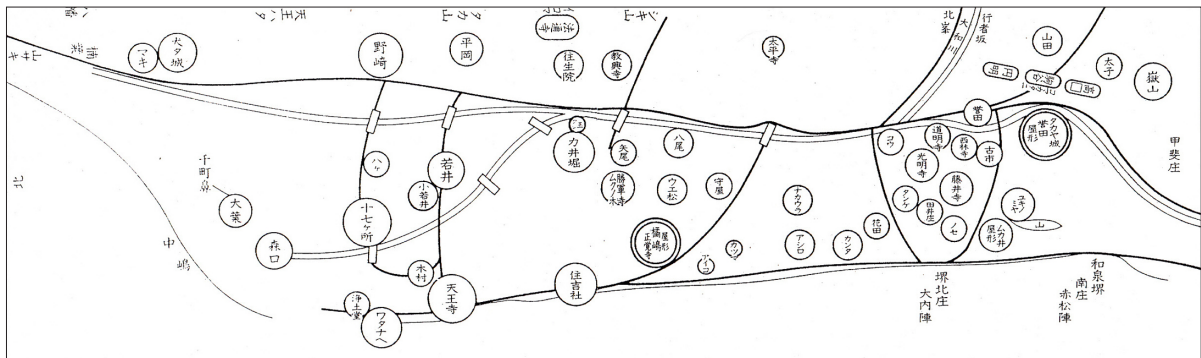


図2 明応二年御陣図（大阪市 1989）

避難で連携する事例がみられるなど、日々経済活動や都市運営の側面で結びついてきた。武家権力はこうした都市を一時的に武力で制圧・支配するのではなく、その経済機能や人的資源を利用・吸収するかたちで都市掌握をはかろうとしたのであった。

天正8年(1580)、大坂本願寺が織田信長に屈して寺地を明け渡し、続けて羽柴(豊臣)秀吉が信長の後継者になると、同11年(1583)、大坂城下町の建設に着手した。それは秀吉が中世都市の中核的存在だった寺社の権力を制限したり所在地を移転させたりするなどし、それまでの空間秩序を解体して自らの支配下に置き、さらにそれらの空間を結び付けることによって実現された、中世都市の規模を大きく凌ぐ規模のものであった。

このように上町台地とその周辺では中世末から近世にかけて、都市として大きな転換を遂げたのである。以下では、まず中世後期の上町台地上と近接する都市の状況とその意義を述べ、その後に城下町への展開の動きを具体的に追ってみたい。

## 2、中世後期上町台地周辺の交通路

最初に本章では上町台地において中世都市存立の前提となった歴史環境をみておきたいが、とりわけ都市を結ぶ道の状況を確認しておきたい。

### ◎上町台地西縁辺部の道：「浜路」（大澤 2001）

中世の上町台地一帯の道でもっとも重要なのが「浜路」である。「浜路」は現在のところ下記12世紀初めの史料が初見であり、その名は17世紀初めにかけて散見される。

【史料1】『中右記』天仁2年(1109)11月8日

天晴、鶏鳴之後出宿所、行廿余町許過篠田社間、漢天已明、行路纔見、仍止続松、辰刻許留前河内守宣基宅、暫昼養、住吉社辺也、午刻出此処、(中略)行浜路、過天王寺西海辺、未一刻着窪津、「浜路」は上町台地の西縁辺部を南北に通る道で、現在の松屋町筋がおおむねその道筋を踏襲している。この道は7世紀、天武朝以降の難波京の推定条坊ライン(西京極)とおおよそ重なっており(積山 2013)、また台地縁辺という自然地理学的観点から考えても道が誕生しやすい条件の場所だったと考えられるので、その発生が古代にさかのぼることは間違いない。

さらにこの道で注目すべきは、中世ではその北端に渡辺津が位置することであり、南方では四天王寺西門から海へと下る逢坂と交わることにある。実際、15世紀末までの中世史料で渡辺津と四天王寺のあいだを往来した際に利用された道をさぐってみると、道筋が明らかな事例はほぼこの「浜道」に限られることが知られる(大澤 2012b の表)。したがって「浜路」は渡辺津・四天王寺という上町台地の二大都市を結ぶメインルートとして重要な存在だったといえよう。

### ◎上町台地東縁辺部の道(大澤 2012b)

では、上町台地上の道はどうだったのだろうか。次の史料をみてみたい。

【史料2】『熊野詣日記』応永39年(1427)10月9日

御昼、天王寺御やと大こく屋、供御のゝち北野殿、亀井の水めしよせられてきこしめさる、水なを筒に入れて京にもたせらる、御夢想の告あるによりてなり、しきのゝわたり御船なり、たゝ一艘にて、上下をわたしたてまつる程に、はるかに時うつれり、御宿、森口、

これは応永 39 年 (1427)、足利義満側室の北野殿が熊野から京都へ戻った際の記録である。これによれば、帰途四天王寺に立ち寄った北野殿はそこから「しきのゝわたり」(鳴野渡)へ向かい、ここを船で越えたのち陸路で森口(守口)へ向かったのであった。

ここで確認しなければならないのは、北野殿が上町台地上の四天王寺から鳴野渡までたどった具体的な道筋である。鳴野渡は旧大和川を南北に渡河する地点で、近世村の鳴野村があった場所を比定地とみなせば上町台地北端部から東へ台地を下った低地に位置することになる(現大阪市城東区鳴野東二丁目、新喜多東一丁目付近)。16 世紀に大坂本願寺が上町台地北端部に成立したのちも、本願寺から京都へ向かう際は鳴野を経由していることから、中世末にいたるまで旧大和川を渡河する地点は上町台地北端部ではなく、鳴野が一般的だったとみてよかろう。そうであれば、北野殿の場合、四天王寺から上町台地をそのまま北行する理由はなく、むしろ鳴野への最短コースを選択するということになれば、四天王寺から北北東へのびる谷筋(真法院谷)を下り、小橋・森を通り鳴野へ至る上町台地東縁辺部のルートが有力といえるのではなかろうか。

### ◎上町台地上の道(大澤 2012b)

そうなると問題となるのが、まさに上町台地の上に乗った道(特に南北を結ぶ道)がどのような状況にあったかという点である。近年、古代の難波京条坊を考古学的成果から復元する作業が進展し(積山 2013)、さらにその成果を承け、中世の上町台地上には難波京の条坊地割方位(正方位)に沿った溝が多く存在したことが指摘されはじめている(市川 2011、2013)。そうなれば台地上には条坊道路を継承した中世の道が存在した可能性も視野に入れる必要が生じるが、現在までのところそうした道が実際に検出された事例はない。

一方、中世の文献史料でも台地上を通っていたとみなせる道を確認することは意外に難しい。『大乘院寺社雑事記』長享 3 年(1489)8 月 18 日条に渡辺・阿弥陀浄土堂から勝曼院・四天王寺へ向かったとする記事が存在する。浄土堂が上町台地北西端に存在したとすれば(藤田 2000)、勝曼院・四天王寺は台地上に位置するので、その間は台地上の道を利用した可能性が高まるが、確実なことはいえない。

ほぼ間違いなく台地上の南北道を利用したとみなせるのは、現在のところ下記史料が初見である。

#### 【史料 3】『永正記』大永 3 年(1523)3 月 3 日

三日、(中略)小坂一宿、四日、晴、朝飯已後立小坂歩行、天王寺一里、

これは「小坂」(大坂)から四天王寺へ移動したことを伝える記事である。この「小坂」とは明応 5 年(1496)、上町台地北端部に本願寺蓮如が建立した坊舎(大永年間には大坂坊)の所在地で、大坂坊から四天王寺へと徒歩で移動したことをここでは述べている。そうなれば、ここで通行した道は台地上の道以外には考えにくいであろう。

大坂坊は天文 2 年(1533)、この地に大坂本願寺が移転してくる際の受け入れ母体となった寺院で、本願寺の地域拠点のひとつであった(大澤 2012a)。後述のように、のちの大坂本願寺寺内町につながる町場は蓮如時代から形成されはじめていたとみられるので、大永段階には大坂坊を核に都市的な発展が一定存在していたと考えられる。こうした場の誕生が上町台地上の交通を活発化させる大きな

契機となったのである。

では、この台地上の南北道はどこに比定されるのであろうか。拙稿（大澤 2012b）においては、その道筋を上町台地の尾根筋にあたる道と推測した。これは現在大阪府中央区・天王寺区上汐の中央を縦断する道筋にあたり、上町台地の地形に沿って北で東におよそ6°傾く方位をとる。注意しなければならないのは、その方位がさきに触れた難波京の条坊を継承する中世の溝の方位と違っている点である。この尾根道が中世にさかのぼるものなのか、あるいは秀吉の城下町建設にともなって新たに設置されたものなのかによって、上町台地の開発の面期が変わってくるが、中世にさかのぼる道の考古学的な確認事例はこれまでのところまったくないので、本稿でも旧稿どおり尾根道説を採っておきたい。

### 3、各都市の実態と特質

上町台地上とその周辺に存在した中世都市の性格は、この時期の都市としては普遍的といえる交通・流通の拠点機能が重視されるべきもの、あるいは有力な寺社権門の領主支配によってその周囲に展開したものの大きく二つに分類することができる（この分類はもちろん対立概念ではない）。しかし、各都市の状況を詳細にみていくと、それにはとどまらない特質を有していた様子が知られるのである。以下、そうした点もあわせてそれぞれの状況を述べていきたい。

#### ●渡辺

渡辺は上町台地北端部から西へ下った場所にあつて、淀川分流の大川に面した港津都市である（港とその周囲の地を限定的に渡辺津と称することもある。現大阪府中央区北浜・北浜東、北区天神橋・西天満付近）。「渡辺」という地名は単に港湾部のみを指すのではなく大川兩岸を包摂する広域地名だったが、室町期になると都市機能が分散し、「中島」が分立することで渡辺の範囲は狭くなったと指摘されている（大村 2007）。ただ大川自体も16世紀では「幡部川」（渡辺川）と呼ばれており（大澤 2007）、この地一帯の代表呼称として渡辺が認知され続けていたことはまちがいない。

渡辺は淀川水運と瀬戸内航路および熊野街道に代表される陸上交通路との結節点にあつたことが重要である。ここが港湾として本格的に機能し出したのは12世紀からだったと指摘されている（大村 2007）。

渡辺の地は白河院政期より渡辺氏はその支配を担った。ここは王家の経済基盤として維持された場所で、武家・幕府権力が直接介入できなかつたとされている（生駒 2011）。京に近く、また西国と京を結ぶ輸送ルートの重要中継地点であつたことがこうした渡辺の地の特質を生んだ背景といえよう。

港湾都市渡辺の空間構造は不明な点が多い。渡辺氏の居住地は知られていないが、摂津国衙に関与していたとすれば大川に面した低地部ではなく、東側の上町台地北西端付近の国衙推定地が有力となる。また、渡辺には複数の寺社が存在した。大川南岸には摂津国西成郡唯一の式内社坐摩神社が鎮座していた（豊臣期に移転：後述）。旧地は現在同社の御旅所がある一帯が有力とみられる。また12世紀末には東大寺の復興を目指す重源が当地に渡辺別所（浄土堂）を建設した。浄土堂も低地部でなく、上町台地北西端付近にあつたとする見解がある（藤田 2000）。ただし、渡辺別所に関連すると推測される「東大寺大佛殿」銘瓦が台地を西へ下りきつた地点から出土しており（大阪府文化財協会

2004)、まだその所在地は確定できない。

大川北岸に目を転じると、ここには平安時代以降天満宮が存在した。近世の記録であるが、天満宮には中世、門前に町場が付属していたことをうかがわせる次の伝承がある。

【史料4】「天満宮神主神原至長嘆願書」寛文5年（1665）6月7日

御神領昔高式千五百貫、天満まはり七ヶ村淀川面までも当社領地にて御座候故、当津出入之船より帆別と申候而役銭なども取申候得共、其以後神領も少つゝ落来候而信長公之御時一ヶ所も不残落申候、されども宮の前、地下町、そねざき村、福嶋村右四ヶ所より淀川之水銭と申候而六月九日両度之御神事之時分、むかしの神領のしるしとして于今少つゝ取納仕候、宮の前町地下町両所之者共天神之百姓に御座候故、諸役人夫之入候間ハ于今よびよせつかひ申事ニ御座候、

天満宮が領主としての由緒を主張するための書き上げなので慎重な利用が必要であるが、帆別銭や地下町という表現は中世的であり、天満宮が一定領主的権限を周辺地域に及ぼしていたことは認めることができるのではなかろうか。

渡辺別所（浄土堂）は戦国期になると史料上あまり登場しなくなるが、坐摩神社や天満宮については在地の宗教権門として一定の力を保っていたものと推測される。さらに「渡辺三ヶ寺」（天文日記：天文7年6月9日条）という存在も確認されるので、渡辺は多様な宗教勢力が混在する空間であったことがわかる。

王権が注目した交通・流通の要地としての特質は戦国末まで継続していた。16世紀半ばより三好氏が渡辺氏を通じて当地の支配をおこなったことが指摘されている。これは、既存の都市とその流通ネットワークを支配に組み込む三好氏の手法を明快に示している（天野2010）。

【史料5】「三好長慶書状写」（天文19年＝1549）閏5月21日

渡辺千満方本知龍安寺分事、早々指出可調進、若於遅々者可為曲事候、委細千満代可申付候、謹言、

三好

後五月廿一日

長慶

渡辺所々散在名主百姓中

三好氏が当地に支配拠点を置いていた痕跡は確認されておらず、渡辺氏を介した形での影響力の浸透だったと推測される。そのため渡辺では武家と都市の対立が先鋭化することはなかった可能性があるだろう。

### ●天王寺

上町台地の中央部（現大阪市天王寺区）に位置する四天王寺は聖徳太子建立の寺伝を有し、古代の官寺としての性格を負った上町台地屈指の古刹である。その四天王寺が浄土信仰・現世利益信仰にもとづく中世的寺院として姿を変えはじめたのは11世紀のことであり、それ以降民衆の信仰を広く集め、現在にいたっている（大澤2006）。

四天王寺信仰のなかでとりわけ重要なのは浄土信仰であった。これは四天王寺の西門が極楽浄土の東門にあたるというもので、四天王寺から西へ下った先にあった海の彼方が極楽浄土という位置づけであった。古代寺院としての四天王寺は中心伽藍の堂舎が南北一直線にならぶ形式をとっていたが、

## II 研究報告

ここに至って西方の極楽浄土を強く意識した東西方向への発展の志向性をみせることになったのである。そのため四天王寺の都市空間は主に境内西へ展開することになったのである。四天王寺の門前町といえおよそこの地域を指すことになる。

ただし、四天王寺を中心とする都市空間は実際には四天王寺の西側にとどまらず、その北・東・南に隣接した村を含むゆるやかな範囲から構成されており（伊藤1987・大村2011）、この範囲が当時は「天王寺」と呼ばれていた。明応8年（1499）に「天王寺ハ七千間在所」（『大乘院寺社雑事記』）を数えたといわれる都市空間はこうした範囲に及んでいたのである。

このエリアのなかには安居天神や今宮神社といった四天王寺配下の宗教施設が点在したほか、経済面では四天王寺支配の市や四天王寺領の分布が確認・想定される。「天王寺」のなかでは四天王寺の信仰と流通・経済面が密接にからんだ形で都市的場が形成されていたのである。

16世紀になると細川氏、続けて十河一存の有力被官が天王寺に在住（境内外）した。これは天王寺の経済的重要性に着目したものであり（天野2010）、関所も置かれたが、都市法レベルの介入には限界があった。その点で大きな画期となったのが織田信長から「天王寺境内」宛に永禄12年（1569）に発せられた撰銭令である。これは貨幣流通の円滑化を図りながら都市の支配に具体的に介入しようとする政策であった点で注目される。

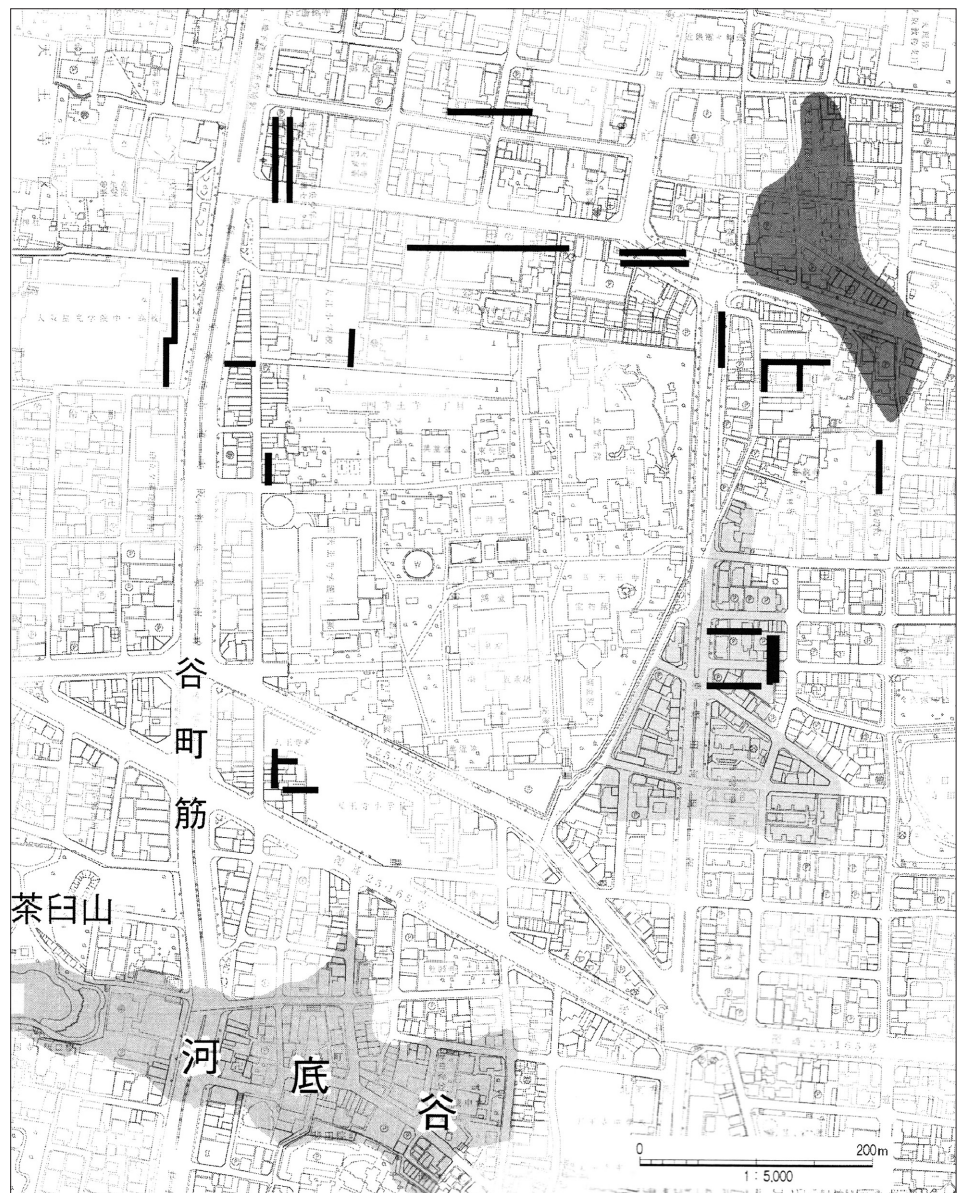


図3 中世四天王寺周辺の堀・溝（市川2011）

なお近年、四天王寺境内の周辺で都市空間の一部を包摂したと推測される中世の堀・溝が確認されている（市川 2011：図 3）。現状ではこれらがどのような空間・範囲を囲むものなのか即断するのは難しい。中世の堺でも都市を広範囲に囲むもの、都市内の小空間を囲むものが想定されており、中世都市の構成単位と密接にからんで堀・溝も存在した点を考慮する必要が生じてきている。天王寺の場合もそうした観点でさらに検討する必要があるだろう。

### ●大坂

大坂は上町台地北端部に位置した。その初見は鎌倉時代にさかのぼるが（大澤 2001）、都市としての濫觴は明応 5 年（1496）、本願寺蓮如が当地に坊舎を建立したことに求められる。住民の主張であるが、蓮如段階で六人の番匠が町の番屋・櫓・橋・兵・釘貫を建設したと主張しており（天文日記：天文 21 年 2 月 25 日条）、このとおりであれば早い段階から町場も附属していたことがわかる。

その後、天文 2 年（1533）に本願寺が山科から当地へ移転し、大坂本願寺が成立した。この地には古代から式内社生国魂神社が存在したが、それを空間的・社会的（鎮守）に組み込み、さらに北町・西町・南町・北町屋・清水町・新屋敷の六つの個別町からなる寺内町を附属させた。なお当初、個別町は北町・西町・南町の三町だったと推測されている（仁木 1994）。すなわち、御影堂・阿弥陀堂を核とした境内を中心とし、その周囲に生国魂神社を含む町を配置する単核、求心的空間構造が復元される。当時の他都市が複核的な構造をもつのが一般的だったのに対し、大坂本願寺は生国魂神社に優越し、空間的にも本願寺を中心に置いた求心的な構造を実現した点で注目され、さらには都市全体を囲む惣構の存在が推測されるので、当時としては“最先端”の都市だったと評価されよう（仁木 1994：図 4、同 2003）。

さらに大坂本願寺で特筆されるべきことは、本願寺が大坂寺内町の領主として同地において獲得した諸役免許などの経済特権を本願寺教団の主要寺院が中核となって形成された周辺地域の寺内町にまで及ぼした点である（仁木 1997）。

本願寺は当時門跡寺院としての地位を得ており、本願寺教団は当時の有力な社会勢力のひとつとして無視できない存在となっていた。宗教勢力がそうした社会的位置づけを背景に都市ネットワークを確立したことは中世都市の特質とその到達点を示しているといえよう。

なお、大坂本願寺は天正 8 年（1580）、信長との石山合戦終結により当地を退去し、本願寺は紀州へと移転した。この時に寺内町の空間も解体したとみられるが、寺内住民については大坂残留が認められたことが知られている（仁木 1997）。信長が大坂寺内町の担い手だった住人（商人・職人ら）とその経済力を取り込み、新たな都市建設を目論んだ可能性も否定できない。

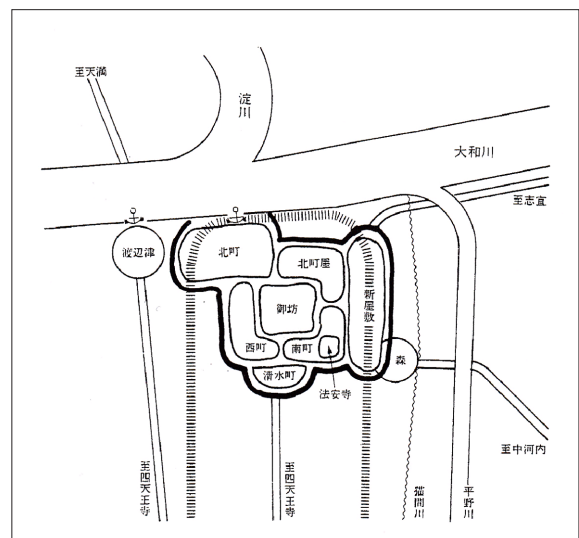


図 4 大坂寺内町想定復元図（仁木 1994）

#### 4、豊臣期大坂城下町の建設と中世都市

前章で上町台地一帯の中世都市の状況を見てきた。いずれの都市も中核的存在として宗教権門が存在した点は共通しているが、複数の宗教権門が並存している場合もあれば、ひとつの宗教権門が卓越している場合もあり、必ずしも同一の構造ではない。中世では前者が一般的であり、後者は珍しい存在であったが、後者のような都市が存在したこと自体この地域の特質を示していると思われる。

また、都市に対する武家の関与・介入についてはさほど厳しいものではなく、都市側の自主性・自立性も一定保たれており、相互依存的な関係性にあったといえよう。武家による都市空間の改造もおこなわれた痕跡は認められない。信長が登場するにいたって武力による都市領主との対決がみられたが、信長は都市住民を否定したり空間を改造したりすることはおこなわなかった。

こうした都市が上町台地上とその周辺に並立的に点在し、それらを最初に紹介した道が結んでいたのが中世末の上町台地の様相であった（図5）。

では、以上の中世都市は豊臣秀吉の出現によりどのような影響を受けたのだろうか。

#### ●渡辺の改編・吸収

秀吉は現大坂城の地で天正11年（1583）、城郭建設に着手した。この地は大坂本願寺の旧地であり、

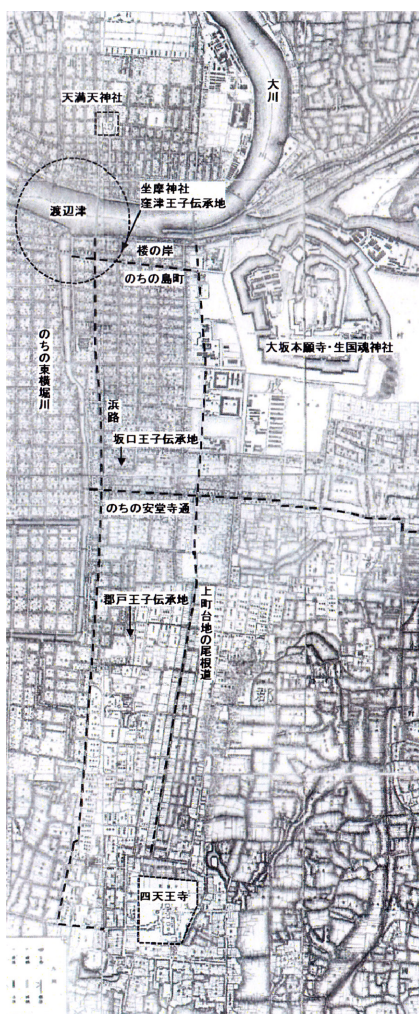


図5 中世末上町台地周辺図  
(大澤作成)



図6 豊臣期上町台地周辺図  
(大澤作成)

秀吉の大坂入部直前は池田恒興が領有していた。秀吉は大坂城を核に城下町の建設に乗り出したが、その際、渡辺と天王寺を城下町に組み込もうとした（松尾2003、内田1989）。そのうち渡辺に続く島町は渡辺を城下町に取込むことを目的に整備された線状の町である（松尾2003）。

渡辺自体の改編にも秀吉は着手した。そのもっとも重要な施策が坐摩神社を渡辺から移転させることであった。一次史料での確認はできないが、坐摩神社が現在地へ移転した契機



は秀吉による城下町建設と伝えている。

【史料6】大坂濫觴書一件 元禄12年(1699)『大阪市史』第五卷

座摩大明神之社ハ元来西成郡之惣社ニ而、南渡辺江替地太閤様ヨリ被仰付、社料式千八百石  
余有之候、

同社の移転により渡辺の中世的秩序の解体が一気に進んだと思われ、加えて大坂城エリアとの間を結ぶ島町の建設により、同地の城下町化が大きく進行することになったのである。

#### ●平野の“吸収”と平野町の建設

秀吉が天王寺を大坂城下町の一部に組み込もうとし、大坂城エリアと天王寺の間に平野の住人によって平野町の建設をおこなわせたことはよく知られている(内田1989)。

平野は天王寺の東南、摂津・河内の国境近くに位置し(現大阪市平野区平野本町一帯)、平野川と大和街道・中高野街道など交通路の要衝にあった。16世紀には周辺村落からの移住民による都市空間が形成された。その内部には複数の寺院が並存し総鎮守の杭全神社(熊野権現社)は北外れに位置した。戦国期には周囲に防禦施設を持つ富裕な都市であり、三好氏や織田信長の支配にも簡単には屈しない自立性・自主性を保っていたが(大澤2010)、秀吉政権には服従し、大坂城下町の建設に動員される形となったのであった。中世都市と都市民の経済力を吸収した城下町建設といえよう。

#### ●四天王寺の復興

四天王寺は石山合戦のあおりで天正4年(1576)に焼失し、秀吉が同11年7月になって復興に着手した。これは城下町建設開始と同時期のことなので、寺院自体の復興も城下町整備の一環に位置づけられていたことがうかがわれる。渡辺では坐摩神社が排除されたが、四天王寺は天王寺エリアの中核として城下町にとって欠くことのできない要素として認められたのであろう。

ただし、中世に存在したとされる四天王寺周辺の堀・溝は豊臣期にかけて埋められていったことが確認されている(市川2011)。これは秀吉が中世以来の四天王寺の領主的性格をそのまま認めたのではなく、外護者である自らに従う限りにおいて存続を認めたことを示しているといえよう。

### 5、おわりに

上町台地周辺には個性的な中世都市が並存していた。そのなかでも大坂本願寺寺内町は都市として“最先端”を行く都市だったといつてよかろう。豊臣秀吉はそうした中世都市の秩序を解体するとともにその経済力などを活用する形で中世都市を上町台地上で“連結”させ大坂城下町を建設したのであった。都市大阪の直接的な母体は近世都市大坂(豊臣期大坂)であることは疑いないが、そのベースとして豊かな個性をもつ中世都市があったことを忘れてはいけないのである(大澤2013)。

#### 参考文献

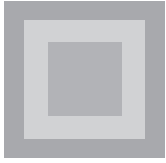
天野忠幸 2010『戦国期三好政権の研究』清文堂出版 pp. 249-254

生駒孝臣 2011「平安末・鎌倉初期における畿内武士の成立と展開」『古代文化』63-2 pp. 1-20

市川 創 2011「考古学からみた中世四天王寺とその周辺」大阪文化財研究所編『シンポジウム大阪上町台地から都市を考える2 寺社と中世都市—京都・博多・大阪—』 pp. 3-11

## II 研究報告

- 伊藤 毅 1987 『近世大坂成立史論』 生活史研究所 pp. 110-118
- 内田九州男 1989 「豊臣秀吉の大坂建設」 佐久間貴士編 『よみがえる中世 2 本願寺から天下一へ 大坂』 平凡社 pp. 34-55
- 大阪市 1989 『新修大阪市史』 第2巻 pp. 590-591
- 大阪市文化財協会 2004 『大坂城下町跡』 II pp. 113-165
- 大村拓生 2007 「中世渡辺津の展開と大阪湾」 『大阪の歴史』 70号 pp. 1-34
- 大村拓生 2011 「中世天王寺の都市的展開」 一六一七会四天王寺例会レジュメ
- 積山 洋 2013 『古代の都城と東アジア 大極殿と難波京』 清文堂 pp. 269
- 仁木 宏 1994 「大坂石山寺内町の空間構造」 上横手雅敬監修 『古代・中世の政治と文化』 思文閣出版 pp. 653-684
- 仁木 宏 1997 『空間・公・共同体』 青木書店 pp. 165-168
- 仁木 宏 2003 「戦国期摂河泉都市のオリジナリティ」 『ヒストリア』 186 pp. 48-57
- 仁木 宏 2006 「戦国時代摂津・河内の都市と交通」 栄原永遠男・仁木宏編 『難波宮から大坂へ』 和泉書院 pp. 231-252
- 藤田 実 2000 「寺内町大坂（石山）とその地理的環境」 渡辺武館長退職記念論集刊行会編 『大坂城と城下町』 思文閣出版 pp. 369-393
- 松尾信裕 2003 「豊臣氏大坂城惣構内の町割」 大阪市文化財協会編 『大坂城跡』 VII pp. 325-338
- 大澤研一 2001 「中世大坂の道と津」 『大阪市立博物館 研究紀要』 第33冊 pp. 1-8
- 大澤研一 2006 「中世上町台地の宗教的様相」 栄原永遠男・仁木宏編 『難波宮から大坂へ』 和泉書院 pp. 167-189
- 大澤研一 2007 『『日本一鑑』所収「滄海津鏡」の基礎的検討——六世紀大阪湾周辺の地形と港湾都市——』 『共同研究成果報告書』 1 大阪歴史博物館 pp. 17-36
- 大澤研一 2010 「村から在郷町へ—摂津国平野の空間・社会構造をめぐる—」 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編 『中世はどう変わったか』 高志書院 pp. 133-154
- 大澤研一 2012a 「戦国期摂河泉における本願寺の地域編成について」 『市大日本史』 第15号 pp. 19-42
- 大澤研一 2012b 「道からみた豊臣初期大坂城下町」 『大阪歴史博物館研究紀要』 第10号 pp. 21-32
- 大澤研一 2013 「上町台地の中世都市から大坂城下町へ」 『中世都市研究 18 中世都市から城下町へ』 山川出版社 pp. 85-100



# 近世城下町大坂の誕生と拡大

松尾信裕

## 要旨

中世の大阪には四天王寺門前町、渡辺津、大坂寺内町の三つの都市が繁栄していた。古代より商工業が発展していた四天王寺門前町、流通や港湾機能を持つ渡辺津、そして寺内町であり城塞としての高い防御性をもった大坂寺内町。豊臣期の大坂城下町はこれらの要素を取り込んで建設された。

織田信長の後継者となった羽柴（豊臣）秀吉は、大坂寺内町の跡地に城郭を置き、四天王寺や渡辺津まで町人地を延ばし巨大な城下町を出現させた。その構造は城郭を中心に置き、城の周囲に家臣団屋敷を集め、その外に町人地を配置させたもので、織田信長が建設した城下町の影響を受けていた。

大坂城下町は豊臣政権の安定とともに大きく拡大したが、政治が京都で行われることが多くなり、大坂の性格が変貌してきた。さらに秀吉の死によって豊臣政権は瓦解し始め、関ヶ原の戦いによって西軍が敗北すると豊臣家の地位はさらに弱まった。こうした政治の動きに連動して大坂に屋敷を構える武家は限りなく減少したが、町人地は賑わいを極めていた。そして迎えた大坂の陣によって大坂は荒廃したが、徳川幕府の主導により再び商工業の町として再生した。

## 1、はじめに

江戸時代に天下の台所として商工業が繁栄する都市となった大坂は、豊臣秀吉による大坂築城と城下町建設によって始まる。その城下町もそれ以前の中世都市の要素を取り入れて巨大な都市となった。また豊臣家滅亡後も秀吉が建設した城下町が核になってさらに拡大していった

本稿では豊臣期大坂城下町が取り込んでいった中世都市を概観し、豊臣大坂城下町にどのように継承されたのか、また、誕生した大坂城下町がどのような経緯で拡大していったのか、豊臣政権の伸長や衰退に絡めて大坂を見てみたい。

さらに大坂の陣によって焼亡した大坂がどのように復興してきたのかも概観し、その中にある大坂町人の屋敷地の構造なども見て行く。

## 2、大坂城前夜

古代から中世の大阪では都市と言える町場は四天王寺門前町と、古代難波津の港湾機能を継承した渡辺津が南北の拠点として繁栄していた。その後、室町時代の明応5年（1496）に、上町台地北端部の高台に蓮如によって坊舎が建てられ、その直後から坊舎の周囲には六つの町が存在し寺内町を形成した。これら三つの町が中世大阪を代表する町と言える。以下ではそれぞれの町の姿を概観する。

**四天王寺門前町** 飛鳥時代より法灯を守る四天王寺の門前に形成された町で、浄土信仰の高まりとともに、西の大阪湾に沈む夕日から発想して、極楽浄土が大阪湾の西の海上遠くに存在すると信じられ、四天王寺が極楽浄土の東門の中心と考えられるようになった（『四天王寺御手印縁起』）。こうしたことも相俟って四天王寺の西側に町屋が集まってきたのであろう。室町時代明応年間には「四天王寺ハ

七千間在所」(『大乘院寺社雑事記』明応8年(1499)9月13日条)と記載される程に繁栄していた。それを示す証拠として、四天王寺境内の西側、谷町筋の西に面する敷地で行われた発掘調査では、奈良・平安時代から室町時代の掘立柱建物や溝・土壌が重層的に見つかり、継続して人々が居住していたことが判明している(西近畿文化財調査研究所2006)。

中世に属するものとしては、13・14世紀代の井戸や土壌、溝がたくさん見つかった。その中にはハマグリなどの貝殻がびっしり埋められた土壌や井戸がある。四天王寺の西にある今宮はハマグリを京へと売りに出かける「今宮供御人」の存在が知られるが、この天王寺にもそうした生業に就いた人々が居住していたのである。また、ここでは幅2m、深さ1m以上になる南北方向の堀が見つかった。断面は逆台形状で、埋土は東側から埋められており、東側に土塁があったと想定されている。この堀からは14・15世紀代の遺物が出土している。四天王寺周辺では同様の堀が幾つも見つかっており、戦乱から四天王寺境内を守る堀がめぐらされていたようだ。

この調査地からは古代には土師器・須恵器・緑釉陶器が、中世には土師器・瓦器・瓦質土器のほか、中国製青磁や国産陶器など広域流通品も多数出土している。

**渡辺津** 上町台地北端部の西側裾部から現在の北浜付近までの大川南岸には、古代から中世の遺物を出土する地点が広範囲に広がっている。大川沿いにあることからこの場所が平安時代以降、熊野や四天王寺への参詣のための上陸港であり、交通の中継地点として賑わった渡辺津と考える。そして渡辺津は古代の難波津の港湾機能を継承した港と推定できる。

この一帯の古代から中世の景観を復元した趙哲済によると、古代から中世にかけて、道修町や伏見町の通りの地下に、東から西に広がる水域が推定されている(趙2004)。そしてその周辺では多くの遺構や遺物が見つまっている。この一帯から出土する遺物には、中国製の青磁や白磁、国産の古瀬戸や常滑焼や渥美焼などの広域流通品のほか、東海地方の山茶碗も見つまっている。こうした遺物が出土することからこの地は、他地域との交流を行う港湾集落と言える。

ここからは「東大寺大佛殿」を瓦当文様にした軒丸瓦が出土しており、12世紀末に東大寺再建を行った東大寺の俊乗房重源との係りが深いと推測できる(大阪市文化財協会2004a)。重源は東大寺再建にあたって、各地に別所を設けたが、渡辺にも「渡辺別所」を設けており、同時に「木屋敷地」を置いていた。この別所には浄土堂・来迎屋・娑婆堂があり(『南無阿弥陀佛作善集』)、重源の教えを聞く多数の人が居住していた場所だったのである。

**大坂寺内町** 秀吉によって大坂城が築かれる前、上町台地北端部には本願寺と寺内町があった。明応5年(1496)、本願寺八世の蓮如がこの地に坊舎を建設したことに始まり、天文元年(1532)の山科本願寺寺内町焼き討ち後に、本願寺が大坂に移転してきて、浄土真宗の本山となった。それ以来、本願寺は寺内町の周囲に土居を築き堀を巡らせて、「摂州第一の城」と言われるまでの城塞となった。

元亀元年(1570)から織田信長との戦いが始まり、天正8年(1580)までの10年間戦いが続いたが、正親町天皇の斡旋により講和を結び、本願寺は大坂を退去することになった。そしてその直後に建物が焼亡した。大坂本願寺は大坂城の地下深くに埋もれているため、その遺構はまだ見つからないが、その周囲では礎石建物や護岸や堀などが見つまっている。

大阪城公園の北西にある追手門学院構内では礎石建物が発見された（大阪市文化財協会 1988）。寺内町の町屋の可能性もある。その西では大川の護岸石垣が見つかり、船着場の遺構の可能性が考えられる。また、大阪城公園の西の大阪府警本部敷地内では水田が見つかり、難波宮史跡公園の南方では上端幅9m、深さ4.3mの堀が見つかり、この堀は7.3mの土橋を挟んで東にも同様の規模の堀が作られていた（大阪市文化財協会 2004b）。大坂寺内町の南方を守る堀であろう。

本願寺が移転した後、織田信長はこの地を押さえ、いずれは自らの城郭を築こうとしていたのかもしれないが、2年後の天正10年（1582）に本能寺において明智光秀に討たれ、その夢は叶わなかった。その夢を実現したのが信長の後継者となった羽柴秀吉である。秀吉は清須会議後に大坂を預かっていた池田恒興を美濃に移し、自ら大坂に入り大坂城を築き、同時に城下町を建設した。

### 3、大坂城以前の城と城下町

天正11年（1583）から秀吉は大坂城下町を建設するが、それより前の天正2年（1574）から長浜に城下町を建設している。長浜城下町もそれより以前の、信長が建設した城下町プランを参考にして建設したのではないかと考える。以下では信長が建設した小牧・岐阜・安土の城下町と、秀吉が建設した長浜城下町を概観する。

**小牧城下町** 小牧城は小牧山山頂に築かれた城郭で、永禄6年（1563）に清須から居城を移し、永禄10年（1567）に岐阜に移るまでの間存続していた。信長は城郭の南に縦町型の城下町を建設した（図1）。

城郭に接するように居館や家臣団屋敷を配置し、その南の城下町の東部には武家屋敷地や寺院と推定される広い敷地が配置され、西部には町人地を配置している。町人地の構造は並行する4条の直線道路に面した両側町で、長方形街区の中に短冊型地割を配置し、長方形街区の中央、町境の位置には背割下水が完備していた（中嶋隆 2008）。

この段階で身分による居住空間の設定が完成している。また、城下町の東を流れる河川に川湊が存在しており、水陸交通を利用できる場所に城下町を建設している。

**岐阜城下町** 織田信長は美濃を制圧した後、永禄10年（1567）に小牧山を出て岐阜へと城下町を移した。その岐阜はそれ以前から井ノ口という名称で繁栄していた町で、信長はそ

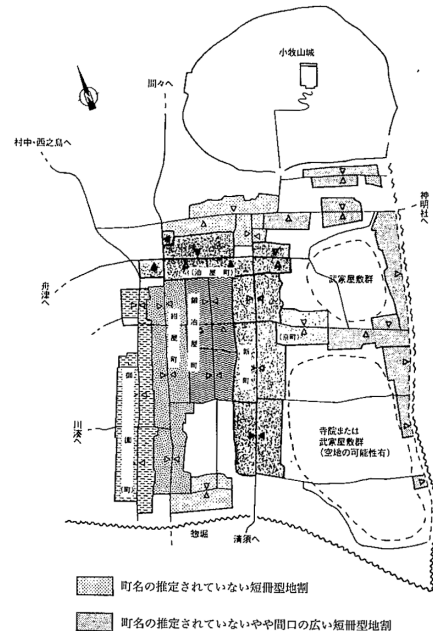


図1 小牧城下町概要図  
（中嶋 2008）より転載

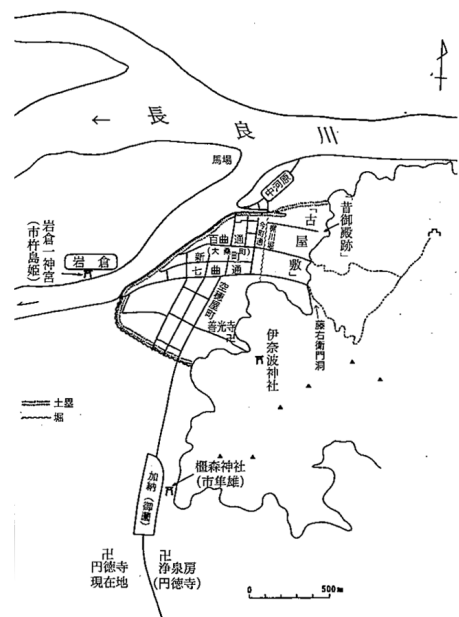


図2 岐阜城下概略図  
（内堀 2008）より転載

の構造を継承し拡大させた（図2）。

城下町の構造は金華山山頂に城郭を、山麓に居館を置き、その周囲に家臣団屋敷があつて、町人地はそこから西に延びる東西道路と、直交する南北方向の道路が敷設され、それらに面する両側町であった。この構造は斉藤期の姿のままで、信長による新しい町作りの痕跡は認められないという。惣構も斉藤期から存在していたとされる（内堀信雄 2008）。となると、岐阜に残る両側町構造は斉藤段階に出現していたことになる。

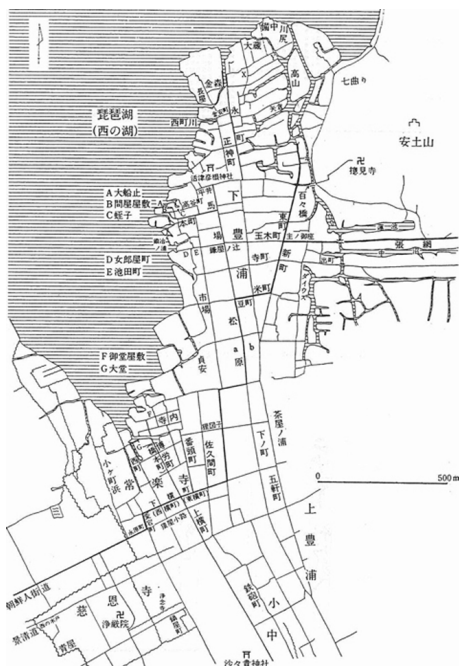


図3 安土城下町（『琵琶湖がつくる近江の歴史』研究会編 2002）より転載）

**安土城下町** 安土は比高約 100 m の安土山山頂に天守や御殿を始めとする中枢施設が置かれ、金箔瓦が使用されている。山腹に造成された曲輪には石垣が築かれている。

城下町は安土山西麓にある微高地に広がっている（図3）。その北端の湖岸に面する一帯に武家屋敷を配置し、その南部に町人地を建設している。

微高地に広がる町割は微高地の稜線の規制されているため、湖東地域の条里地割とは方向が異なっている。南北方向の道路にも2種類の方向があり、多くが微高地の稜線に平行するが、微高地の東縁の方向に沿う、稜線よりも北で東に降る方向の道路もある。いずれにしても城郭に向かって伸びる道路が基本軸となる城下町であった。

**長浜城下町** 天正2年（1574）、湖北を与えられた秀吉が建設した秀吉最初の城下町である（図4）。琵琶湖岸に城郭を置き、湖上交通と陸上交通の結節点としてこの地を選択

した。城下町建設にあたっては小谷城下から長浜に住人を移転させた。

城下町は城に向かって延びる東西道路に間口を開く縦町型で、北町・魚屋町・大手町・本町の各通りの間隔はほぼ同じ間隔で敷設され、天守を見通せる本町を町の中心軸とした。これら四町が最初に建設された町と考えられる。

秀吉は長浜の次に山崎に居城を建設するが、山麓の山崎には中世の町割りがそのまま残っており、秀吉による改変はなかったと考えられる。

秀吉は山崎を本拠地にしようと考えていたのではなく、柴田勝家や織田信孝を挑発するための足場と考えていたのではないだろうか。

秀吉による大坂城下町建設までに存在した城下

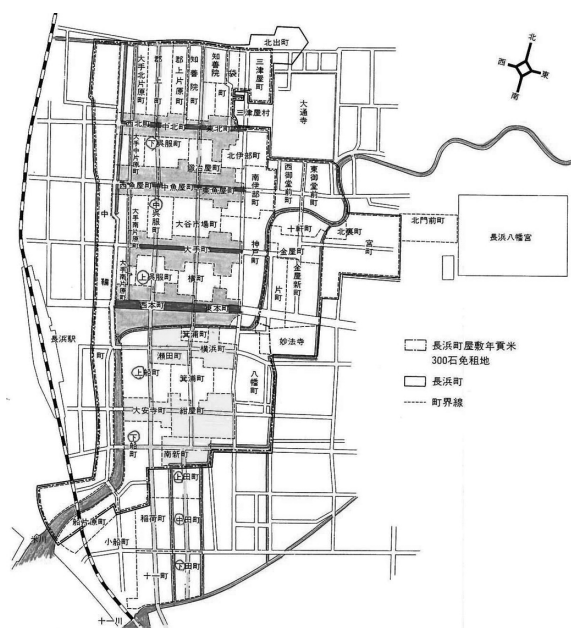


図4 長浜城下町（『森岡栄一 1988』より転載、加筆）

町を概覧したが、そこにはすでに豎町型の両側町が完成しており、秀吉はそれらの利点を採用して大坂城下町建設を目指したのであった。ここで、大坂城下町建設以前の城下町の特徴を見ておこう。

信長の城は城下町を見おろす高い山頂部に本丸を置いていたが、秀吉の城は比高の小さい平地部を下りてくる。二人に共通するのは城下町に職商人を誘致し街道を取り込むなど、城下町の流通や産業の発展を目指している。それを具現化するために複数の道路が並行する豎町型の町人地を建設した。その内部は長方形街区の中に短冊型地割の敷地を配置した両側町であった。しかし、この時期はまだ城下町を中心とした領国経済の枠を出るものではなかった。

#### 4、大坂城下町の誕生（豊臣初期）

天正 11（1583）年、秀吉は本願寺の跡地に大坂城を築く。同時に南方の四天王寺門前町と西の渡辺津を取り込んで城下町を建設した（図 5）。秀吉が建設した大坂城下町は、その初期には、先に述べた周辺の中世都市を吸収して出現した。その構造は信長が建設した先の諸城下町と同様、城郭を中心に据え、その周囲に家臣たちの屋敷を置き、その外側に豎町型の町人地を建設した。

摂津およびその周辺は、堺や渡辺津のような港湾都市や四天王寺門前町のような寺院勢力が核となる都市は存在していたが、有力な武家勢力が存在していなかった地域で、そこに初めて秀吉が武家勢力の都市を出現させた。大阪湾岸には堺や渡辺津、大物、尼崎などの港湾都市が立地する。また、内陸部も河内地域には寺内町が多く存在し、少し離れても奈良や京都という伝統都市が殷賑を極めていた。

そうした地域であったため、武家勢力の都市が存在する基盤がなく、この地域に入ってきた武家はそうした都市の賑わいを利用することはあっても直接都市に入ってきて領有することはなかった。

織田信長がどうしても本願寺が立地する上町台地の突端を手に入れたかったのは、『信長公記』に記述されたように、渡辺津が貿易港としての機能を持っていたからに他ならない。この段階で初めて摂津に武家勢力が自らの都市を建設することになった。

本能寺の変で信長が斃れても、信長の後継者である秀吉が港湾機能を保持していた渡辺津や産業都市として繁栄していた四天王寺門前町を自らの城下町に取り込み、「摂州第一の城」としてその要害性を発揮した本願寺の跡地に居城を置いた。

『柴田退治記』にも大坂を「五畿内の中央」と位置付けている秀吉であったが、これは言うまでもなく大阪湾に接するように立地する上町台地の地

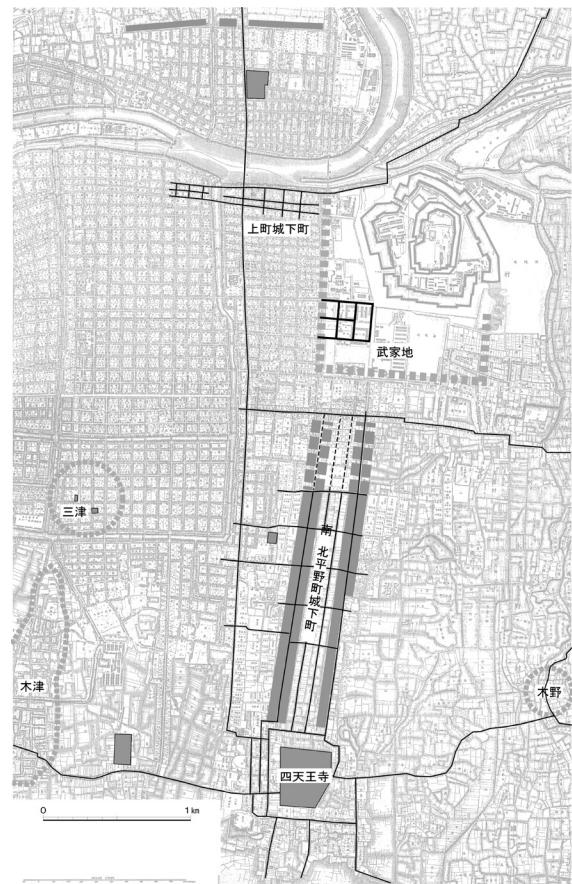


図 5 豊臣初期の大坂城下町想定図（松尾作図）

形が信長や秀吉の城下町観に合致したからと言えよう。上町台地は古代には宮都が建設され、中世には本願寺が建設されたが、それに接するように港が置かれ、瀬戸内水運や淀川水運と陸路との結節点であった。こうした立地環境が近世初頭においても評価されたのであった。

また、信長は保守的な政治都市である京都には入らず、近隣にある交通の要衝に自らの本拠を建設し、政治を行う手法をとったが、秀吉も大坂という京都に近接する港湾機能や流通機能が高い都市に本拠地を構えた。

秀吉が大坂で建設した初期城下町は、産業都市として栄えていた四天王寺門前町へと延びる帯状の城下町と、港湾都市として栄えていた渡辺津へと延びる、2条の並行する直線道路に面する奥行き20間の街区であった。四天王寺門前町までの町は平野環濠都市から住民を強制移住させて建設しており、平野環濠都市の繁栄を大坂に引き込むことで、大坂を繁栄させようとした。その結果、平野環濠都市は弱体化していったと想像される。新設した四天王寺門前町までの城下町の東西には、町を挟むように奥行き30間の寺町を配置している。

渡辺津へと延びる城下町は、島町とその西延長部になる高麗橋通りと、その北の土佐堀通りとその西延長部にあたる今橋通りである。この二つの並行する道路の間には島町から北へ20間のところに石町があり、高麗橋通りから北へ20間のところに浮世小路があり、これらも連続した道路と考える。ここには渡辺津や大坂寺内町の住民を居住させた可能性がある。

一方、大坂城の西側や南側には武家屋敷地が建設されている。この地域はこれ以降、継続して武家屋敷地として利用される場所である。大坂城の西側の武家屋敷地では金属加工業種が集中する場所がある。築城工事や武家屋敷内の建物普請などの需要に対応したものと考える。その金属加工業種は豊臣前期までは鑄造関連遺物や鍛冶関連遺物が見つかるが、後期になると鑄造遺物がみつからない。鑄造業だけが郊外に移転させられたのではないだろうか。

産業で所在地が判明したものに瓦生産がある。大坂城の南西部、後の惣構内南西隅に瓦窯が9基発見された。窯跡から出土した軒平瓦の瓦当文様は大坂城本丸詰の丸石垣調査で出土した瓦と同範であることが判明した。大坂城本丸にあった建物に葺かれていた事を考えると、この瓦窯は大坂城築城当初より稼働していたと考える。

後に惣構南西部に取り込まれる瓦窯が発見された一帯は、街区構造が徳川期に改変されている可能性のある場所で、豊臣期の初期段階から豊臣家の直属家臣団や職人の居住空間として利用されていた地域ではないかと推定している。

### 5、城下町の展開（豊臣前期）

天正13年（1585）、秀吉は関白となった。その後、天正14年（1586）から京都における豊臣政権の政庁として聚楽第の建設に着手し、天正16年（1588）には聚楽第に後陽成天皇を迎える。この時期が秀吉にとって最も晴れがましい時であった。同時に豊臣政権も安定しはじめ、秀吉の本拠地である大坂も繁栄し、各地から職商人が大坂へと集住してきたと考える。そうした職商人の居住地として設定されたのが、初期に建設された島町の南の釣鐘町から大手通りまでの街区と考える。その街区は奥行きが20間の島町の街区とは異なり、奥行き15間の街区であった（図6）。



京都に聚楽第を建設したことによって、大名だけでなく豊臣政権を支える家臣団も京都に移ることになったことは想像に難くない。天正18年(1590)に小田原の北条氏を滅ぼし、東北諸大名を抑え、天下統一を完成させた。この結果、東国大名は京に屋敷を構えることになり、大坂に屋敷を構えるのは一部の西国大名と秀吉直属家臣団となったのであろう。

豊臣政権の都市政策は大坂を最大の都市にしていこうとするもので、天正14年(1586)に小西隆佐と石田三成を堺奉行に任命し堺を支配し、堺の環濠を埋めた。先に平野環濠都市の堀を埋め繁栄を削ぎ取ったが、今回再び堺の堀を埋め堺の繁栄を大坂へと導いた。周辺諸都市の力を削ぎ、大坂に経済力を集中させようとしていた。

そのような中、秀吉は関白の位を甥の秀次に譲り、自らは伏見の指月に築いた指月伏見城に入り、そこから京都と大坂へ睨みを利かすことになった。

そして、大坂城は秀頼に譲渡することになった。文禄3年(1594)のことである。このことで、秀吉がいる伏見が大きな位置を占めるようになり豊臣政権の公儀の城下町へと変貌し、大坂は豊臣家の城下町となった(横田冬彦2001)。

この年、大坂では大坂城惣構工事を行い、大坂を囲い込んで更なる防衛線を築いて強固な城郭となった。しかし、この工事で初期に建設された四天王寺までの城下町と高麗橋通りの城下町が郭外となった。この工事では町人地だけでなく寺町も改変されたようで、惣構堀北側に整地された惣構堀掘削土内から、一石五輪塔と六文銭が埋納されていた皿が出土した。このことから惣構堀の位置に墓地を伴う寺院があって、それを掘り返したために五輪塔などが整地層の中に混ざったのだろうと考えられる。

惣構工事以前は、寺町の北端が惣構堀よりも北まで延びていたと想定できる。その北端は奈良と大坂を結ぶ奈良街道にあたる内安堂寺通りまで延びていたと推定した。

大坂城下町は起伏の多い上町台地の頂部にあることから、掘削で上がった土砂で起伏を均して平坦面を造成し、都市域の拡大を図っていったのである。

## 6、巨大城下町への道(豊臣後期)

慶長3(1598)年、秀吉は病の床から三の丸の建設を命じた。これは嫡子秀頼の将来を案じて、大名が離反しないよう大名の家族を大坂に置くために、大名屋敷を大坂城の南部に配置した(図7)。

現在、大阪城南部の法円坂一带には約250m間隔に敷設された道路による方面地割がある。この方面地割が展開している範囲を三の丸と推定した。慶長元年(1596)から建設された木幡山伏見城下

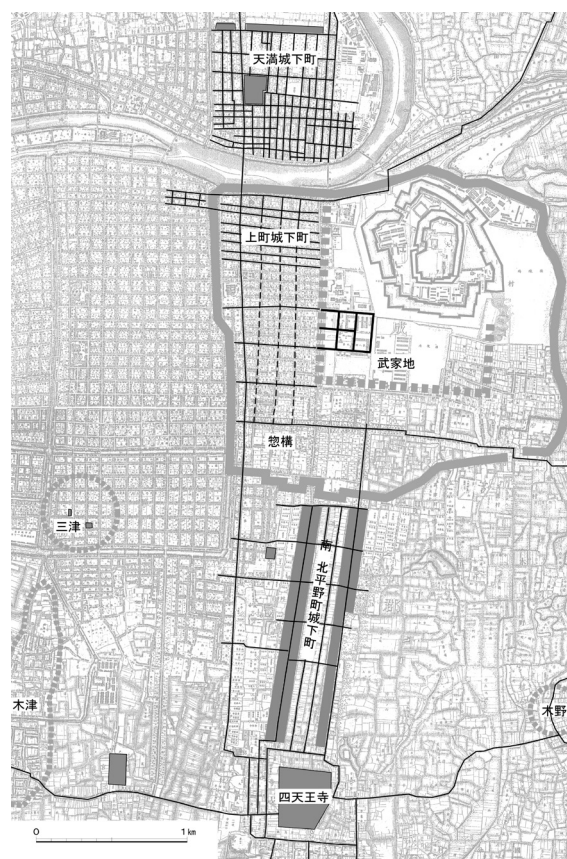


図6 豊臣前期の大坂城下町想定図(松尾作図)

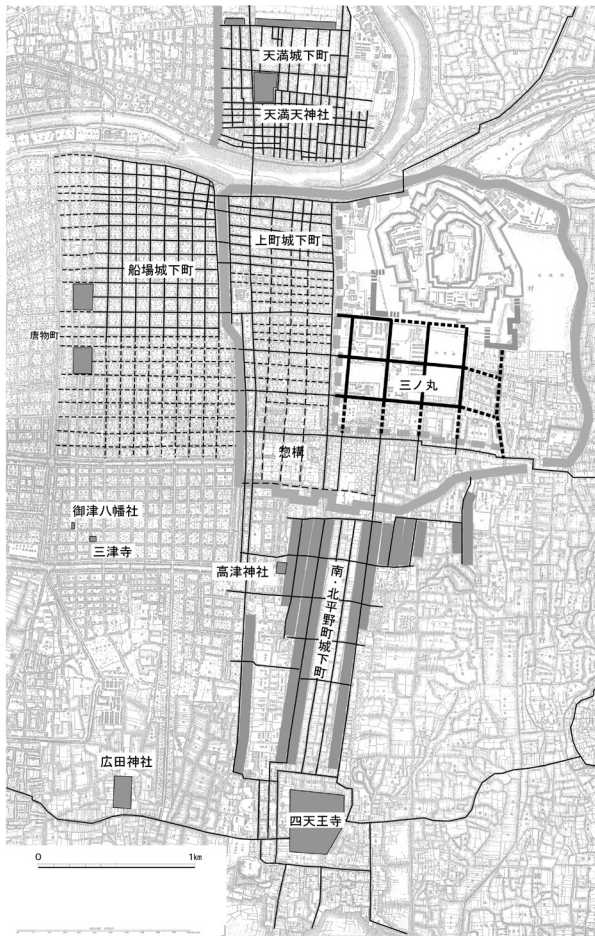


図7 豊臣後期の大阪城下町想定図（松尾作図）

町でも約 125 m の方面地割が依存しており、その範囲は武家屋敷と推定されている（森島康雄 2001）。大坂が約 250 m 間隔で約 125 m 間隔となっている伏見のほぼ倍数となっていることから、二つの城下町に共通した規格と考える。

大坂における三の丸工事は、その工事域に居住していた町人を排除するものでもあった。そこに居住していた町人は新たに造成された地区に強制移転させられたのである（大坂町中屋敷替え）。その場所が惣構の西を限る東横堀川の西側の船場地区であった。このように三の丸工事は城内の改造と新たな城下町を建設するという大きな都市改造工事であり、都市大坂の画期となる工事であった。この工事によって豊臣期を前期と後期に区分している。

この工事のさなか秀吉が没する。そして秀吉の遺言によって、西国の大名は伏見に居住し、東国の大名は大坂に居住することになり、伏見と大坂に大名が二分化されることになった。さらに、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いでの西

軍の敗北により、西軍に加担した大名は没落し、大坂にあった彼らの屋敷地は荒廃したであろうし、存続した大名は家康がいる伏見に集中したのであろう。その後に家康が大坂城に入城するに伴い、再び大名達も大坂に移転してくることになる。

こうした大名たちの移動に伴い、大坂の武家地に大きな変化が生じたと推定できる。惣構内部でも豊臣後期になって町人地が武家地が変わる場所があり、それまでの城下町の範囲の外にも武家地と推定される大型建物がある屋敷地が見つかるなど、大坂城下町の周辺部に武家地が建設されてきた可能性がある。それまで大坂に屋敷地を所持していなかった大名たちの屋敷用地が不足してきたのではないだろうか。

そして次第に家康と豊臣家の確執が強くなるにつれ、多くの大名は豊臣家を見限り江戸へと移り住んでいった。そして、慶長 19 年（1614）・20 年（1615）の大坂の陣の時には、大坂に屋敷を置く大名はいなかったと言われている（横田 2001）。

三の丸の建設に伴って建設された船場地域の城下町は、初期城下町である高麗橋通りの南に、40 間の方面地割を持つ構造であった。現在の地形図を子細に観察すると、高麗橋通りと道修町に挟まれた伏見町は町の形態が楔形になっており、町の東では奥行きが十分取れず、西側の屋敷地の奥行きが長くなっている。初期城下町と新たな船場城下町の隙間を埋める調整街区と推定できる。

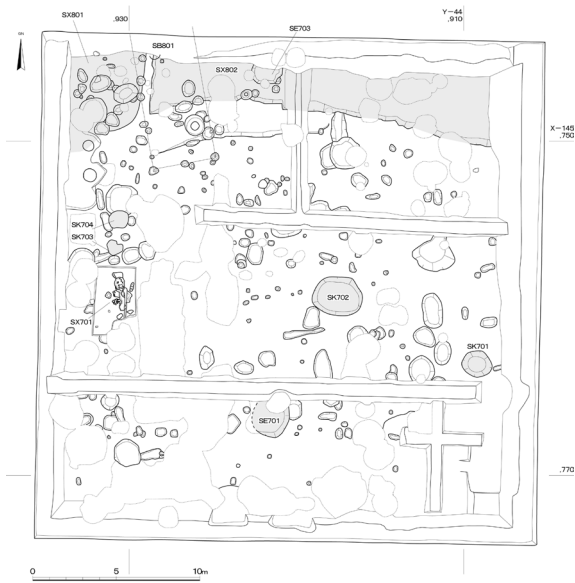


図8 道修町1丁目調査地豊臣前期遺構面  
((大文協 2004) より転載)

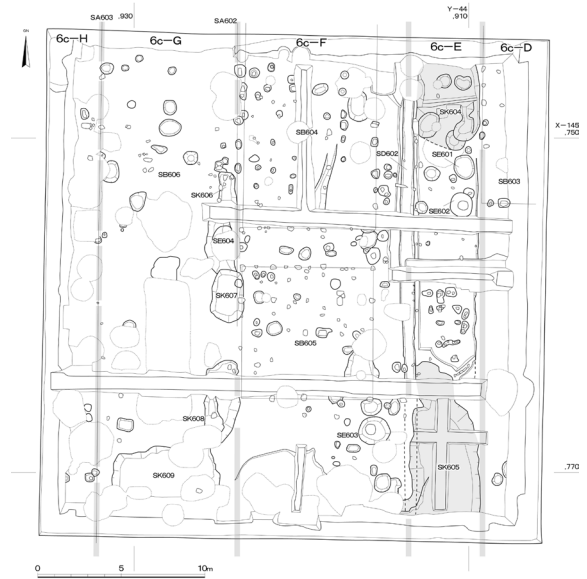


図9 道修町1丁目調査地豊臣後期遺構面  
((大文協 2004) より転載)

船場城下町の構造は東西方向の道路に間口を開く短冊型地割で、敷地の奥行きが20間の縦町型をとる。その範囲は東が東横堀川、西が心齋橋筋、北が道修町、南が南本町までと推定できる。

南本町の南にある唐物町は、奥行きが北側で4間、南側で12間と極端に狭い。これも唐物町より南の北久太郎町から博労町までの町屋が奥行き20間であることから、唐物町も調整街区と想定できる。奥行きの短い唐物町が出現した要因は、上町地区の道路と繋がる東横堀川に架かる橋を起点にして、北久太郎町以南の道路が敷設された結果であろうと推定できる。

船場地区北部の道修町や平野町の東部では敷地奥まで建物が建込むが、周辺部では間口部分には建物があるが、奥は疎らな状況が見て取れる(図8・9)。大坂冬の陣焼土層の分布範囲でも道修町や平野町に厚い焼土層が分布し、西端や南端など周辺部では焼土層が見つからない地点もある。これは船場全域に建物が密集して存在していなかったことを示していると考えられる(図10)。

秀吉の死や関ヶ原の戦いでの西軍の敗北などで、豊臣家の権力は急激に衰退していった。それにも

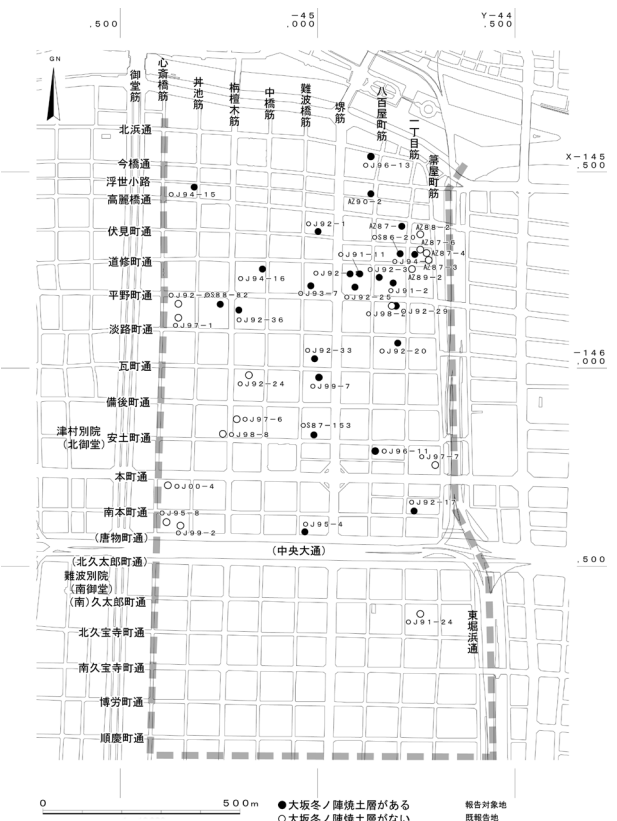


図10 大坂冬の陣焼土層分布図  
((大文協 2004) より転載)

## II 研究報告

拘わらず、惣構外に建設された船場では初期城下町の高麗橋通り付近から南本町付近まで町屋建物が発見される。そしてその敷地からは多くの陶磁器が発見される。出土する陶磁器には当時好まれていた茶陶だけでなく中国や朝鮮半島から運ばれてきた食器類や東南アジアの壺や甕などの貯蔵容器も多く出土する。ここに居住していた町人が豊かな生活を送りながら、国内だけでなく広く海外との交流にも携わっていたことを示す資料もあり、活況を呈した都市になっていたと推定できる。そしてこの後の大坂の繁栄はこの段階の繁栄に基礎があるといえる。

この時期、船場も南に拡張している。先にも述べたが、唐物町を境に町の開発時期に違いが認められる。船場の開発が慶長3年から始まったとすると、唐物町以南の開発はそれ以降になる。船場では慶長5年(1600)から着手される西横堀川の開削や慶長17年(1612)の道頓堀川の開削など都市拡大の画期があることから、そうした時期に市街地が拡大していったのであろう。

### 7、徳川期 巨大近世都市としての拡大

慶長19年・20年(1614・1615)の大坂の陣後、武家屋敷が多く存在した大坂城周辺の三の丸地区では再開発がすぐに着手されなかったようで、大坂夏の陣焼土層を耕した畠が広がる地点が多い。この時期は町人地である船場での再開発が推し進められていたのであろう。

夏の陣より4年後の元和5年、大坂は幕府直轄地となり、翌年の元和6年(1620)から寛永6年(1629)にかけて大坂城の再築工事が行われている。この期間、大坂には工事に従事する大名家と大勢の作業員が集住し、人口が増加してくる。同時に大坂全体で産業も活性化したと考える。同時に伏見城を廃し、伏見から町人を移住させ、大坂の復興が図られた(内田九州男 1982)。

この伏見町人の移住地と推定される地域が大坂城の西側の上町地区で、この一帯は町屋敷の奥行きが街区によって違いがあり、豊臣初期段階から豊臣家の直属家臣団や職人の居住空間として利用されていたと推定した地域である(松尾信裕 2003)。大坂の陣後、荒廃していたことで伏見町人の移転地として再開発が可能だったのではないだろうか。この地域は徳川期以降も武家屋敷地や瓦の土取り場などとしても活用された。

船場地区は大坂の陣後すぐに再開発されたようで、冬の陣の焼土層が攪拌されない状態のまま整地層で覆われている。そこに再建された道路や屋敷地は、豊臣期のそれをそのまま踏襲している(図11～12)。戦乱を免れた町人がすぐに大坂に戻ってきて再建したのであろう。

徳川期には大坂の町人地は上町台地上ではなく、その西側の船場地区で拡大している。開発の手法としては湾岸部の沖積地にいくつもの堀川を開削し、掘削して上がった土砂で造成して居住空間を拡大していった。大坂城再建工事が行われていた寛永期には豊臣期より町の範囲が拡大しており、現在の町へと継承されている。

そして、17世紀後半になると大坂は経済的にも復興しているようで、豊臣期には敷地奥が利用されていなかった町屋敷においても敷地奥まで建物が建て込んでくるようになる。さらに、敷地奥に建てられている蔵と考える建物の基礎が、半間間隔で並んだ礎石であったものが建物の輪郭に沿って切り石を敷き詰める構造になってくる。基礎が堅牢になっているのである。このことから、蔵建物の構造が重厚になったと推定できる。資金を投入して自らの財産を守ろうとしているのであろう。このこ

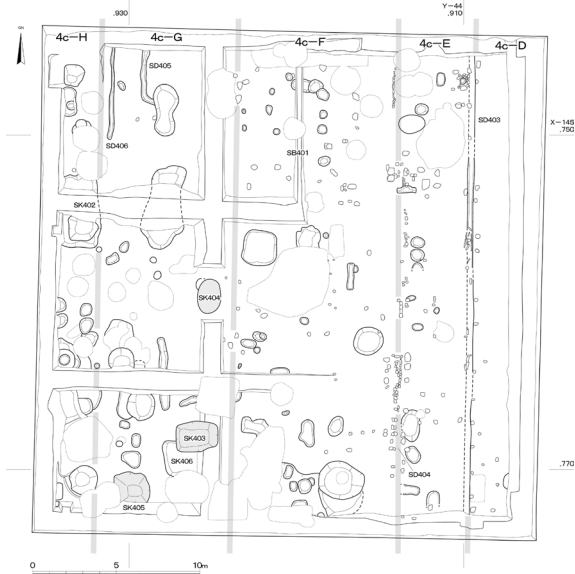


図 11 道修町 1 丁目調査地徳川初期遺構面  
((大文協 2004) より転載)

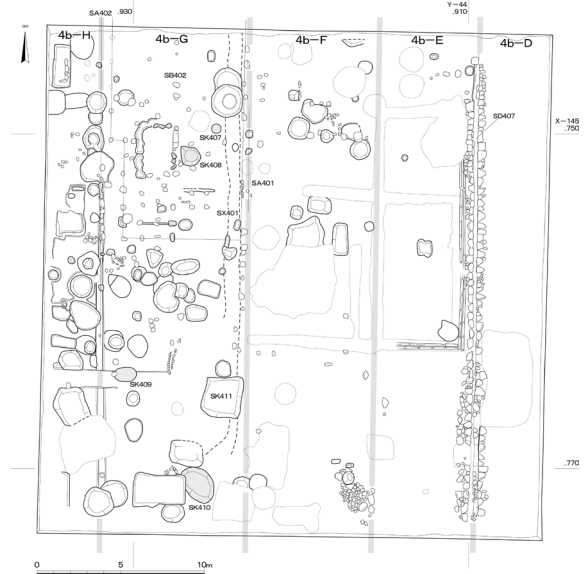


図 12 道修町 1 丁目調査地徳川前期遺構面  
((大文協 2004) より転載)

ろから穴蔵も石材を使用するようになる。建築素材として石材が利用されることが多くなっており、石材の生産体制が整ってきているのであろう。同様に石材の流通が活発になり、加工技術も向上してきていると考えてよい。

この頃から、東西方向の道路に間口を開く豎町型の街区であった大坂に、南北方向の筋に間口を開く屋敷地が出現し始める(図 13)。南北筋に面する角地が再開発されてくる。ここに出現する屋敷地は東西方向の道路に面した間口分の奥行きしか取れないため、短い奥行きとなり間口も狭いものであった。

大坂城下町は秀吉が建設した当初は、天下の富が集中する城下町を目指し、膨張していった。その後、秀吉の死によって豊臣政権は衰退し、それに伴い大坂は政治の中心地ではなくなったが、町人地はそれ以降も拡大していった。

徳川期になっても町人地はその基盤を礎に拡大を続け、国内でも稀に見る商工業都市として繁栄していった。

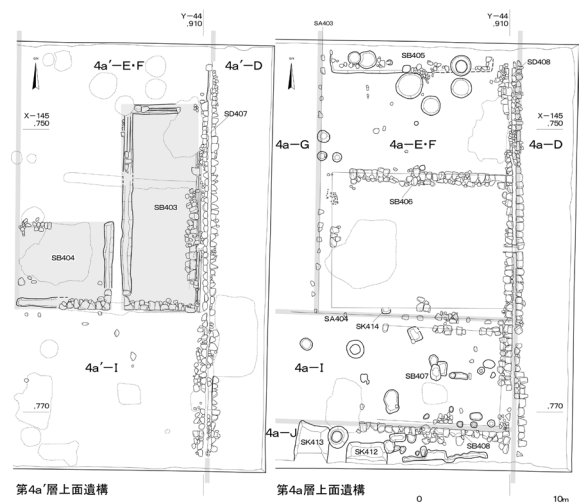


図 13 道修町 1 丁目調査地徳川中期遺構面  
((大文協 2004) より転載)

参考文献

伊藤毅 1987 『近世大坂成立史論』生活史研究所

内田九州男 1982 「大坂三郷の成立」『大阪の歴史』7 pp. 38-63

## II 研究報告

- 内堀信雄 2008 「井口・岐阜城下町」 仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』 高志書院 pp. 59-76
- 大阪市文化財協会 1988 『大坂城跡』 III
- 大阪市文化財協会 2002 『大坂城跡』 VI
- 大阪市文化財協会 2003 『大坂城跡』 VII
- 大阪市文化財協会 2004a 『大坂城下町跡』 II
- 大阪市文化財協会 2004b 『難波宮址の研究』 第十二
- 大澤研一 2006 「中世上町台地の宗教的様相」 栄原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』 和泉書院 pp. 167-189
- 趙哲済 2004 「大坂城下町跡の自然地理的背景について」 大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』 II pp. 347-350
- 中嶋隆 2008 「小牧城下町」 仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』 高志書院 pp. 33-58
- 仁木宏・松尾信裕編 2008 『信長の城下町』 高志書院
- 西近畿文化財調査研究所 2006 『伶人町遺跡発掘調査概要報告書』
- 日本史研究会編 2001 『豊臣秀吉と京都』、図書出版文理閣
- 松尾信裕 2001 「近世大坂の町屋」 塚田孝・吉田伸之編『近世大坂の都市空間と社会構造』 山川出版 pp. 19-45
- 松尾信裕 2003 「豊臣氏大坂城惣構内の町割」 大阪市文化財協会編『大坂城跡』 VII pp. 325-338
- 森岡栄一 1988 「長浜城下町の成立について」 滋賀県立琵琶湖文化館編『研究紀要』 第6号 pp. 9-15
- 「琵琶湖がつくる近江の歴史」 研究会編 2002 『城と湖と近江』 サンライズ出版
- 森島康雄 2001 「考古学から見た伏見城・城下町」 日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』 図書出版文理閣
- 横田冬彦 2001 「豊臣政権と首都」 日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』 図書出版文理閣



# 江戸時代の上町台地

豆谷浩之

## 要旨

豊臣期に台地西部の低地（船場）が開発されて以後、大坂の市街地の中心は台地上から台地の下に移る。徳川期の上町台地には、大坂の陣後に再建された大坂城と周囲の武家屋敷地があり、豊臣氏大坂城の惣構内の地区は、大半が大坂三郷に含まれることとなった。また、豊臣氏大坂城の惣構より南の地区は、一部を除いて三郷の外となっている。

ここでは、上町台地のうち、特に豊臣氏大坂城惣構の外に位置していた地区を中心に、都市大坂との関係という観点から、いくつかの問題について考察を加えたい。

## 1、城南の寺町

徳川期の上町台地の大きな特色の一つは、寺町の存在である。

近世大坂の寺町は、かつては大坂の陣後の松平忠明の治世下で整備されたと考えられてきた。その後、内田九州男氏らの研究によって、寺町建設が豊臣氏大坂城の建設と共に開始されたことが明らかとなっていた（内田九州男 1982）。こうした議論の中では、寺町の建設の開始、すなわち建設計画の起源におもな関心が置かれていたが、ここではその後の都市建設と寺町の整備の経過について注目してみたい（註1）。

城南の寺町は、(図1) のようにいくつかの地区に分かれており、地区ごとにおおむね同じ宗派の寺院が集まっている。先行研究の成果によれば、寺町ごとの寺院の開基年代別件数は以下ようになる（註2）。

◎八丁目寺町（13カ寺中）：天正 7 / 文禄 4 / 慶長 1 / 元和 1

◎八丁目中寺町（15カ寺中）：天正 9 / 文禄 4 / 慶長 2

◎八丁目東寺町（11カ寺中）：天正 1 / 文禄 5 / 慶長 5

◎小橋寺町（12カ寺中）：天正 1 / 文禄 4 / 慶長 7

◎谷町八丁目寺町（16カ寺中）：天正以前？ 1 / 天正 4 / 文禄 1 / 慶長 2 / 元和 5 / 寛永 2 / 寛永以後 1

◎生玉筋中寺町北半（24カ寺中）：天正 5 / 文禄 1 / 慶長 10 / 元和 3 / 寛永 3 / 寛永以後 1 / 不明 1

◎生玉筋中寺町南半（12カ寺中）：天正 1 / 文禄 3 / 慶長 4 / 元和 2 / 不明 2

◎生玉寺町（13カ寺中）：天正 1 / 文禄 3 / 慶長 7 / 元和 1 / 不明 1

◎西寺町（24カ寺中）：天正 3 / 文禄 1 / 慶長 9 / 元和 11

また、天王寺寺町については、寛永年間ごろに完成したと推定されている（平凡社地方資料センター編 1986）。

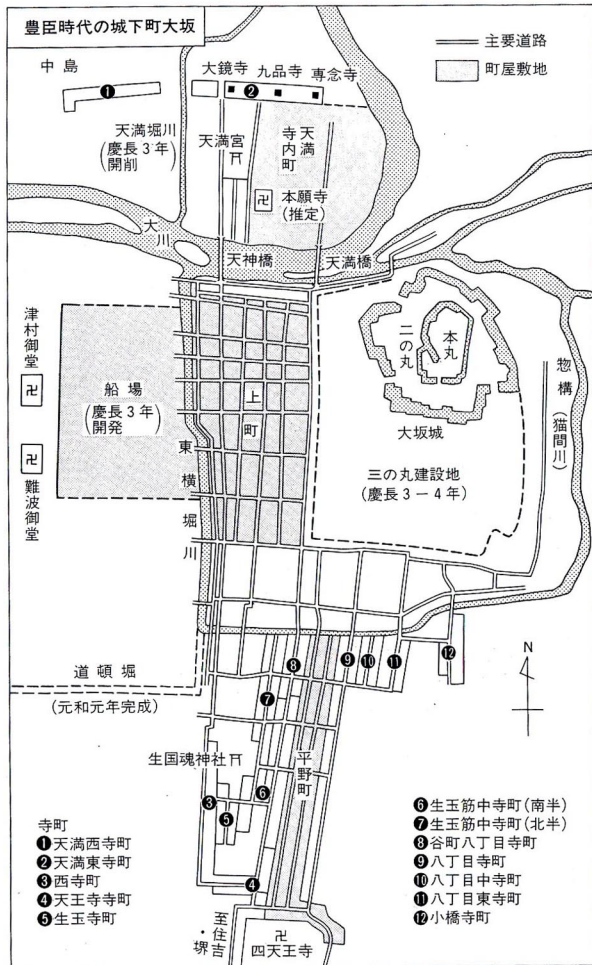


図1 豊臣期の大坂城下町と寺町（内田1989）より

各寺町に属する寺院がほぼ建ち並んだ時期をその寺町の完成時期と考えると、次のような経過が推定できる（註3）。

●平野町城下町の東側に位置する八丁目寺町・八丁目中寺町は、天正年間にある程度の寺院が出そろっており、文禄年間にほぼ完成した。

●その東に位置する八丁目東寺町・小橋寺町は、やや遅れて文禄～慶長年間に本格的な整備が進んだ。

●平野町城下町の西側に位置する谷町八丁目寺町・生玉筋中寺町北半部は、天正年間から寺院の建設が進むが、全体としては慶長～元和年間に完成した。

●その南に位置する生玉筋中寺町南半部・生玉寺町の整備は、文禄～慶長年間が中心である。

●上町台地の西側斜面下に位置する西寺町は、慶長年間に寺院の整備が進み、元和年間に完成する。

●最も南に位置する天王寺寺町は、寛永年間に完成した。

寺町以外の寺院では、四天王寺の西方にある新清水寺が寛永17年（1640）に京都清水寺から千手観音を移した（寺院としての開基は不詳）とされる。

全体としては、北から南へ、豊臣初期の城下町である平野町を中心として外へ、という流れになっている。大坂の寺町については、豊臣秀吉の大坂城下町建設と同時に整備が始まったが、その後も拡大が続いており、寛永年間に一通りの完成をみたと考えることができる。

特に、西寺町に元和年間に成立した寺院の多くは、船場西部の浄国寺町と中之島の五分一町から移転したものであった（内田1985）。これは、都市域が拡大するにつれて、縁辺部にあった既存の寺院が別の場所に移されたということであり、整備過程と寺町の建設が、一連の都市計画の中に位置づいていることを示していると考えてよい。

また、上町台地に所在する神社のうち、高津宮と生国魂神社は、いずれも大坂城建設に伴って旧所在地から移されたことが知られている。前者は天正11年（1583）の築城開始、後者は慶長3年（1598）の三の丸建設に関わる移転である。移転先が現在地に定められた理由は未詳であるが、寺町の整備計画と無関係であるとは考えにくく、全体として寺社を集中的に配置するという考えが背景にあったものとみてよからう。



以上のように、市街地に隣接する上町台地に寺社が集められたということは、徳川期大坂におけるこの地区の性格・役割を規定する要因となった。この点については、以下で見てゆきたい。

## 2、生産拠点としての上町台地

徳川期の上町台地を特徴づける要素の一つに、この地が都市周縁部における手工業生産の拠点となっていたことが挙げられる。

上町台地には古代以来の大寺院である四天王寺がある。こうした寺院には、番匠や瓦大工などの建築に関わる職人が従属していることがもっぱらであるが、中世以前の四天王寺に関しては必ずしも明らかでない部分が多い。

豊臣期になると、大坂城建設との関係での生産活動が行われたことが知られる。その典型と考えられるのが、2002年に中央区和泉町1丁目で発掘された瓦窯である。この瓦窯は、豊臣期大坂城建設のための瓦を焼いたものと考えられている。この地点は、豊臣期大坂城の惣構築城後には城内となる。しかし、上町台地の西側斜面に位置する当地は、築城初期には城下町としての開発は行われておらず、火を扱う生産場としても利用可能だったということであろう。

徳川期になると、もと大坂城惣構の南西端に御用瓦師・寺島藤右衛門が土地を拝領し、瓦の生産拠点はやや南に移った。この瓦屋町の一角で2008年に発掘調査が行われている。

この調査では、瓦窯などの遺構は発見されなかったが、「神咒寺勧請堂」銘の軒丸瓦の瓦範や窯道具、焼成不良で廃棄された瓦などが出土し、近隣で瓦生産が行われていた裏付けとなっている。さらにこの発掘調査では、瓦以外の多様な産業に関連する資料が出土し注目されている。それらは、①陶磁器生産、②土人形生産、③鋳物生産、④ベンガラ生産、に関する資料である。それぞれに関する遺構は検出されておらず、かつ同じ敷地内に廃棄されていたため、実際の作業がどこで行われたかは不明であるが、さほど遠くない場所が工房の所在地であった可能性が高い。

文献史料でみると、延宝年間に「高原焼」および「難波焼」の生産が始まっている。

「高原」は豊臣氏大坂城惣構の堀跡の地名で、『撰陽奇観』に「器物は無量の類ひ多し茶碗水指水こぼし花生卓香炉薬鍋土釜其外数寄の小道具等数品あり、土色は鼠浅黄葉色は浅黄葉黒きと青色と薄き縁付の絵あり、花生は牡丹葡萄等色々作り物を用ゆ、陶工のいふ京師黒谷山の土を用ひて難波に於て焼初とぞ、高原焼は難波焼より出所古し器物の類難波焼に同じ、茶碗などは高麗に成程よく似たるもの也」とある。一方、「難波焼」は、延宝元年(1673)に「大坂高津辺にて難波焼物を初て焼く」との記事がみえる。

また、近世大坂の地誌である『難波丸綱目』には、職業別に所在地を書き上げた「諸職商人所付」の内容がある。「南瓦屋町」・「高津」・「高原」の地名が挙げられているのは次の業種である。

【延享版】 南瓦屋町：鋳物師・土火鉢・土人形・土焼物類

高原：雪駄

【安永版】 南瓦屋町：鋳物師・土火鉢・臼屋（木臼）

高津：ベンガラ、土瓶・同ふろ・このほか素焼物、割松

高原：石灰屋・雪駄

寺島家の瓦生産については、別項に掲載されているため、ここには挙がっていない。それ以外の業種に関しては、瓦屋町遺跡の出土資料に対比できる内容が出そろっている。特に焼物関係では、陶磁器一般ではなく「土火鉢」あるいは「土瓶・同ふろ・このほか素焼物」といった特定の製品が記されていることが特長と言えよう。このうち、安永版に見える「ふろ（＝風炉）」は煎茶で用いられる道具である。江戸時代後期の大阪では、町人の間に煎茶が流行したことが知られている。出土資料では、堂島や中之島の蔵屋敷跡で、風炉を含む煎茶道具が多数見つかっており、蔵屋敷を場とした蔵役人（武士）と出入りの商人（町人）の接待・交流に用いられたものとして注目されている。

また、明治期に編纂された『浪花百事談』には、「のど町（＝野堂町）」にあった人形職人の庭に山吹が栽培されており、名所として知られていたとの記事が見える。花の話題については後の節で触れるとして、一例とは言うものの「野堂町」すなわち「北平野町」に人形職人が居住していたという点で興味深い情報である（註5）。

先に見た『難波丸綱目』には、出土品以外の産業に関わる内容も見られる。文字情報の限りでは、この地で販売されただけの製品が含まれている可能性は否定できないものの、瓦屋町を含む一帯がさまざまな製品の生産拠点であったことは間違いないであろう。

これらの業種が上町台地に集まっていたことの要因として、①火を扱ったり、騒音や廃棄物などの出る製造業は、市街地の中心での操業が不適切であった、②上町台地には多数の寺社があり、これらに近い場所が好都合であった、ということが考えられる。特に②については、瓦屋町遺跡の出土品から想定できる製品が、瓦や梵鐘、赤色顔料（ベンガラ）など、寺社で必要とされるものが多いという指摘がある。しかしながら、この地で生産された製品は、寺社向けのものばかりではなく、当然ながら大消費地である大阪市中、あるいは流通拠点としての大坂の需要も満たしていたものと考えられる。そうした意味では、大坂三郷の市街地と台地上の寺社地の両方に近接していたこの地は、さまざまな製造業の立地として好適地だったと言えるのではないだろうか。

これまで大坂の製造業としては、船場地域に多様な業種が集まっていたことが指摘されていた（脇田修 1994）。これは 17 世紀後半の文献をもとに明らかにされたものであるが、少なくとも 18 世紀代以後には、上町台地も近世大坂の産業の中心となって都市基盤を支えていたと言えよう。

### 3、土浦藩蔵屋敷について

江戸時代の大坂には西国大名を中心に多数の蔵屋敷が置かれていたことが知られている。これらは、水運の便の良い中之島・土佐堀・堂島、および西天満に集中していた。そうした中であって、土浦藩（土屋家）の蔵屋敷は、上町台地上の南瓦屋町に位置していた。これまでに見ることのできた江戸時代の大坂図では、元禄 14 年（1701）版「改正大坂絵図」（万屋彦太郎版）で、「土屋相模守」の北東に「大和守蔵屋敷」と「柳沢出羽守屋敷」の記載が見られる。ただし、宝永 4 年（1707）版「摂州大坂図鑑綱目」（万屋彦太郎版）にも同様の記載があるが、他系列の大坂図に記載が見えないため正確な存続期間は押さえられない。少なくとも享保年間以後の資料で上記 2ヶ所の蔵屋敷は確認できなくなるため、この地には土浦藩屋敷だけが残ることになる。

管見の限りでは、土浦藩蔵屋敷の初見は、前掲元禄 14 年版「改正大坂絵図」である。一方、元禄

9年（1696）版『難波丸』には、土浦藩蔵屋敷の記載はない。地図と文献という史料上の性質の違いがあるため厳密には語れないが、ひとまず元禄10年代ごろに土浦藩屋敷が成立したと推定しておく。

注目されるのは、元禄9年版『難波丸』に、土浦藩の「用聞」として、「南瓦屋町 伏見屋四郎兵衛」を記している点である。伏見屋四郎兵衛がいかなる人物か、現時点では判然としないが、元禄年間前半に土屋氏と南瓦屋町との間に関係ができたことがうかがえる。延享5年（1749）版『難波丸綱目』では、土浦藩屋敷は南瓦屋町に登場しており、名代は「同町 寺島孫左衛門」である。寺島孫左衛門は、瓦師寺島氏の一族の可能性はあるが、詳細はわからない。

次に土屋氏の領地の変遷を見る。土屋氏は、数直の代の寛文9年（1669）に武蔵・常陸国内から4万5千石で土浦に入部し、次の政直の時、天和2年（1682）に駿河田中へ転封した。次いで政直が貞享元年（1684）に大坂城代に就任すると、2万石が加増されて合計6万5千石となる。『日本史総覧』の注記には、このときに土屋氏の領地は大坂周辺に移されており、駿河田中には太田資直が入ったと推定されている。その後、土屋政直は、京都所司代に転じたのち貞享4年（1687）に老中に上り、これに合わせて旧領の土浦に復している。このとき、知行の一部は和泉国内に保有されていた。のちに数度の加増があり、最終的に9万5千石となって、幕末までこの石高で継承される。

このような経過から考えると、土屋氏は政直が大坂城代を勤めた貞享年間頃に、大坂周辺の領地や年貢米の管理をする必要が生じ、大坂町人との関係が発生したと推定される。それがなぜ南瓦屋町であったのかは不明であるが、土屋氏が幕府の要職である大坂城代であったという点から考えれば、幕府御用を勤めていた寺島家と接触があった可能性を考えておきたい。

その後の土屋氏では、寅直が幕末の嘉永3年（1850）から安政5年（1858）まで大坂城代に就任しているが、このほかには大坂関係の役に就いた当主はいない。しかし、領地の一部は廢藩を迎えるまで和泉国ほかの大坂周辺に持ち続けていた。このため大坂の蔵屋敷を維持し続けていたのであろう。

現状ではこれを実証するだけの情報は欠けているものの、蔵屋敷の設置と選地に関わる事例として今後検討すべき課題と言えよう。

#### 4、行楽地としての上町台地

生活や経済に余裕が出てくるにつれて、「娯楽」に対する需要が高まってくることは必然と言える。特に近世後期を中心とした都市生活では、観光や飲食、趣味や芸能といったさまざまな分野での「娯楽」が発達した。そのすべてに言及するだけの蓄積はないため、ここでは上町台地との関係を軸に、「花」をめぐる「娯楽」について触れておくことにする（註6）。

寺社などの宗教施設は、信仰の対象であるとともに、参詣にかこつけた「娯楽」の場でもあった。近世大坂では、寺社が集中した上町台地がその中心地となった。上町台地は、寺社の存在以外にも、市街地に近接しており日帰りの時間内に往復できること、高台にあり遠方の風景を楽しむことのできる立地であること、などの有利な条件が備わっていた。

文政～天保期に成立した『摂陽奇観』の記事によれば、近世の早い時期の例として、寛永年間に菊の流行があり、明暦年間には新町遊郭の成立を受けて、同所に植えられた桜の花見が盛行したとされる。延宝8年（1680）刊『難波鑑』では、「天王寺彼岸詣」と題して以下のように具体的な花見の様子

## II 研究報告

を描写する。

「ここには、琴・三味線の訪るれば、かしこには踊りあそび、笛・太鼓・つづみ・尺八などのはやしものにてうたう声もおかし。また花の木陰に並みいて、あからめもせずまもりて、物くい、酒のみ、ことうたのつけあい、おもしろしなどとひげくいそらし、腹杖をつきたる体、見るもさながら、絶えがたく、また大きな花の枝ころなく折りとりて、地主にいかるるもかたはらいたく、池水に降りて手足さしひたして、見つけられ逃げ回るこそ、無下に口おしけれ」

単に花を見ることを楽しむだけではなく、歌舞音曲や酒食に興じ、ややもすれば枝を折ったり池に飛び込むなどといった度を過ぎた行為があったことが記され、あたかも現代の花見のさまを見るような光景が17世紀末の大坂でも行われていたことが知られる。

また、延宝8年(1680)刊『難波十観』は、大坂の十種の花木の名所を漢詩を添えて書き記した文献である。ここに挙げられているのは、高津宮の梅・稲荷社(博労町)の柳・東御堂の海棠・天王寺の垂桜・宝縁寺(天満東寺町)の牡丹・洞巖寺(洞岩寺:天王寺寺町)の藤・生玉池の蓮・明静院(四天王寺僧坊)の菊・妙寿寺(中寺町)の楓・天満宮の松の十件である。上町台地に所在する寺社(下線部)が過半を占めており、この時点から花木の名所として知られていたことがうかがえる

大坂における「花」をめぐる娯楽が新しい段階を迎えるのは、18世紀後半のことだったようである。『難波丸綱目』の延享版と安永版を比較すると、安永版にはそれまでになかった「浪花名物寄」の内容が追加されている。土地の名産や名所などを列挙した内容であるが、その一項目として「めいぼく(銘木)」があり、各種の花木の名所が書き上げられている。そのうち上町台地関係のものを抜き出すと、以下の事項が挙がっている。

- 糸桜 生玉寺町隆専寺、谷町筋・妙光寺、同・藤次寺
- 梅 玉造石薬師
- 十三間桜 鈴木町裏
- 八間桜 上町
- 桜 天王寺尼寺、同・吉祥寺、西照庵
- 江戸桜 無量寺(八丁目中寺町)
- 彼岸桜 天王寺・洞岸寺、生玉・銀山寺
- 山吹 生玉・隆専寺、清水
- 菊 高津・植木屋吉介
- 藤 谷町・藤の棚、下寺町・大仙坊
- 蓮 生玉弁天、天王寺

史料の性格が異なるので一概に比較はできないが、種類や件数が増加している点などは、延宝年間に比べて花に関する関心が深化・多様化していることを反映しているのではないだろうか。また、『難波丸綱目』の改板に際して、新たにこの内容が加えられたという事実は、この種の情報に対する関心の高まり、それに対応した情報発信というあり方が具体化した姿と考えられる。

19世紀代の史料としては、『撰陽奇観』に引用された「四季遊覧 花のしおり」(文政7年(1824)刊)

がある。この文献には、大坂以外の畿内周辺の花の名所が列挙されているが、大坂関係を抜き出すと次の通りとなる（下線部は上町台地に所在するもの）。

- 梅 天満宮社地・同弁天社・高津社・玉造いなり社・うめ薬師・梅やしき
- 桃 金城辺より東南畑・うぶ湯・真田山・野中観音・小橋
- 糸桜 口縄坂上洞岸寺・生玉寺町隆専寺・同鳥居角道善寺・東門寿法寺・天王寺元三大師・小橋寿光寺・尼寺月光寺・長柄鶴満寺
- 桜 勝曼毘沙門堂・同愛染堂・天王寺山内・一心寺内・安井天神山・生玉社地・尼寺前吉祥寺・新町・桜の宮
- 山吹 産湯・隆専寺
- 卯の花 露天神裏
- 藤の花 北野太融寺・野田村・尼寺月光寺・天満社・浦江聖観音
- 牡丹 高津吉助・北ノ菊清・同西ノ菊清・
- 杜若 浦江・赤川・茨住吉
- さつき 御堂土手・難波村
- 蓮華 北向八幡池・同弁天池・天王寺池・同南大門池・同鏡の池
- 紅葉 東高津宝寿寺・東門寿法寺・同大木・西照庵

『難波丸綱目』の内容と見比べると、前者には上町台地を代表する花である「桃」が挙がっていないことに気づく。「桃」に関しては、『撰陽奇観』の安永年間（1770年代）の記事に、「上本町札の辻を西へ出る土取場へ桃を植る、依之世俗もゞ谷と呼ぶ」とある。これが初源かどうかは判断できないが、上町台地で「桃」が広く見られるようになったのは、安永年間以後のことであったと考えることができるだろう。

また、この記事にはもう一つ興味を引く点がある。それは、土取場に桃を植えた結果、そこが花の名所となったということである。ここでいう「土取場」は、先に見た御用瓦師寺島氏が拝領した南瓦屋町の瓦土取場のことである。瓦の土取場は、材料となる土を掘り尽くした後は、必然的に原料の供給地としての役割を終えることになる。跡地は、埋め立てて宅地となった場合もあるが、上記の記事は植樹によって行楽の地になったということを示している。

これ以外にも、『撰陽奇観』には土取場の跡地利用に関する記事が収録されている。文政8年（1825）には「上町野ばく夕涼初む」があり、翌9年（1826）に「当夏頃より野ばく瓦土取場跡涼馬乗場半弓店其外小見世物出来折々賑敷相成候」とある。「野ばく」は土を取り去った跡の窪地のことで、ここが夕涼みの地となり、見せ物小屋なども出て賑わったという記事である。単に空き地というだけでは、夕涼みの用途には適さない。市街地の近郊にあって、適当な広さの土地が確保できた「野ばく」は、見せ物などの興行地としてよい条件を備えていたのであろう。

江戸時代後半の大坂では、難波新地を中心とした各種興行や寺社の出開帳などが盛んにおこなわれるが、「野ばく」の事例もその流れに沿ったものと言える。

文化元年（1804）には、現在の上本町駅周辺に「梅屋敷」が建設され、梅の花を主軸とした行楽の

拠点となった。これは、江戸の梅屋敷を模して大坂に導入されたものと言われている。また、先の「桃谷」の事例と合わせて、人為的に自然を模した景観が作られることにより、新たな名所が生み出されてゆくことになった。

大坂の花の名所として忘れてはいけないのが「植木屋吉助」である。江戸と京・大坂の風俗を比較した随筆『守貞謾稿』に、「樹木屋 染井村・巢鴨村に多し。各庭を広くし、珍花・異樹を蓄へたり。京坂同業の及ぶ所にあらず。ただ大坂高津の樹木屋吉助のみこれに比ぶか、あるいは及ばざるか。江戸は盛なる者数人」と紹介され、江戸でも知られるほどの最も著名な植木屋であった。その名は、先の『難波丸綱目』では「菊」の項に「植木屋吉助」、『花のしおり』では「牡丹」の項に「高津吉助」として名前が挙がっている。

吉助の植木屋は高津宮の西側を下りた場所にあった。宝永～享保期（18世紀前半）に発行された『摂州大坂図鑑綱目大成』系統の大坂図では、高津宮の西に隣接して「うへ木や」と記載されている。一植木屋がこのように地図に特記されるのは極めて異例なことと言える。

近世大坂の地誌類を見ると、延宝7年（1679）版『懐中難波雀』では植木屋の項目に吉助に該当する記載がないが、元禄9年（1696）版『難波丸』では植木屋の所在地の一つに「高津之下」があり、これが吉助に当たると考えられる。遅くとも元禄年間には、その名を知られる存在であったことが判明する。

寛政年間に刊行された『摂津名所図会』には、近隣にあった「二ツ井」とともに挿絵入りで記載されており、言葉書きには「二井 この井水がよきとてこの辺の用水とす、その東の方、植木屋吉助が前栽にて和漢の名木を多く植たり」とある（図2）。

吉助は菊をはじめとして各種の花木を栽培していたが、とりわけ著名であったのが牡丹であった。『浪花百景』に収録された「吉助牡丹盛り」の絵は、中央に牡丹の花を大きく描いた印象的な構図であり、花の名所であったことが強調されている（図3）。



図2 『摂津名所図会』のうち「二井」、絵の上半部が植木屋吉助



図3 『浪花百景』のうち「吉助牡丹盛り」(大阪歴史博物館蔵)



図4 「大坂風景図」(玉手棠洲筆)のうち植木屋吉助と推定される絵(大阪歴史博物館蔵)

大阪歴史博物館の館蔵品に、「大坂風景図」の表題が付けられた画帖がある。幕末の大坂の絵師であった玉手棠洲の手になるもので、大坂の様々な光景が描かれている。その中に、庭先に植木を並べた棚や小屋状の建物を描いた絵がある。個別の絵には画題が記されていないが、『撰津名所図会』の挿絵と共通点も見られることから、吉助の庭園を描いたものとみられる(図4)。

吉助の植木屋は、園芸の販売を行うとともに、庭園自体を見せる観光地であった。それゆえに各種名所案内などで紹介されたのであろう。人工的に栽培された花木を見せる施設という点では、「梅屋敷」などと共通する存在、あるいはそれらに先行する存在であったのかもしれない。

## 5、おわりに

以上、ごく概略ではあるが見てきたように、江戸時代の上町台地は、信仰・生産・行楽といった、都市生活に必要な役割を担った地区であった。それと同時に、近世を通じて大坂三郷に含まれていない部分も多かったという点も考えておかねばならない。これは、豊臣期の初期の城下町とされる平野町が、やがて城下から切り離され

## II 研究報告

ていったことに象徴されているように、台地上の土地が、必ずしも生活の場としては優位ではなかったことを示しているのではないだろうか。

そうした視点も含めて、近世都市大坂における上町台地のあり方について、今後さらに具体的な検討を進めてゆく必要があるだろう。

### 註

- (1) この点については大澤研一氏による指摘がある（大澤 2013）。
- (2) 寺町の開基年代は（大澤 2013）および、（内田 1985）による。
- (3) 文禄3年の大坂城惣構築城以前の寺町については、もとは惣構堀より北に延びていたとする説があるが（内田 2004）、現状では不明な点が多い。
- (4) 瓦屋町遺跡については、（大阪市文化財協会 2009）を参照のこと。
- (5) （飛田範夫 2012）では、この記事の場所を平野郷の野堂町としているが、上町の野堂町が正しい。
- (6) ここで特に「花」を取り上げたのは、平成25年夏に東京都江戸東京博物館において、特別展「花開く江戸の園芸」が開催されたことを受け、平成26年3月に同館と大阪歴史博物館との間で「園芸」をテーマとした共同研究会を行ったことを背景としている。

### 参考文献

- 内田九州男 1982「大坂三郷の成立」『大阪の歴史』7号 大阪市史編纂所
- 内田九州男 1985「城下町大坂」『日本名城集成 大坂城』小学館
- 内田九州男 1989「豊臣秀吉の大坂建設」『よみがえる中世』2 本願寺から天下一へ 大坂 平凡社
- 内田九州男 2004「秀吉の遷都構想と都市建設」『歴史科学』176号 大阪歴史科学協議会
- 大阪市文化財協会 2009『瓦屋町遺跡発掘調査報告』
- 大澤研一 2013「豊臣期大坂城下町の寺町再考—城南寺町を中心に—」報告資料（なにわ歴博講座）
- 飛田範夫 2013『大坂の庭園』 京都大学学術出版会
- 平凡社地方資料センター編 1986『大阪府の地名』1 平凡社
- 脇田修 1994「産業都市大坂」『近世大坂の経済と文化』 人文書院





# 讃岐高松藩大坂蔵屋敷の変遷と構造

松本百合子

## 要旨

大坂に置かれた各藩蔵屋敷は、江戸時代の経済活動を支える重要な機関であった。本稿では北区中之島に所在した讃岐高松藩大坂蔵屋敷について、その変遷と構造をさぐる。高松藩大坂蔵屋敷は島内でも最大規模を誇るが、具体的な構造を示す絵図等が現存せず内部構造は不明であった。しかし、近年の発掘調査により、17世紀から19世紀にかけての様相が明らかになってきている。大坂の町絵図とあわせ考察する。

## 1、はじめに

江戸時代、「天下の台所」とうたわれた大坂には各藩の蔵屋敷が置かれた。その始まりは豊臣秀吉の大坂城築城により城下に大名屋敷が集められ、各藩の米や特産品が集散したこととされる。のちに大川や堀川が整備され、より水運に便利な堂島川、土佐堀川、江戸川沿岸に蔵屋敷が建設された。その数は明暦年間（1655～58）に25、元禄年間（1688～1704）に95、天保6年（1835）に111、明治元年（1868）には135藩に達している。特に中之島の堂島川沿いには、徳島藩・久留米藩・広島藩など、20万～50万石大名の蔵屋敷が軒を連ね、堂島川に開いた船入で国元との物資輸送を行っていた。

## 2、絵図に見る高松藩蔵屋敷

江戸時代の絵図や明治時代の地図から、17世紀前葉から19世紀後葉にかけて大坂蔵屋敷の変遷を知ることができる（玉置豊次郎 1980）。

中之島に高松藩の記載が最初に現れるのは、明暦元年（1655）『大坂三郷町絵図』である（豆谷浩之 2001）。2年後に出版された『新板大坂之図』（図1-①）の堂島川沿いにも「松平右京」と見える。松平右京とは生駒騒動後の寛永19年（1642）に入封した初代高松藩主松平頼重であることから、17世紀中葉には高松藩の屋敷地が存在していたことがわかる。周辺には「松平安藝」「細川越中」などが見え、すでに中之島全域に大名の屋敷地が区画されていた。元禄元年（1688）『辰歳増補大坂図』（図1-②）では、「松平讃岐」の屋敷地が南側の道を挟んで土佐堀川側にも現れる。元文4年（1739）の「穆公遺訓諸役書記」（註1）によると、「中之島には表裏に並んで上屋敷と蔵屋敷があり、蔵屋敷には米蔵と蔵役人たちが居住する長屋がある」とある（香川県 1987・1989）。つまり中之島には高松藩所有の屋敷地が2箇所存在し、それぞれ御殿と蔵屋敷という別の機能を備えていた。土佐堀川側の屋敷地は堂島川側のそれと比べて面積は狭いが、幕末まで移動・消滅することなく維持されている。

享保末（1730ごろ）の『撰津大坂図鑑綱目大成』（図1-③）では、松平中将（3代藩主松平頼豊）所有の「ニ」の敷地が島内の蔵屋敷のうち最大となり、現在の地割から約24,000㎡を占めていたと推定できる。また、東辺の町屋は依然として存在するが、『辰歳増補大坂図』にある西辺の町屋は蔵屋敷に取り込まれている。中之島全体では、それまで土佐堀川沿いと島内中央部にしかなかった道路

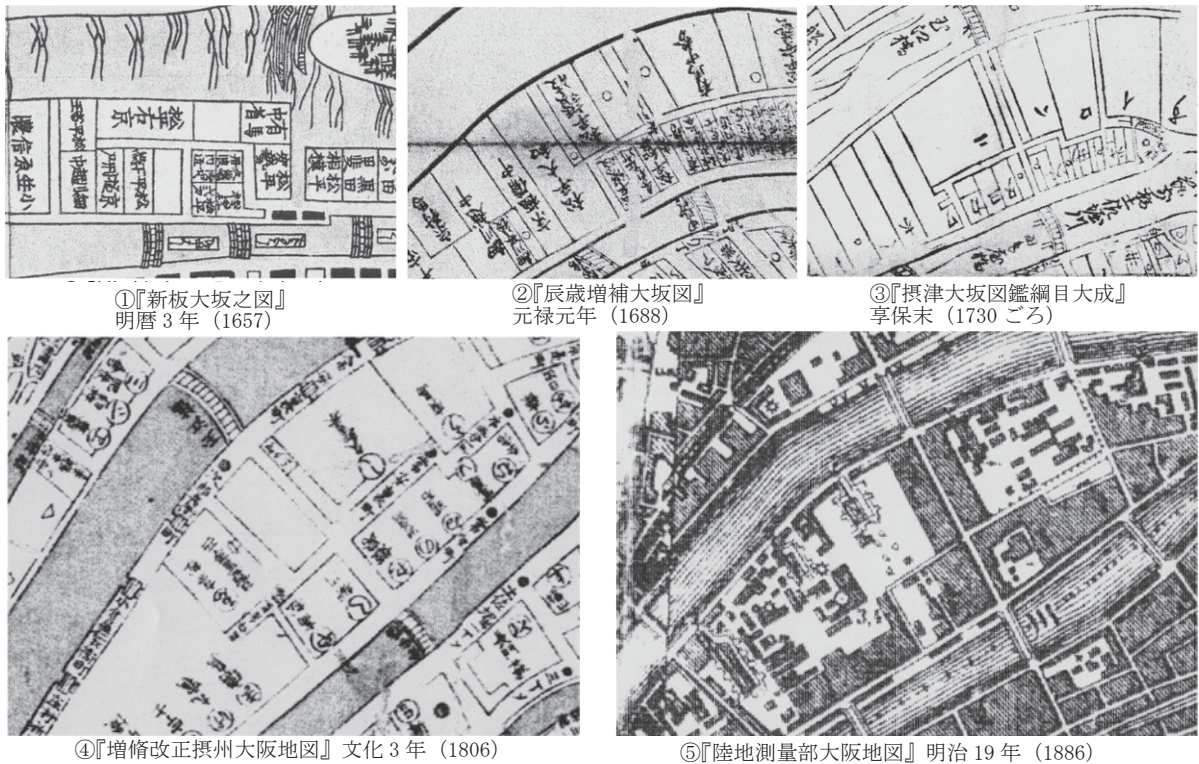


図1 高松藩大坂蔵屋敷の変遷

が堂島川沿いにも敷かれ、いっそう島内の整備が進んだことがわかる。

文化3年(1806)『増脩改正摂州大阪地図』(図1-④)には、堂島川側の屋敷地中央に南北方向の道路が現れ、敷地が東西に分割されている。船入橋や鳥居形も明確に描かれ、「金毘羅社」の文字も見える。蔵屋敷には広島藩の安芸社や松江藩の出雲大社など、地元の祭神が勧請され、祭礼日には一般の参詣が許された。ことに海神を祀る高松藩蔵屋敷の金刀比羅社は大坂商人の信仰を集め、文化11年(1814)の「繁花風土記」によると、1月10日の初金毘羅には「先つあらかじめハ中之島高松屋敷」へ参拝したという(植松清志・谷直樹 2004)。

明治19年(1886)の『陸地測量部大阪地図』(図1-⑤)には初めて船入が表現されるが、建物は船入南側に1棟あるのみで、蔵屋敷はほぼ撤去されている。明治4年(1871)の廃藩置県に伴い、役目を終えた蔵屋敷は次々と取り壊され、官有地として接収された。高松藩蔵屋敷も明治21年(1888)には陸軍省用地となり、やがて船入も埋戻されて蔵屋敷の面影は完全に失われてしまう。

### 3、遺構の変遷

高松藩大坂蔵屋敷は設立当初の記録や屋敷地内の建物配置図が現存せず、蔵屋敷の構成や機能を知る手がかりが希薄であったが、近年の発掘調査により内部の様子が少しずつ明らかになってきた。

平成14年(2002)の調査では、堂島川側の敷地から船入北西部分の石垣が検出された。近代以降の破壊が著しいが、『陸地測量大阪地図』にある船入の位置を確認している(大阪文化財研究所 2012)。

平成22年(2010)の調査も堂島川側の敷地で行われ、17世紀から19世紀中葉にかけての遺構が確認された(大阪文化財研究所 2012)。最も古い遺構は17世紀前葉以前の耕作遺構と掘立柱建物で、

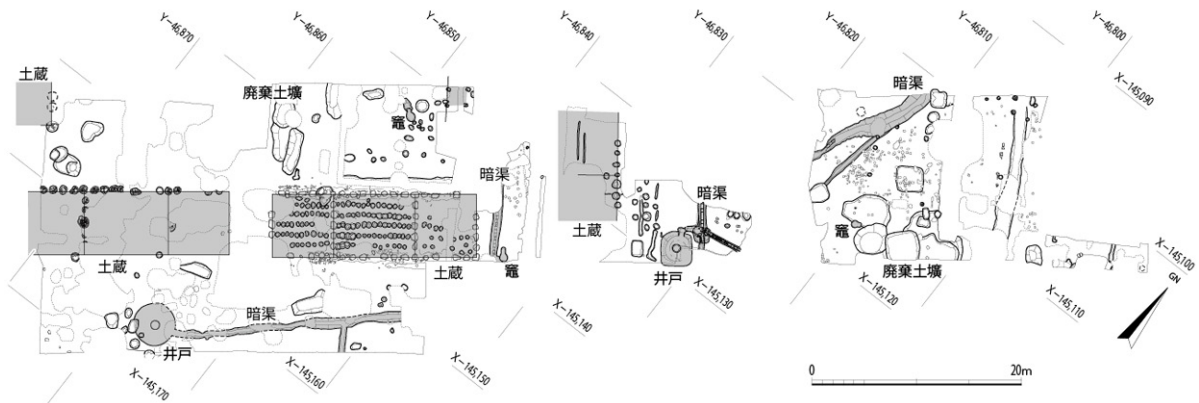


図2 18世紀前葉の高松藩大坂蔵屋敷（大阪文化財研究所2012に加筆）

蔵屋敷成立以前のものである。遺構面をともなう地層は厚い河成堆積層であり、大川の中洲として形成された中之島が陸地として安定してゆく過程を物語る。

蔵屋敷の遺構として確認できたのは、4棟の土蔵や暗渠・井戸・竈などである（図2）。土蔵は船入の南側、つまり屋敷地の西南部にコ字形に整然と配置され、周囲に土管や石樋を使った暗渠を埋設する。暗渠は井戸から北側の堂島川に向かっていている。廃棄土壌に17世紀後葉から18世紀中葉の遺物が含まれることから、これらの遺構は18世紀中葉までに成立していたと考えられる。

特筆されるのは土蔵の構造である。礎石建ちで3間×10間、内部は3室に仕切られる。礎石は大型の花崗岩を用い、礎石下に栗石を詰めた布掘り地業を行う。両妻側と間仕切りの中央、すなわち棟通りにあたる礎石にはさらに深い据え付け穴を掘り、大量の栗石を詰める。床下にも小型の礎石を密に配し、大引あるいは束柱を支えていたことがわかる。18世紀中葉以降の土蔵は割石を壁沿いに長方形に並べた基礎を用いるのに対し、柱ごとに礎石を配するのは古相であり、このことから土蔵の築造年代は18世紀前葉に遡ると考えられる。このころ蔵屋敷の活動が最盛期を迎えたとするならば、『摂津大坂図鑑綱目大成』や『改正懐宝大阪図』が描かれたころにあたり、蔵屋敷の面積が最大になることとも合致する。

18世紀末から19世紀初頭になると石組みを漆喰で固めた庭園遺構が見つかっており、屋敷地の北東部に庭園をともなう建物の存在が想定される。19世紀前葉以降の遺構は近代以降の攪乱により著しく破壊され、長屋状の礎石建物を検出したほかは土壌や暗渠の一部が認められるのみである。

#### 4、まとめ

以上、絵図と発掘調査から高松藩大坂蔵屋敷の変遷をたどった。絵図上の初出は17世紀中葉であるが、その盛期は遺構から18世紀前葉から後葉に迎えていた。また、堂島川側の屋敷地で船入や土蔵が確認されたことにより、これまで土佐堀川側の屋敷地が蔵屋敷であると推定されていたことが（香川県1989）、堂島川側の屋敷地が蔵屋敷で、土佐堀川側の屋敷地が上屋敷であることが明らかになった（図3）。ただし、「穆公遺訓諸役書記」には元文4年に「最近蔵屋敷のほうにも新御殿が建てられ、藩主が帰城の際に休息している」とあることから、18世紀前葉には堂島川側の蔵屋敷にも御殿が建てられ、上屋敷の機能も備えていたようである。

高松藩は寛永19年（1642）の松平頼重入府以来、12万石の石高を有していたが、実際の財政は早

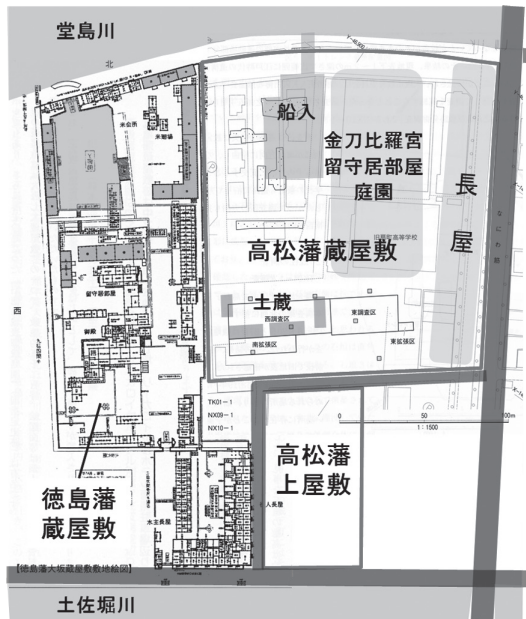


図3 高松藩大坂藏屋敷とその周辺

魃などで逼迫していた。そこで5代藩主松平頼恭は高価な輸入品であった砂糖に着目し、宝暦年間（1751～1764）に領内で白砂糖製造を試みる。19世紀に製糖は軌道に乗り、白砂糖は「讃岐三白」のひとつとして大坂藏屋敷に運ばれ、藩の貴重な財源になった。ただし白砂糖の専売で藩財政が潤ったのは19世紀以降であり、遺構から見る藏屋敷の盛期とは合致しない。最も藩財政が潤った19世紀にこそ藏屋敷が充実すべきと考えられるが、残念ながらこれまでの調査では19世紀以降の遺構は近代に破壊され詳細はわからない。

高松藩藏屋敷の敷地は24,000㎡と広大である。調査面積はそのうち約1割の2,500㎡にすぎない。調査

区外に主要建物が分布すると予想されることから将来の調査に期待したい。

註

(1) 「穆公遺訓諸役書記」(香川県 1987)

大坂中之嶋 上屋敷

御藏屋敷

右之通ニヶ所裏表並御座候、上御屋敷=御屋形御座候而御参勤御帰城之節被為入候、御藏屋敷=も御米藏御長屋在之、役人共住居仕候、近年御藏屋敷=も軽キ御屋形出来、只今新御殿と唱申候、御参勤御帰城之節御

引用・参考文献

植村清志・谷直樹 2004 「大阪藏屋敷の年中行事と藏屋敷祭礼について—島原藩・佐賀藩を中心に」 『生活科学雑誌』 Vol. 3

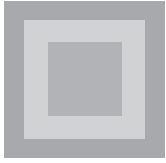
大阪文化財研究所 2012 『中之島藏屋敷跡発掘調査報告 北区中之島五丁目（もと扇町高等学校）における高松藩藏屋敷跡発掘調査報告書』

香川県 1987 「高松藩」 『香川県史』 9 近世資料 1 四国新聞社 pp. 198-212

1989 『香川県史』 3 通史編 近世 I 四国新聞社

玉置豊次郎 1980 『大阪建築史夜話 附・大阪古地図集成解説』 大阪都市協会

豆谷浩之 2001 「藏屋敷の配置と移転に関する基礎的考察」 大阪市文化財協会編 『大阪市文化財協会研究紀要』 第4号 pp. 239-257



# 元禄期大坂の産業マップ

杉本厚典

## 要旨

『難波丸』からいくつかの職・商業について抜き出して、分布を検討した。これまでに指摘されている同業者のまとまりを再確認できたほか、紙については素材・加工・消費・リサイクルといった動きを補足することで、有機的に連関している状況を分布図で示すことができた。また、造船や刀製作に携わる職人・商人が近接して居住しており、同業者のまとまり以外にも、産業的なまとまりによって集住していた可能性があることを示した。また長崎糸割符、長崎問屋といった貿易商や両替商が密に分布する「金融・貿易」センターも抽出することができた。

## 1、はじめに

江戸時代の大坂の産業分布について、(宮本又次 1958)、(小林茂・脇田修 1973)、(今井修平 1989)の諸研究がある。また(原田伴彦・矢守一彦・矢内昭 1980)は歴史地理学の視点から大坂の各町や筋・通ごとに産業的な特徴を述べている。さらに諸商品のうち白粉については(池田浩司 2001)が分布の特徴を指摘している。

正司考祺は『経済問答秘録』の中で、大坂の職人・商人が「同職就居」しており、その事例として書籍：心齋橋筋、菓種：道修町、金物：薬罐町、陶器：横堀、細工物：御堂筋などを挙げている。これを承けて宮本又次氏は「大阪の商業の特色は同業者が同一地区に集団的に店舗をはっていたことである」とし、同業者とその場所の関係について具体的に次のような対応関係を示した。

陶器屋：西横堀、諸鳥問屋：備後町一丁目、呉服問屋：本町一丁目より四丁目まで・備後町一丁目、菓種問屋：道修町二丁目、舶来物：伏見町四・五丁目、砂糖問屋：堺筋、油問屋：上町・本町橋橋詰町、荒物染草問屋：江戸堀一丁目、鉄問屋：備後町・瓦町・立売堀・薩摩堀、松前問屋：堀江・幸町、土佐問屋・薩摩問屋：堀江、材木問屋：立売堀・西長堀、砥石硯問屋：東横堀、塗物問屋：久太郎町四丁目・五丁目・久宝寺町四丁目・五丁目、木綿太物問屋：安土町・備後町・南本町一丁目より二丁目まで・本町二丁目より北久太郎町三丁目まで(宮本又次 1958、pp. 86-87)。

さらに場所ごとに見られる産業のまとまりや店の特色として下のように述べる。

御堂筋：下駄・鼻緒屋・雪駄屋・仏具店・人形商、久宝寺町：袋物問屋・小間物問屋、井池筋：道具商、菅原町：乾物商、松屋町：菓子問屋、唐物町：竹細工・革物商、西道頓堀・幸町・南堀江：薪炭商、永代浜東側：干魚、永代浜西側・海部堀北側：干物問屋、南堀江通・島の内八幡筋：道具屋・仏壇商、御祓筋：新古道具商、阿波堀上通：建具商、問屋町・瓦屋町：屑物屋(宮本又次 1952『大阪商人』p. 87)。

これらの産業分布の特徴を踏まえたうえで、小林茂・脇田修両氏は大坂船場地域の地図上に各店の所在地を記入し、各筋・通の商業的な特徴を示しただけでなく、視覚的に大坂の賑わいを映し出すことを可能にした(小林茂・脇田修 1993)。

## II 研究報告

さらに今井修平氏は（小林茂・脇田修 1973）の作図をもとにして、より詳細な内容の産業マップの作成を行っている（今井修平 1989）。最近では池田浩司が延宝 7 年（1679）6 月刊『難波鶴』から慶応 3 年（1867）10 月刊『増補浪花買物案内』をもとに、「白粉屋は概ね大阪の中心地長堀以北の船場に集中している」と指摘しており（池田浩司 2001）、産業別に分布を検討することで新たな研究の可能性を見出すことができると思われる。

時代によって産業の盛衰があり、その分布も変化するが、ここでは元禄 9 年発行の『難波丸』をもとに、16 世紀末の大坂の産業分布について検討する。既に船場地域の詳細な検討は（小林茂・脇田修 1973）で行われているため、本稿では西船場・上町を含めた地域を検討対象とした。産業マップ作成のため最初に『難波丸』（塩村耕 1999）をデータベースに入力し、職・名称・住所にまとめた。このデータベースをもとにして、記載された住所と地図上の位置とを照合した。この作業のために GIS ソフトを使用した。

江戸時代の地名は明治 45 年（昭和 2 年再版発行）『大阪市史附圖』第五圖大阪圖（天保十四年）（以下、「天保 14 年図」と称する）をもとに、現代の地図と対照を行った。ここで使用した現代の地図とは、「電子国土基本図（地名情報）住居表示住所」（以下、「住居表示図」と称する）であり、「天保 14 年図」の地名に対応する地点を「住居表示図」に示されているドットを選択して、各「丁」の代表点を定めた。「住居表示図」のドットは緯度経度情報が付されているため、この作業によって、「丁」の位置が緯度経度をもった座標データとなる。道路の拡幅工事や御堂筋の建設、堀川の埋め立てなどのため、現代の地図と江戸時代の絵図とを完全に対応させることは難しいため、明治 19 年の地図なども使用して、江戸時代の絵図に示された「丁」「橋」「橋詰」などの把握に努めた。この作業を行うことで、江戸時代の地名が現代の地図上にマッピング可能となった（註 1）。

このように江戸時代の地名を現代の地図上にマッピングしたうえで、「天保 14 年図」を重ねた。本稿では元禄時代の地名を扱うが、図 1～9 のベースとなっているのは「天保 14 年図」である（註 2）。

### 2、数量について

表に示したような諸職が認められた。産業区分は今井修平の作成した「表 125 延宝 7（1679）年諸商人諸職人売物所付」（今井修平 1989、pp. 803-807）の分類項目に準じて整理している。『難波丸』では 803 種の職・商業を確認することができる。

各職・商業の中で多いものは何か。難波丸の中には具体的な人数を記さず、「この場所周辺に多い」といった記述が認められ、これらの職・商業については人数が不明である。ここでは具体的な人数が掲載されている職・商業を対象として、その人数・軒数を確認すると、江戸廻シ酒屋並数付が 2,218 軒と最多であり、古手屋中買 1,371 人、大鋸木挽 1,317 人、端傾城 1,017 人、古鉄屋 1,010 人と続く。古着や布を扱う古手屋仲買や建築資材に不可欠な板を切り出す大鋸木挽が多いことは当然といえるが、江戸に廻漕する酒を扱う商人が多い点が大きな特徴として挙げられる。伏見や灘などの酒の産地が近郷に多くあり、水運を通して酒の集散地となっており、後の樽廻船出現との関連を示唆する（註 3）。

### 3、紙・木材を扱う産業



## II 研究報告

大坂の商業の特性として、遠国問屋が多いことが指摘されている（宮本又次 1972）。主に西国諸藩が特産物を現金化するために大坂に物資を運び込み、その拠点として大坂には蔵屋敷が設けられた。

これらの蔵屋敷を通して販売された紙、鉄、材木などの中で、蔵元・掛屋などの記述がなされている紙について最初に検討した（図1～3）。紙の産地は阿波、石見などがあり、各産地から蔵屋敷に運び込まれ、蔵元の差配の下に仲買人に販売される。仲買人は紙屋、表紙屋、帳屋といった小売商や、紙を材料として手工業品を生産する諸職人に紙を販売する。紙からなる商品には、紙羽かっぱ、唐笠、上扇、扇、うちわ、あんどろ、挑灯、表具、屏風などがある。

難波丸に記された紙を蔵物とする藩と蔵屋敷の場所は次の通りである。

長門萩 松平大膳太夫殿 蔵屋敷 土佐堀一丁目  
周防岩国 吉川内蔵介殿 蔵屋敷 中之嶋常安町  
周防徳山 毛利飛驒守殿 蔵屋敷 いたち堀高ばし一丁東  
石見浜田 松平周防守殿 蔵屋敷 江戸堀四丁目  
石見津和野 亀井隠岐守殿 石見津和野 蔵屋敷 江戸堀四丁目  
筑前柳川 立花飛驒守殿 蔵屋敷 中之嶋常安町  
備後三好 浅野因幡守殿 蔵屋敷 江戸堀四丁目  
安芸広嶋 松平安芸守殿 蔵屋敷 中之嶋常安町

このほかに、萩藩は大川町に紙蔵会所を設けていたことが記される。これらの蔵屋敷・紙蔵会所とも堀川沿いに立地する。各藩で取り扱いの紙に区別があり、長門萩藩は山代半紙、徳地半紙、鹿野半紙、周防岩国藩は岩国半紙、同片折、同黒方、同小半紙、周防徳山藩は須万半紙、五ヶ村半紙、石見浜田藩は浜田半紙、石見津和野藩は吉賀半紙、筑前柳川藩は柳川半紙、備後三好藩は三好杉原と同奉書、安芸広嶋藩は広嶋半紙、同杉原、諸口紙などであった。

これらの藩の特産品は各藩の蔵元によって販売され、蔵物を売った金を預けるための銀掛屋も存在した。紙に関して『難波丸』に記された各藩の蔵元は次の通りである。

長門萩：さかいや清左衛門（伏見ごふく町）、大和屋三郎左衛門（上中ノ嶋）、松阪屋七郎兵衛（玉水町）  
周防岩国：しほや新兵衛（常安町）  
周防徳山：しほや九兵衛（大川町）  
石見浜田：さつまや市左衛門（江ノ小嶋）（代銀掛や 平の町一丁メ かがや弥右衛門）  
石見津和野：金や九郎右衛門（江戸堀五丁メ）  
筑前柳川：吉左衛門（なべ屋）  
備後三好：さかいや庄左衛門（尼崎町二丁メ）  
安芸広嶋：かみや吉右衛門（今橋一丁目）、天王寺や四郎左衛門（土佐堀）

図1をもとにして蔵屋敷と蔵元の間を概観する。萩藩は紙蔵会所が大川町にあり、対岸の上中ノ嶋、南西の伏見呉服町、西の玉水町に蔵元が住んでいた。また玉水町の南側には紙仲買の船町組の商人が集住しており紙流通の一大拠点となっていたことがうかがえる。

周防岩国藩、石見津和野藩はいずれも蔵屋敷の付近に蔵元が住む。周防徳山、石見浜田、備後三好、



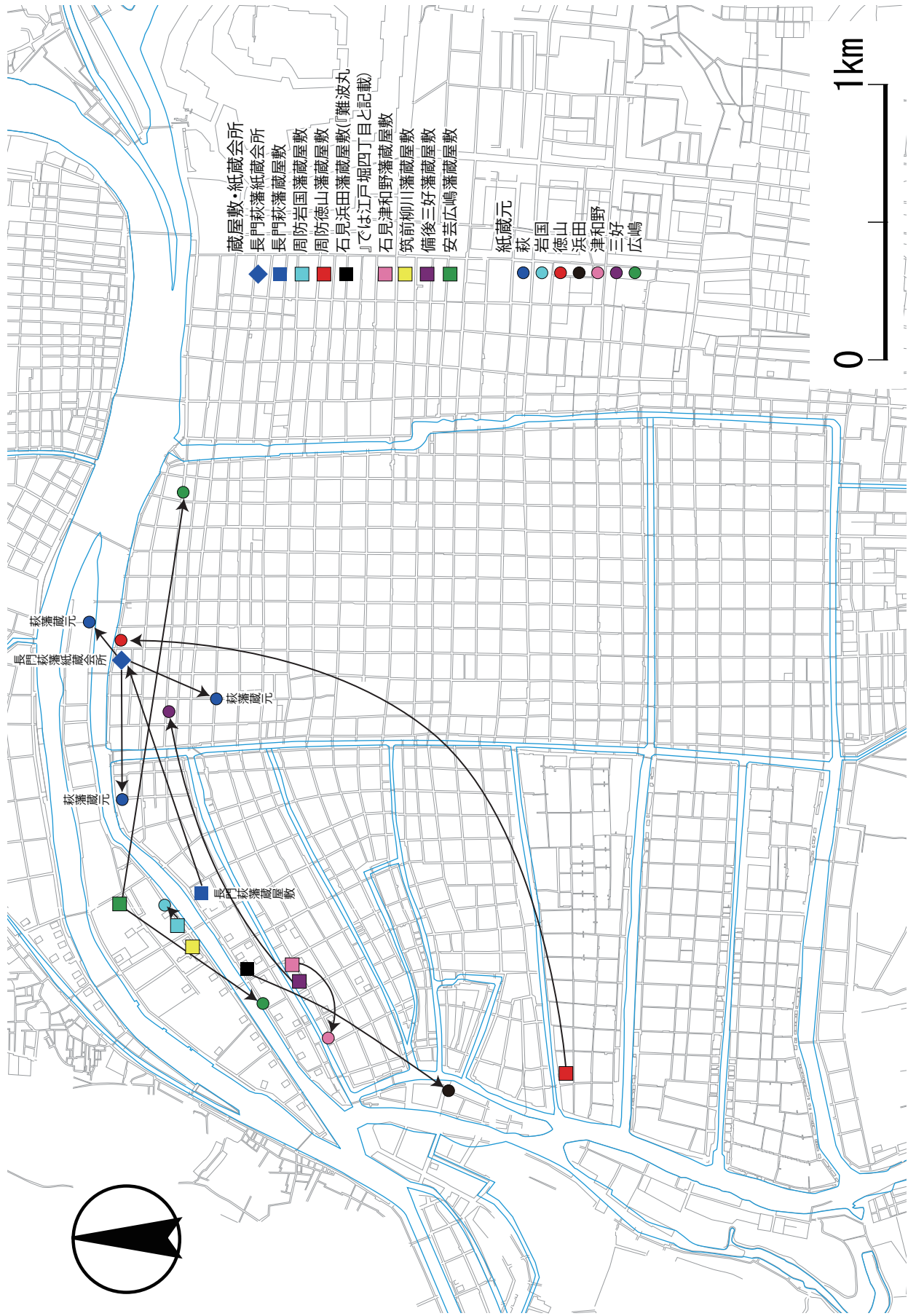


図1 紙を扱う藩の蔵屋敷と紙蔵元

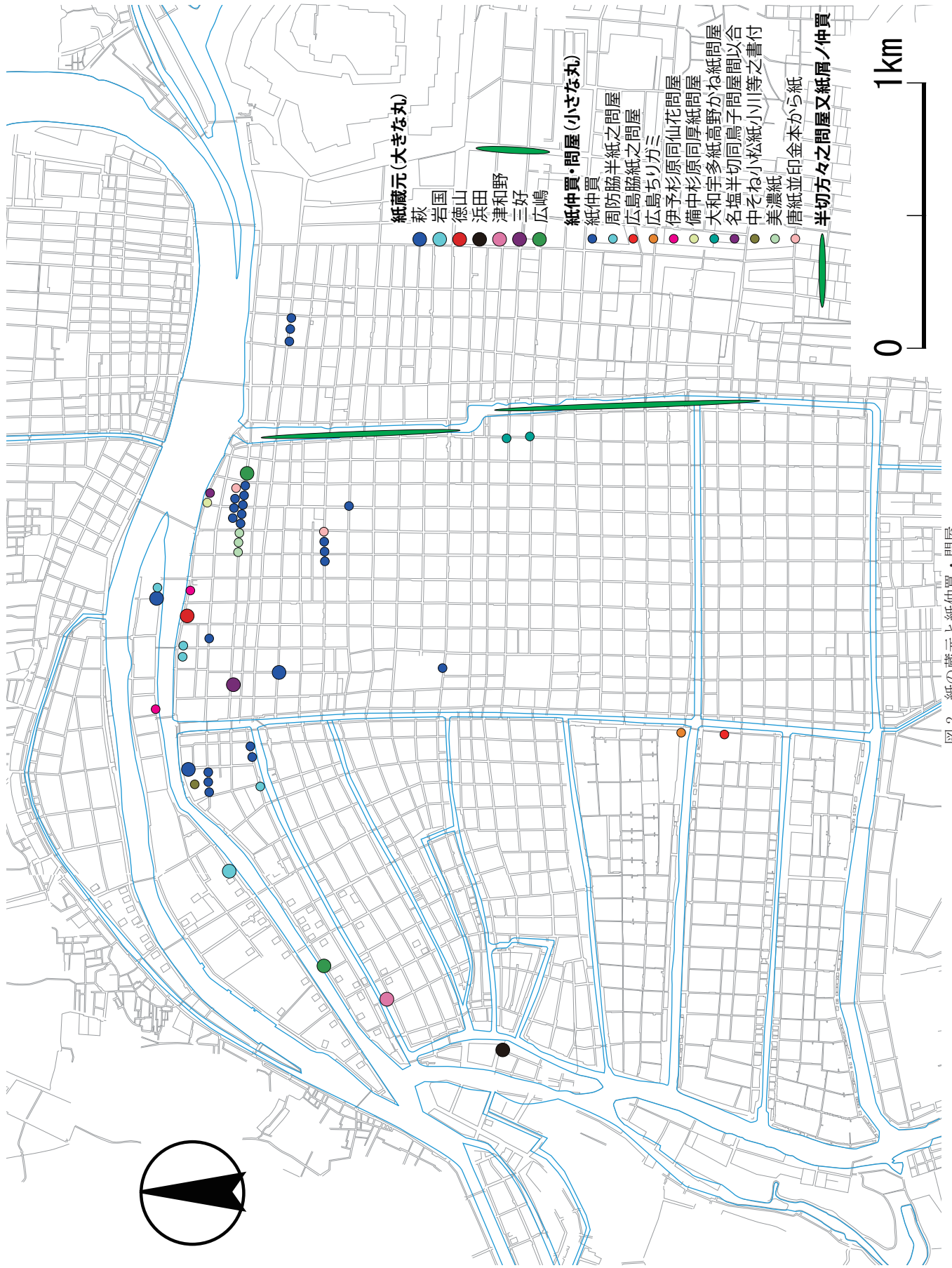


図2 紙の蔵元と紙仲買・問屋

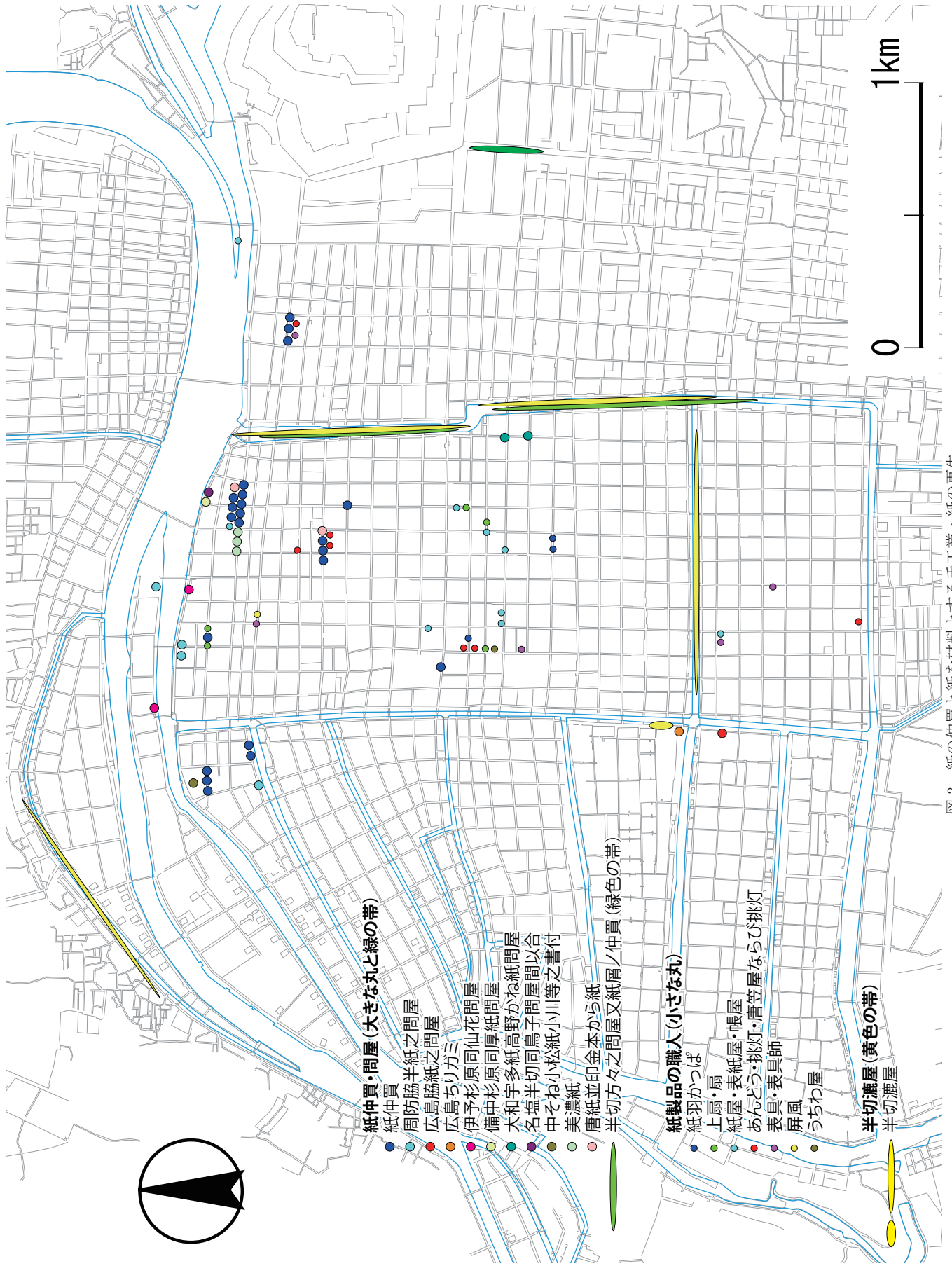


図3 紙の仲買と紙を材料とする手工業・紙の再生

## II 研究報告

安芸広嶋の各藩は蔵屋敷と蔵元が離れており、石見浜田藩を除いて、基本的に海側の蔵屋敷から市中の蔵元へといたった線が描かれる。

次に蔵元と仲買の関係について触れておきたい。安芸広嶋藩の紙の蔵元である今橋一丁目のかみや吉右衛門は、紙の仲買である「今橋組」にもその名が記されており、美濃紙を扱う商人でもあった。周防徳山藩の蔵元、しほや九兵衛は萩藩の紙蔵会所のある大川町に住んでおり、さらに「周防脇半紙」の間屋も兼ねていた。徳山藩は紙の仲買が集中する北船場から離れた場所に蔵屋敷が設けられており、紙の市況を知るためには好都合な場所とは言えないが、大川町に住むしほや九兵衛に蔵元業務を委託することでその不利を補っていたのであろう。この二例は紙問屋が蔵元を兼ねており、住所が仲買の多い土佐堀川付近であることで共通する。一方、石見浜田の蔵元、さつまや市左衛門は「石見又佐渡問屋」で、江之子島に住む。さつまや市左衛門は遠国問屋であり、石見・佐渡方面からの様々な産物を荷受し、商品ごとに仲買に取り次いだと考えられ、必ずしも紙のみを扱っていたわけではない。以上のように、蔵元を紙問屋が行う事例と遠国問屋が行う事例とがあることがうかがえ、前者の分布は紙問屋や仲買の多い北船場から土佐堀川付近に集中することがうかがえる。

「紙之中買」は今橋組、船町組のように場所ごとにまとまっているものがある一方で、周防脇半紙之間屋、広嶋脇紙之間屋、伊予杉原同仙花問屋、備中杉原同厚紙問屋、大和宇多紙高野かね紙問屋、名塩半切同鳥子問屋間似合等の産地別の諸問屋は市中に散在していた。

さらに紙は再生資源としても用いられ、「半切方々之間屋又紙屑ノ中がい」がいた他に、各堀川に半切瀆屋之有所があり、両者の分布は一致する。これらの分布の重なりから古紙回収と紙の再生が連携して行われたことがうかがえる。

以上をまとめると、紙は大坂の堀川に面した蔵屋敷に到着し、北船場に中心をもつ仲買がこれを仕入れた後、北・南船場の各職人によって商品となり消費される。さらに市中に拡がる紙屑集めによって古紙が回収され仲買が買い付けて再利用されたほか、船場を囲む堀川では紙瀆が行われて再生紙が作られていた。このように紙は堀川から船場へ、船場から堀川へ、堀川から再び船場へといたった往還が明確な品といえる。

紙の蔵屋敷と問屋・仲買は土佐堀川沿いに展開していたが、紙・鉄と並んで西国諸藩の特産品の一つである材木は土佐堀川ではなく、その南の江戸堀、京町堀、阿波座堀、立売堀などに産地別にまとまって分布し、その周辺に仲買・材木屋が集まっていた（図4）。材木から建材である板が挽き出されるが、これらの大鋸挽板職人は、船場のほぼ中央に位置する安土町三丁目に住む吉田与作、五郎兵衛、上町の南新町に住む弥兵衛などの大鋸木挽頭を中心にして、広く市中に散在していたのであろう。材木が堀川から市中へ運ばれ、比較的消費地に近い場所で板に挽かれたものとみられる。

紙や材木は、遠隔地から堀川沿いの蔵屋敷・問屋にもたらされた後、三郷の各場所へ運ばれて加工・販売・消費されていることからうかがえるように、堀川から市中へといたった物流が明確な産業といえる。また荷請問屋や蔵屋敷の分布から、土佐堀川沿いが紙、土佐堀川より南の江戸堀・京町堀・阿波座堀・立売堀を拠点とする材木というように、産物によって大坂における荷揚げ地が異なっていたことも指摘できる。

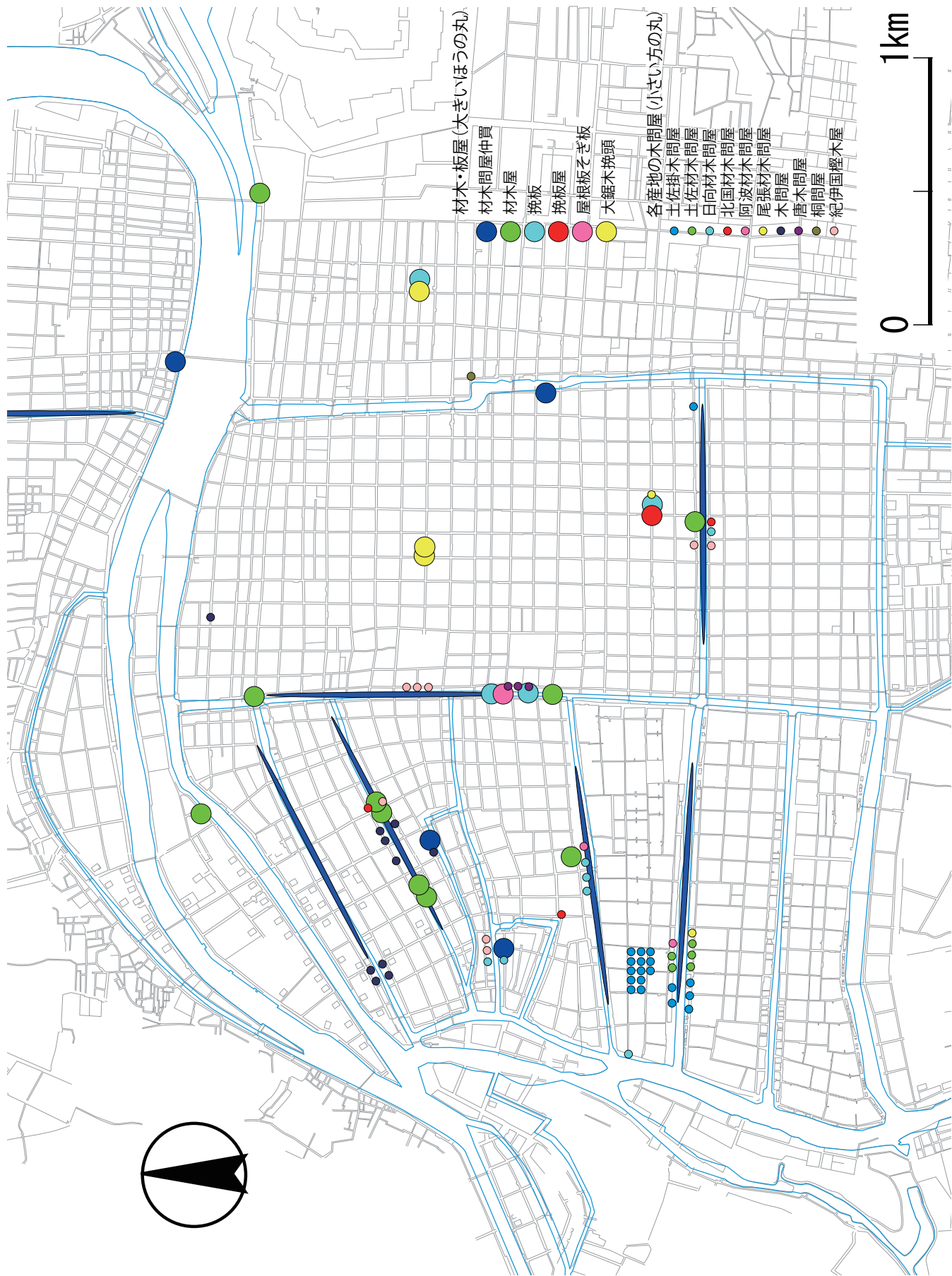


図4 木問屋・材木・挽板

#### 4、専門職人の協業を必要とする産業

専門性の高い職人が協業することによって、委託者の注文や要請を満たす物づくりの代表として、重厚長大産業の船（図5）、工芸品的な刀（図6）について検討しておきたい。

船は川と海とで船種と大きさ、構造が異なってくる。川舟は剣先船、茶船、三十石船でなどがあり、三十石船は帆も備えるが、一般的に川舟は帆を持たず櫂や櫓で漕ぐものが多い。海で使用する弁才船は帆船であることが多く、船体構造は航の上に根棚、中棚、上棚を構築する三層構造であり、元禄期は百から五百石前後、幕末になると最大千五百石の積載量となる。また風を受ける帆は、網代帆から木綿帆へと変化し、木綿帆についても布をあわせて指し縫いするものから、織機をもちいて一枚の厚い帆布を織り出す松エ門帆が幕末には主流になる。これら以外にも、川御座船、海御座船といった大名や朝鮮通信使の用いた船がある。

元禄期の造船は江之子島に船大工、天満舟大工町と堂島船大工町に川船大工がいたことが『難波丸』に記されている。大工以外にも、碇、船釘、船針、セミ、指帆、櫓楫・楫仲買といった船に関する部品の製造や仲買、船板屋・船板問屋などの船料を扱っている店、船を解体し材木や釘をリサイクルする船解などを『難波丸』に見出すことができる。

碇は鉄製の四爪碇がこの時期には用いられており、千石船には舳に5個を取り付ける。セミは帆柱の頂点に取り付けられた帆を揚げるための滑車である。船釘は特殊な縫釘が用いられる。縫釘は縦断面が緩やかに彎曲し、横断面が板状の長方形を呈する鉄釘である。この船釘屋では銚も製造された可能性がある。帆は工楽松エ門が織機で一枚の木綿の帆布を織る技術を開発する前の段階の指帆であり、木綿布を重ねて強度を保つ形式の帆である。船板は水に強い松材が航に用いられ、棚の部分には杉、装飾性の高い部分には櫟を用いた。弁才船の櫓は巨大なもので、櫓材を合わせて部材とし、鉄製のタガで固定する。船に使用された木材や縫い釘・銚などの鉄製品は再利用されており、福島区の西本願寺蔵屋敷跡では船材が建物基礎として用いられていたことが発掘調査から明らかにされている（大阪文化財研究所2011）。

『難波丸』から以上の船関係の職・商業について抜き出したものが次のものである。

舟板問屋	ふしミ堀 さいかや八郎右衛門
京町堀 びぜんや吉兵衛	ふしミ堀 ふく嶋や九兵衛
いたち堀 びぜんや九右衛門	同所 ふく嶋や太郎兵衛
いたち堀 中嶋や四郎左衛門	同所 ふく嶋や長兵衛
あハ座堀 わかさや佐兵衛	江戸ぼり 兵ごや善兵衛
上同丁 大津や勘兵衛	いたちぼり なすや善五郎
長ほり けまや七兵衛	同所 いづみや兵左衛門
同丁 あハぢや吉左衛門	江ノ小嶋 はりまや九兵衛
上ばくろう かしはや与市郎	百間丁 ひごや九郎兵衛
舟板屋	揖めうし櫓かい櫓本類
あハざ堀 さかいや六右衛門 (右上へ)	阿ハざ堀 大津や勘兵衛



図5 造船関連の諸職業

## II 研究報告

いたち堀 中嶋や四郎左衛門	舟ノかいやろ
同町上 丸や長兵衛	かいや町
上ばくらう 柏や与市郎	同ざこば 右ニも註ス
上ばくらう しわくや九兵衛	川舟大工
下ばくらう けまや七兵衛	堂嶋
ざこば 中嶋や五郎兵衛	同江ノ小嶋
同町 のだや惣右衛門	釘や
江ノ小嶋 さつまや善兵衛	舟釘あはざ堀中の
百間堀 ぶんごや長右衛門	
道頓堀 あたらしや作兵衛	舟板
梶中買	伏ミ堀
京町堀 ふく嶋や六兵衛	同江ノ小嶋
同町 升や二郎兵衛	とき舟
いたち堀 小くらや権右衛門	あはざ堀
江ノ小嶋 いたミや長左衛門	舟大工
同所 あこや久右衛門	江ノ小嶋
舟大工 川ぶね	同堂嶋
江之小嶋	天満大工町
同堂嶋	舟針
天満大工町 此所二有	かごや町ノ西
舟いかり屋	舟ノセミ
新玉作り	阿はざ堀二丁目南側
舟ろかいや	指帆 ふねノもめん外
かいや町	同所 嶋や太郎兵衛
同ざこば	磁石針
解舟屋 (ときふねや)	あはざ豊嶋町
あはざ堀二有 (右上へ)	同長町東がわ

以上に列挙した船に関する商工業者の位置を地図上に落としたものが図5である。江之子島と阿波座堀を中心にして船関係の材料を販売する店や問屋が密集していることがうかがえる。また指帆は東横堀に位置するが、木綿の問屋が京橋、天満に集中することと関連すると見られる。櫓梶が「靱」に数多く認められる。「靱」は魚市場の場所であり、日常的に舟の交通量が多いところであり、櫓や梶の需要が高かったとみられる。碇を製作していた場所は、新玉造町であり、『大坂町鑑』や絵図などで見られない地名であるが、『難波丸』『大坂堅横町中之名』において、「新玉造之町之分」として北は長堀より南は道頓堀までとあり、宮川町・松江町・二本松町・浜松町などが掲載されている。本稿の図面では「新玉造町」として「新玉造橋」南詰を代表ポイントとしている。



造船は指帆のように、材料の木綿の集散地であった京橋に近い場所に販売場所が設けられているものもあるが、船大工のいる江之子島を中心にして、材料や船の各部位などの専門性の高い職がまとまって分布している状況がうかがえる。

次に刀について検討しておきたい（図6）。『難波丸』には刀と脇差の鍛冶職人が認められる。太刀は武士にしか許されなかったが、護身のため脇差は商人も所持が許されていたこともあり、元禄期の大坂には受領鍛冶49名と受領鍛冶之外上手分6名といった多くの刀鍛冶が存在していた。また刀鍛冶の他、刀脇差ほり物屋1軒、刀脇差疵なをし3名、刀脇差疵なをし兼鑢師1名、鞘師2名、鞘塗師2名、柄巻師3名、銘切師・銘師7名、金具屋2軒、鑢屋2軒などがいたことがうかがえる。

原料の鉄素材を鍛錬して刀身は作られる。しかしそれだけでは刀として完成することはなく、刀身には刀匠が行う研磨に加えて仕上げの研ぎ要し、さらに鑢、柄、鞘や装飾性の高い目貫などが、製作された刀に合わせて個別に作られる。柄は柄巻師、鞘は鞘師、鑢や目貫もそれぞれ専門の職人によって製作される。また大坂新刀の特徴として華麗な刀身彫りも施される。刀身彫りは刀鍛冶の手で行うこともあったが、倶利伽羅龍などの手間のかかる図像は刀脇差ほり物屋が専門的に行ったことも考えられる。刀身彫りは薄い刀身を鑿によって彫り込むため、歪みが刀身に生じることが多いというが、刀鍛冶によって慎重に刀身の調整がなされたであろう。このように専門性の高い職人間で細かな調整を重ねることによってはじめて刀が完成すると考えられる。

刀匠の中で受領鍛冶と受領鍛冶に並ぶ鍛冶、そしてそれら以外に区分される。受領鍛冶とは官位に叙された刀匠のことで格式が高い。『難波丸』（元禄9（1696）年4月）には49人の受領鍛冶が掲載されている。また『難波鶴』（延宝7（1679）年8月）では大坂正宗と呼ばれた井上真改ら、41人の受領鍛冶が大坂で活躍していたことがうかがえる。

『難波丸』の記述通りに、受領鍛冶の居所を示すと次の通りである。

常盤町 津田越前守助広 刀十枚脇七枚	同町 剃刀 美濃守盛重 三枚二枚
錦町 丹波守吉道 五枚三枚	同町 剃刀 上総守康重 二枚一枚
内本町東 河内守国助 七枚五枚	同町 薩摩守兼岡 三枚二枚
内本町東 肥後守国康 五枚三枚	同町 剃刀 阿波守信吉
鑪屋丁 近江守高仕助直 五枚三枚	内骨屋町 阿波守康継 三枚二枚
鑪や町 丹後守直道 七枚五枚	同町剃刀 伊勢守源国吉
同町 備前守祐国 五枚三枚	久太郎町二丁目 伊勢守国輝 包十五枚十枚
常盤町 越後守包貞 三枚二枚	上久宝寺町 備中守橘康広 五枚三枚
同町 常陸守宗重 三枚二枚	上久宝寺町 陸奥守為康
同町 栗田口近江守忠経 五枚三枚	蠟燭町 伯耆守盛舂 三枚二枚
同伏見町 上野守吉国 三枚二枚	内平野町 播磨守兼舂 三枚 剃刀小刀道具之分
同町 伊賀守包道 三枚二枚	但刀脇差ニハ此銘ヲ切
同町 石見守国助 三枚二枚	同町 剃刀小刀 河内守源広高
同町 相模守為広 三枚二枚 (右上へ)	同町 鉄肥後守重広 初ハ盛町中古ヨリ銘替ル

## II 研究報告

籠や町 剃刀 飛騨守兼主 三枚二枚	上本町一丁目 出羽守助重 三枚二枚
南革屋丁 剃刀 豊後守包高 三枚二枚	内本町東 武蔵守国光
同町同 若狭守包広 二枚一枚	同町 若狭守広政
同町同 摂津守源広外	同町 越前守来信吉
谷町大手剃刀 但馬守橘貞信 三枚二枚	南新町 山城守秀辰 三枚二枚
松尾町 陸奥守吉行 三枚二枚	南新町 下総守国儀 三枚二枚
常盤町 摂津守忠行	同町 上野守菅原包宗
常盤町 河内守康永	今奥州ニアリ 伊賀守貞則 三枚二枚
同町 相模守国維	納屋町 伊賀守貞次
錦町一丁目 大和守吉道 五枚三枚	同町 剃刀 武蔵守永道
本町 武蔵守国次 五枚三枚	折屋町剃刀 信濃守弘包
本町 若狭守助宗	(右上へ)

『難波丸』には住所、受領鍛冶名、刀・脇差の作刀料（註4）の順に記載されている。三品一門の伊賀守金道、和泉守来金道、丹波守吉道、越中守正俊らが認められる。上記の中で越前守津田助広は天和2（1682）年に没しているが、元禄9（1696）年『難波丸』には名称が記載されている。一方、元禄年間に活躍した刀身彫りの名手として名高い一竿子忠綱の名称が記載されていない。同時期の刀工を正確に掲載しているかどうか疑問な点もあるが、産業として刀鍛冶とその関連職人がどのように分布していたかを検討するためには十分であろう。

この中で伏見町として上野守吉国、伊賀守包道、石見守国助、相模守為広、美濃守盛重、上総守康重、薩摩守兼岡、阿波守信吉の名前が挙がっている。しかし、この「伏見町」が18世紀以降に北船場で認められる地名であるかどうかは疑問が残る。というのも、『難波丸』より17年古く刊行された『難波鶴』では伏見両替町に上野守吉国、伊賀守包道、石見守国助、美濃守盛重、阿波守信吉らが、また、上久宝寺町に相模守為広、南納屋町に上総守康重がそれぞれ居住していたことが記されている。

また『難波鶴』と『難波丸』で住所表記が一致する者21名に対して、住所の表記が変更されている者が17名である。内訳は伏見両替町→伏見町のもの5名、伏見立売町→常盤町7名、上久宝寺町→伏見町、追手筋呉服町→錦町、すげいた町→南新町、内平野町二丁目→蠟燭町、南納屋町→伏見町がそれぞれ1名である。『難波鶴』から『難波丸』の刊行までは17年離れているものの、上町の伏見両替町から北船場の伏見町へ大挙して刀鍛冶が移住したならば、何か他に記録がありそうであるが、これに関する史料は現在のところ知られない。一方で、元禄期前後に伏見立売町→常盤町、追手筋呉服町→錦町、すげいた町→南新町といった町名変更があったことがうかがえ、『難波丸』には旧地名が混在していた可能性があると考えられる。これらのことから本稿においては受領鍛冶に記される「伏見町」は『難波鶴』の伏見両替町一帯を指していると考えておきたい。

このような前提をもとに作成したのが図6である。上町の鑪屋町・常盤町・伏見町（伏見両替町）に受領鍛冶が数多くみられ、また、内平野町二丁目には受領鍛冶に次ぐ「受領鍛冶之外上手分」が集住していることがうかがえる。そしてこれらの刀鍛冶の工房周辺に鞆師・鞆塗師、柄巻師、彫物師が

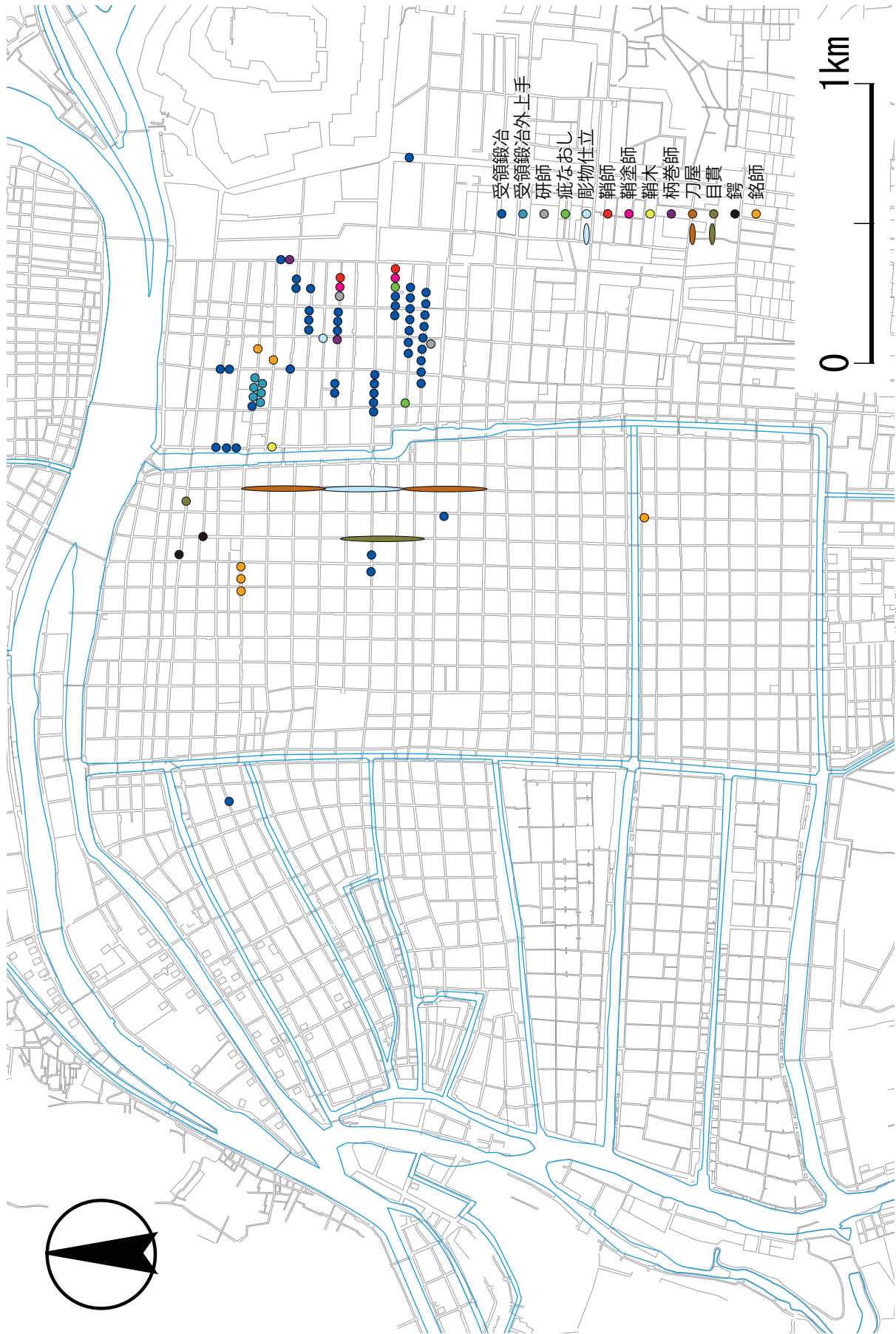


図6 刀関連の諸職業



図7 両替商



図8 長崎問屋・長崎糸割符

## II 研究報告

分布している。この図から大坂城の西側には刀製作に携わる専門性の高い職人たちの空間が広がっていたことがうかがえる。

### 5、両替商・長崎糸割符商人・長崎問屋

銀座は高麗橋両替町にあった。三郷惣会所銀掛屋には北組と南組とがあり、『難波丸』には前者には御堂筋の銚屋平兵衛、後者には本町一丁目銭屋の名が記されている。

『難波丸』には両替商については「両替」と「両替屋」と分けて掲載されており、「両替」には「大阪における両替屋の鼻祖」（宮本又次 1972、p. 78）とされる「てんわう寺や五兵衛」（今橋一丁目）の他、「長はまや市兵衛」（高麗橋一丁目）、「鴻池や善右衛門」（高麗橋一丁目）、「尼崎や市太郎」（高麗橋一丁目）、「新屋九右衛門」（高麗橋一丁目）、「三谷八右衛門」（北浜一丁目）、「すけ松や理兵衛」（新うつぼ町）の7名が認められる。

「両替屋」には「両替屋中間」として150軒が載せられており、そのうち「本中間」が28軒である。そしてこれらの両替仲間以外にも「小銭屋」が300軒存在していた。

「本中間」28軒の中には、てんわう寺や五兵衛、鴻池や善右衛門ら、前述の「両替」として記されている者が何人か含まれている。本仲間両替は本両替として、金銀売買、貸付、手形振出、為替取組、預金などの銀行的な業務を行ったと考えられる（宮本又次 1972、p. 78）。

7人の両替商は新靱町の助松屋理兵衛を除いて、東横堀をはさんで銀座の東側、北船場の高麗橋やその一本北の通りの今橋などに居を構える。またその周囲に本仲間の両替屋が広く分布する。平野橋から土佐堀川までの東半に本仲間の両替屋が集中して分布する（図7）。

糸割符商人とは中国産の生糸を仕入れて販売する商人で、特権的な商人になることが多かったとされる（宮本又次 1957、pp. 42-63）。最初、京・堺・長崎の商人で独占されていたが、寛永8年に江戸・大坂の商人も加わることが許され、『難波丸』では長崎糸割符商人として62軒が掲載されている。

この長崎糸割符商人の分布を見ると、市中に広く分布することがうかがえる（図7）。今橋や伏見町はもちろんのこと、本町、安土町にもまとまって分布する。長崎問屋は20軒が記されており、このうち「過書町 長崎や五郎兵衛」「内あはぢ町 備前や次郎右衛門」は長崎糸割符商人でもある。長崎問屋は思案橋・平野橋付近に多く、長崎糸割符の分布と比べて、より堀川に近い場所に位置する（図8）。このような長崎問屋の分布の特徴は、荷揚げと蔵への収納を容易に行える場所として堀川沿いやその付近を選択したためと推測される。

図7・8に示したように、両替商、長崎糸割符商人、長崎問屋など、各商人の分布範囲が完全には一致しないものの、それらが重なる区域が、今橋・高麗橋・平野町であり、大坂市中でもとりわけこの地域において金融資本の集積度が高かったものと推測される。

### 6、嗜好品

特権商人・両替商の多い金融センター的な北船場の北側は富裕層の住むところとも考えられる。こういった街区とそれ以外とでは、嗜好品の消費に差があるのかどうかを問屋の分布で検討してみたい。嗜好品として煎茶と煙草を選び、それらの問屋の分布を検討した（図9）。『難波丸』において煎茶問屋は18軒、煙草問屋は20軒が記される。煙草問屋はこの他に仲買が82軒あることが記される。

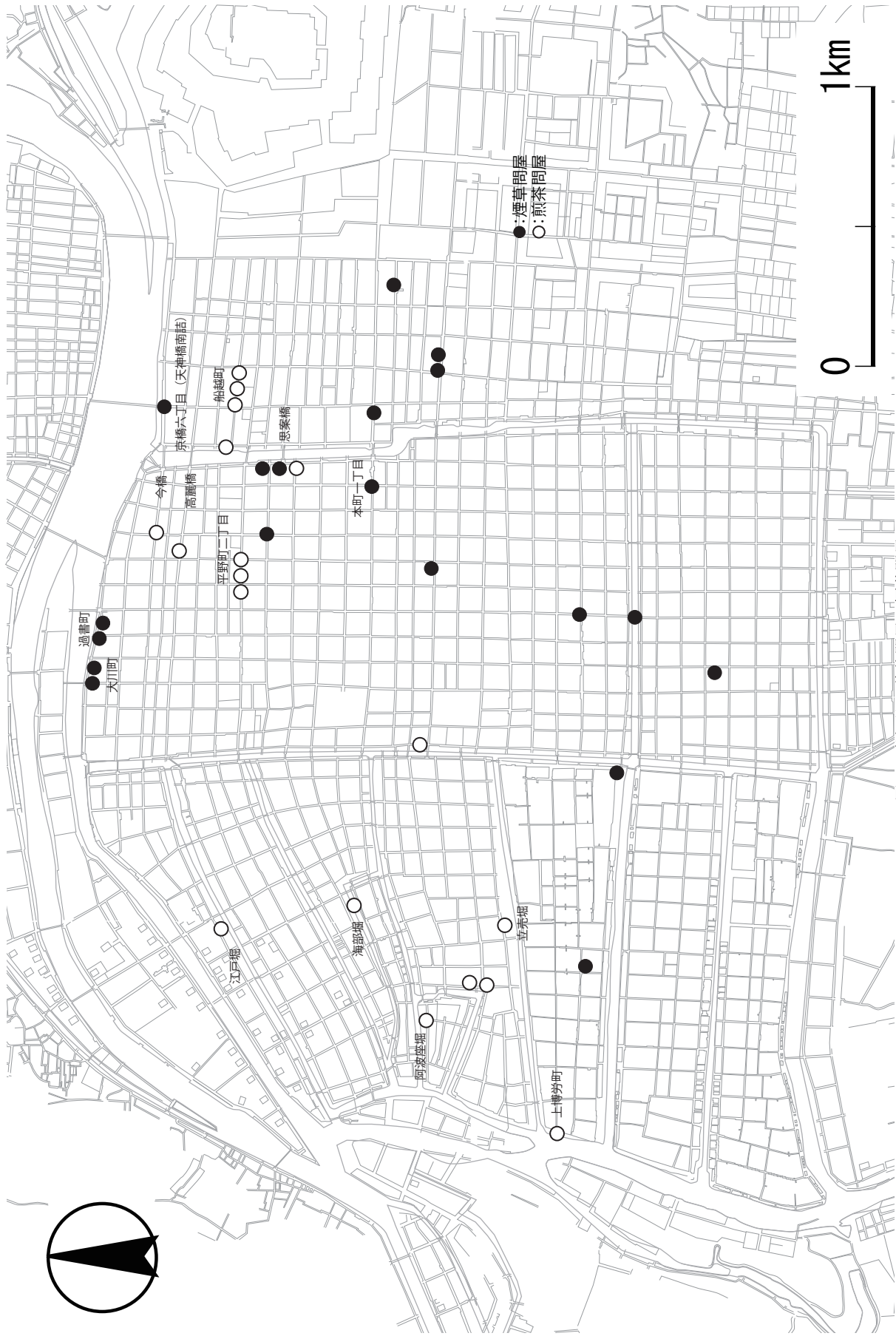


図9 嗜好品、煎茶問屋・煙草問屋

## II 研究報告

それぞれの問屋の分布を検討すると、煎茶問屋が北船場と西横堀以西の江戸堀から立売堀までの間に分布する一方で、煙草問屋は均一に分布している（図9）。北船場には煎茶問屋は多く、煙草問屋は少ない状況がうかがえるが、これがその場所の住人の嗜好性を反映したものかどうか、

『難波丸』に本町一丁目の煙草問屋として現れる川さきや五兵衛は、本町橋西詰の江戸買物問屋・油売問屋として記される「川崎や五兵衛」と同一とみられる。この人物は江戸買物問屋・油売問屋と煙草問屋を兼業していたとみられる。また、関東の煙草を扱う大川町のかまくらや利兵衛は、江戸問屋・江戸買物問屋を商い、西国の煙草を扱う過書町のはまだや七郎兵衛は、備中石見問屋・生蠟問屋を兼ね、備後又広嶋問屋でもあった可能性がある。さらに同町の川さきや九兵衛は備中間屋であったかもしれない（註5）。同様に、丹波の煙草を扱う京橋丁のたんばや七左衛門は播磨問屋の可能性もある（註6）。これらの兼業の事例から、北船場に所在する煙草問屋は遠国問屋であり、その荷受品の一つとして煙草を扱っていたと考えられる。

煎茶問屋も遠国問屋を兼ねる場合が多い。日向の茶を扱う江戸堀のさかいや四郎左衛門、海部堀の住よしや仁左衛門、阿波座堀のかぎや五郎左衛門はいずれも日向問屋であり、肥後のお茶を扱う上博労町のかしはや与市郎は日向問屋と船板問屋を兼ねている。日向問屋であり煎茶を扱う問屋は、江戸堀、阿波座堀、海部堀等、北船場でなく西横堀以西の堀川沿いに位置している。このうち阿波座堀には多数の日向材木問屋も分布しており（図4）、この付近に日向方面の産物を荷揚げする問屋が多かったとみられる。こういった遠国問屋の商品として煎茶も扱われていたとみられる。

さらに思案橋に店を構えるよしのや庄介は、下市の茶を扱う煎茶問屋であると同時に、吉野の煙草の問屋でもあった。吉野と下市は近く、吉野川を通じて繋がっている。よしのや庄介はこのような吉野川流域の特産品をまとめて扱っていた商人であろう。

以上のように煎茶問屋、煙草問屋はいずれも遠国問屋が兼業する事例が多くみられた。そして遠国問屋と兼業する煎茶問屋が西横堀以西に多く、遠国問屋と兼業する煙草問屋が北船場にそれぞれ分布する傾向がうかがえた。消費地付近に嗜好品の問屋が分布することを想定しつつ分布の分析を行ったが、煎茶や煙草の問屋は遠国問屋と兼ねているものも多く、遠国問屋の分布の一端を反映する結果となった。嗜好品の店舗分布と消費者との関係は、仲買、小売の分布も総合して今後検討していきたい。

### 7. まとめ

『難波丸』からいくつかの職・商業について抜き出して、分布を検討した。これまでに指摘されている同業者のまとまりを再確認できたほか、紙・木材など素材・加工・消費・リサイクルといった動きを補足することで、諸産業が有機的に連関している状況を分布図で示すことができた。また、造船や刀製作に携わる職人・商人が近接して居住しており、同業者のまとまり以外にも、産業的なまとまりによって集住していた可能性があることを示した。また長崎糸割符、長崎問屋といった貿易商や両替商が密に分布する「金融・貿易」センター的な場所も抽出することができた。このように、元禄期の大阪では様々な商業・手工業生産・流通のネットワークが重畳しながら経済活動の厚みが生み出されていることが産業マップからわかるのである。GISの手法を用いて商業都市大阪を一つの有機体として可視化する作業はまだその途についたばかりである。



## 註

(1) マッピングに際しては、GIS ソフト MANDARA (<http://ktgis.net/mandara/>) を使用した。また現住所と江戸時代の住所とを対応するため、国土地理院の電子国土基本図（地名情報）「住居表示住所」 ([http://www.gsi.go.jp/kihonjohochousa/jukyo\\_jusho.html](http://www.gsi.go.jp/kihonjohochousa/jukyo_jusho.html)) を使用した。

(2) 「天保 14 年図」は明治時代の地図に天保十四年の古絵図に記された地名を入れたものである（大阪市役所 1927b）。この明治時代の地図とは、参謀本部陸地測量部「仮製地形図（比例 2 万分 1）」（明治 19 年製版同 32 年修正）、内務省地理局「大阪実測図（比例尺 5 千分 1）」（明治 19 年 1 月製版同 23 年 2 月大阪府再版）、大阪市役所「大阪市図」（比例尺 1 万分 1）（明治 36 年 1 月刊同 41 年再版）を指す（大阪市役所 1927a p. 1）。しかしトレース作業において、立売堀付近に明治の地図と合わない部分が認められたため、西船場の南半分と堀江にかけて、内務省地理局圖籍課（測量課）大阪実測図 5 千分 1（明治 19 年）（以下、「明治 19 年図」と称する）をトレースして「天保 14 年図」に統合した。このように本稿の図面には部分的に「明治 19 年図」が入るが、「天保 14 年図」がベースとなっている。

(3) 明治 33 年の『大阪営業案内 大阪商品仕入便覧』には、多いものから順に、薬種商 128 軒、陶器商 97 軒、小間物商 95 軒、材木商 82 軒、煙草商 74 軒、呉服商 74 軒、菓子商 70 軒、履物商 69 軒、紙商 68 軒、金物商 67 軒などが記されている。元禄 9（1696）年の『難波丸』では多く認められた古手屋は 13 軒（古着商 8 軒、古着屋 2 軒、古手解物商 1 軒、古着問屋 1 軒、古着類販売 1 軒）、古鉄屋は 1 軒（鉄物商 1 軒）と少ない。明らかに少なくなっているように見えるが、『大阪営業案内 大阪商品仕入便覧』は人数のみの表記は無いため、記述方法による違いを反映している可能性もあり今後の検討課題としたい。

(4) 本稿では作刀料と理解している。

(5) 備中間屋 北浜二丁目 川さきや九兵衛、備後又広鳴北浜二丁目 はまだや七郎兵衛の記述がある。北浜二丁目は過書町の東隣、あるいは一部が含まれる可能性がある。

(6) 播磨問屋に天神橋 たんばや七左衛門がみられる。天神橋の南詰は京橋六丁目である。

## 引用・参考文献

大阪文化財研究所 2011 「福島区福島三丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（FK10-2）報告書」

大阪市役所 1927a 「大阪市史附圖目次及説明」『大阪市史附圖』明治 45 年（昭和 2 年再版発行）

大阪市役所 1927b 「第壹圖 大阪圖（元禄十六年）」「第五圖 大阪圖（天保十四年）」『大阪市史附圖』明治 45 年（昭和 2 年再版発行）

池田浩司 2001 「大阪の白粉仲間」『大阪商業大学商業史博物館紀要』創刊号 pp. 85-98

今井修平 1989 「第四章 第七節 工業の展開」新修大阪市史編纂委員会『新修 大阪市史』第三巻 pp. 802-823

小林茂・脇田修 1973 「第一章 近世前期 大阪の経済」『大阪の生産と交通』株式会社毎日放送 pp. 1-98

塩村耕 1999 『古版大阪案内記集成』和泉書院

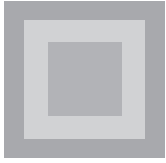
宮本又次 1958 『大阪商人』弘文堂 同氏 2010 『大阪商人』講談社学術文庫

## II 研究報告

宮本又次 1972 「第二章 大阪の商業と商人」 宮本又次編『上方今昔』 至誠堂新書 pp. 51-160

原田伴彦・矢守一彦・矢内昭 1980 『大阪古地図物語』 毎日新聞社

渡邊忠司 1993 『町人の都 大坂物語』 中公新書



# 北齊の晋陽一鄴との比較を中心にー

## 村元健一

### 要旨

晋陽は北齊期において京師・鄴と並ぶ「別都」としての役割を担っていた。唐の長安・洛陽に先んじた複都制といえるが、その機能は軍事面に特化される。また晋陽に埋葬された人物を見ると、圧倒的に北族の勳貴が多く、晋陽が北族の本貫地と見なされていたことが分かる。晋陽が他の要地と異なるのは皇帝が頻繁に訪れ、ここで即位していることである。この状況の背景には北齊が突厥や北周と対峙する上で、晋陽が最も重要な拠点であったことがある。また北齊皇帝は歴代、自らの軍事的指導者としての資質を示すため、頻繁に親征しており、その結果、晋陽滞在の機会が増えたのである。また、高祖高歓が最初に拠点を置いた象徴的な意味を持つ都市でもあった。そうした要素が組み合わさり、晋陽は北齊の「別都」として位置付けられたのである。

### 1、はじめに

古代難波の特徴の1つに、天武朝、聖武朝で複都制下の一方の都だったことがある。古代複都制についての研究は決して十分ではないものの、難波の特質を明かにすることが制度そのものの解明につながることは間違いない。ところで、この制度自体は（瀧川政次郎 1967）以来、中国の制度を模倣したものと捉えられている。中国の複都制の典型例とされるのは唐の長安と洛陽である（註1）。政治都市である長安に対し、文化・経済都市である洛陽も、ほぼ同じ規模の宮城を有し、都城としての機能を備えていた。それ以前の王朝でも複数の「都」を有するものがあるが、いずれも地域の中核的な都市という域を出ず、複数の「都城」を有するとはおよそ言い難いものである。その中であって北朝期の北齊の鄴と晋陽はやや趣を異にする。

晋陽は北魏末期の爾朱氏政権以来の大丞相府であり、高歓が爾朱兆を破り、北魏の実権を掌握した後この地に大丞相府を置いたのも爾朱氏政権の遺産を活用したものである。高歓が晋陽を引き続き拠点とした原因は、この地が高氏政権を軍事面で支える北族の拠点であること、対西魏への重要な軍事拠点であること、さらに魏帝の都、洛陽、鄴とも地理的に密接に関わることができる（前田正名 1976）という点に求めることができる。

ただ、高氏政権で興味深いのは東魏を廃した文宣帝高洋が鄴で即位し、鄴の荘厳化を行っているにも関わらず、頻繁に晋陽に行幸していることであり、また以後の歴代北齊皇帝も晋陽に滞在することが多いだけでなく、晋陽で即位していることである。その実態から、北周では晋陽を「別都」と表現し（註2）、北齊墓誌にも「二都」と表すものがある（註3）。一つの王朝に、中心となる都市が2つ存在し、皇帝がその間を頻繁に往来する状況は、晋陽が鄴とならぶ実質的な「都」であったことを端的に示す。一方で、それほど晋陽を重視しながら、歴代皇帝は鄴に埋葬され、天子としての最重要儀礼である郊祀も鄴で行われている。つまり象徴的な意味で晋陽は王朝の中心として機能し得ていな

い。こうした状況は早くに（谷川道雄 1988）により、権威の都「鄴」、権力の都「晋陽」と表現されたが、北斉の両都市の評としてこれほどの確なものはあるまい。また、陪都としての晋陽については、北魏末以降の変遷、王朝における位置付け、行政機構についての詳細な研究が（崔彦華 2012）により行われている。（渠川福 1989）も北斉期にあって晋陽は鄴よりもはるかに重要で、実質的な都であったとする。諸先学の研究により、晋陽をめぐる論点はほぼ出尽くしているように思えるが、渠氏の論に代表されるように、いささか晋陽を重視しすぎる感もある。また、なぜ北斉を通じて晋陽が鄴と並び重視され続けたのかは、鄴との比較の中で解明が必要な点である。

本稿では、中国の複都制の中で実質的に機能した北斉期の晋陽を検討し、鄴と併存した意味を明らかにすることを目的とする。

## 2、晋陽の構造

まずは晋陽の構造を見ていきたい。晋陽が立地するのは現在の太原市の南西方向で、西に西山、東に南流する汾水を控えた平坦な土地である。現地調査では、遺構の残りが極めて悪く、地上にはわずかに西城壁と南西角が遺存しているだけである。ボーリング調査により城壁のおおよその範囲はほぼ判明しているが、城壁の築造年代などは不明である（謝元路・張頌 1962）。そのため、春秋以降、五代十国の北漢までの長い歴史を有する晋陽の遺跡の中から北朝期の晋陽の遺構を抽出するのは困難である。晋陽が最大の規模となったのはおそらく唐代であり、旧来の晋陽城に東城、中城を付加し、その様相を一変している（註4）。北斉の晋陽は北周により攻略されたのち、宮殿の破却は見られたが、城壁そのものの破壊を伴うことなく北周、隋、唐に継承されたと考えられるため、唐代の晋陽は北斉の晋陽城を西城とし、新たに中城、東城を付加したものと一応は考えていだろう。

以上の考え方にに基づき、晋陽城の図面のうち最も情報量が多い（国家文物局 2006）所掲のものから、推定復原線を除き、調査で確認された城壁ラインのみを示したのが図1である（註5）。その規模は南北 3,700 m、東西 4,500 mにおよび、（国家文物局 2006）ではすべて唐の「西城」としている。この図では西城内やや東よりにある東関村を貫くように南北方向の城壁があり、西城をさらに2つに分けている。この城壁の存在と、村名の「東関」を重視するならば、この城壁より西側だけが存在していた時期があったことを窺わせるが（註6）、調査の進展を待つしかない。ただ城の規模としては、東西 4,500 mとすれば面積では鄴に匹敵し、東関村の城壁を東壁としても鄴南城とほぼ同規模となる。

城内では、西城の北よりの場所に東西 300 m、南北 400 mの小城があり、そこに基壇が確認されている。この城は地元で「大明城」と呼ばれており、北斉の大明殿の故址と考えられる。この小城の北側に接して東西方向の城壁が確認されており、その以北が後述のように晋陽宮の所在地となる。

以上の調査成果がほぼすべてで、殿舎の配置、城門の位置も分からず、城内の街区や官衙、寺院の存在についてはほとんど手がかりがない状況である（註7）。そこで『北斉書』『北史』などに見える殿舎名と主な用途を以下に記しておこう。

- ①徳陽殿:文宣帝崩御（『北斉書』文宣帝紀）（註8） ②宣徳殿:文宣帝の斂、廢帝即位（『北斉書』文宣帝紀、廢帝紀）（註9）、孝昭帝即位（『北斉書』孝昭帝紀）（註10） ③崇徳殿 武成帝が

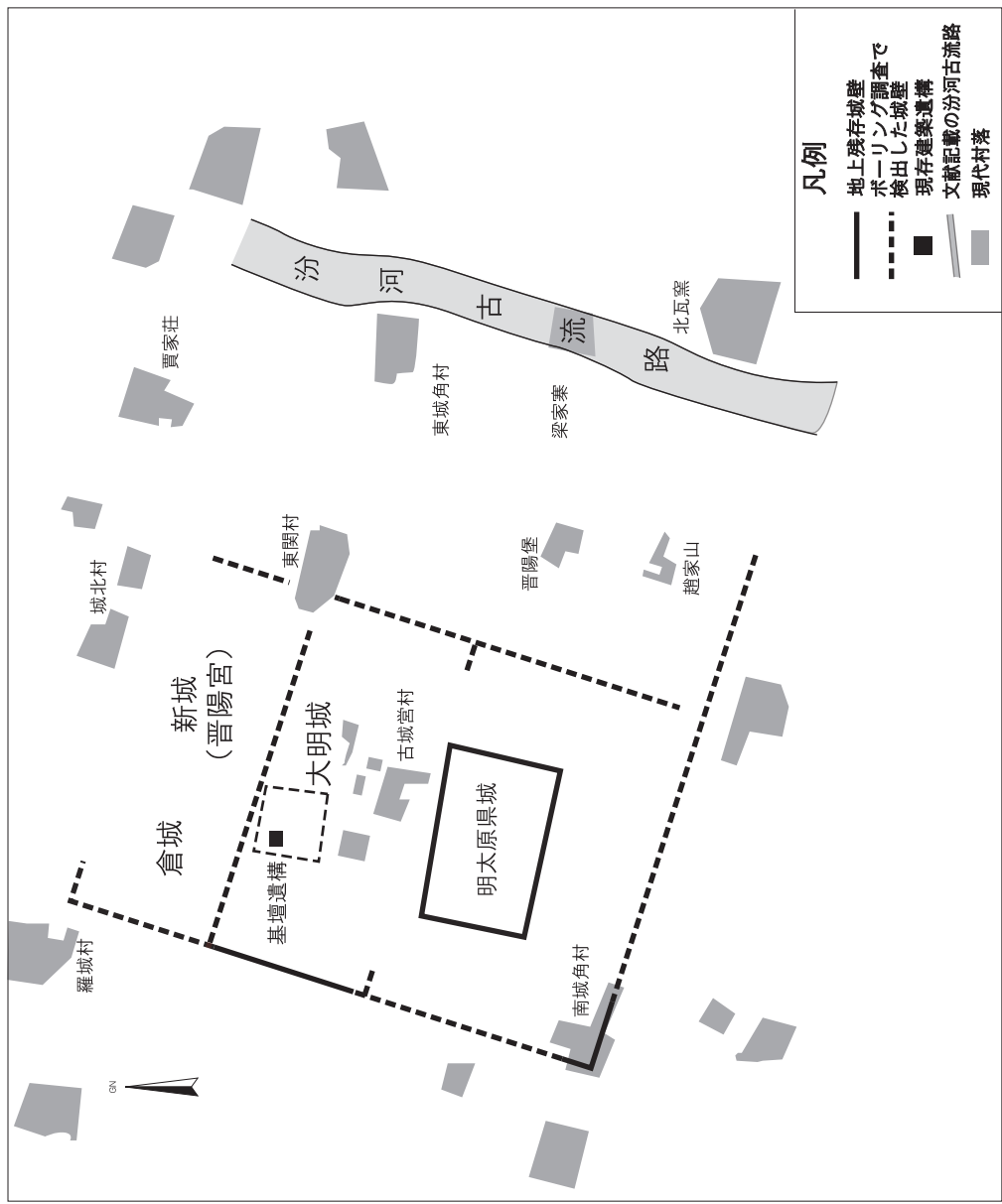
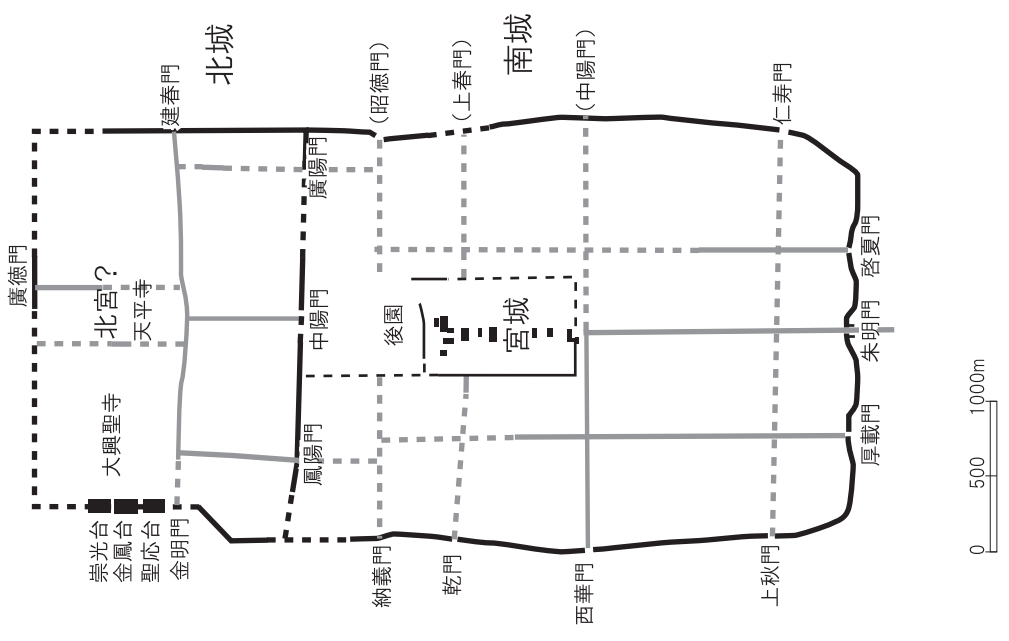


図1 晋陽(左)と鄴(右)比較図



鄴の図は(村元2007)より。晋陽は(国家文物局2006)所掲の図をもとに作成。現代村落名は晋陽城の範囲を確定する上で重要な手がかりであるため、あえて記入した。

## II 研究報告

孝昭帝の喪を發す（『北史』武成帝紀）（註11） ④大明殿：後主の天統3年落成（『北史』後主紀）（註12） ⑤并州尚書省（『北史』後主紀）（註13）

この他、『永樂大典』卷5204『太原志』所引の「晋陽記」に比較的詳しい記載があるが、その大半が唐代のものと考えられ、北齊期の晋陽を復原する上では注意を要する（註14）。今挙げた殿舎のうち、④の大明殿は『文館詞林』に「後主幸大明宮大赦詔」があることでも著名なものである。その構造は、『永樂大典』卷5204『太原志』所引の姚最「序行記」に、

晋陽宮西南又有小城、内有殿、號大明宮、城高四丈、周四里。

とある。つまり周四里という比較的規模の小さな範囲の中に大明殿があったと考えられる（註15）。この大明殿は、後主の時に、太上皇帝の武成帝が後主のために造営させたものである。『北史』卷55・馮子琮伝に、

天統元年、世祖禪位後主。世祖御正殿、謂（馮）子琮曰「少君左右宜得正人、以卿心存正直、以後事相委」。除給事黃門侍郎、領主衣都統。世祖在晋陽、既居舊殿、少帝未有別所、詔子琮監造大明宮。宮成、世祖親自巡幸、怪其不甚宏麗。子琮對曰「至尊幼年、纂承大業、欲令敦行節儉、以示萬邦。兼此北連天闕、不宜過復崇峻」。世祖稱善。

とあるように、晋陽を代表する著名な殿舎であるにもかかわらず、その実態は決して華美なものではなく、あえて節儉を示すものだったという。また、この史料からは後主期に新宮として大明宮が造営され、それ以前は一貫して晋陽宮が用いられていたことが分かる。

①～③の殿舎はいずれも晋陽宮のものであり、正史の記載から、宣徳殿が最も中心的な殿舎であり、徳陽殿が寢殿だったのであろう。また、武成帝が後主のために大明宮を宮外に新たに造営していることから、晋陽宮が鄴宮に比べても決して十分な面積を確保できていなかったことを窺うことができる。なお、以上の殿舎のほかには嘉陽殿がある。『隋書』卷30・五行志下に、

武平七年、有鶴巢太極殿、又巢并州嘉陽殿。雉集晋陽宮御座、獲之。京房易飛候曰「鳥無故巢居君門及殿屋上、邑且虚」。其年國滅。

とあるもので、鄴の太極殿と並んで晋陽の嘉陽殿が挙げられており、かなり重要な殿舎であったと考えられるが、『北齊書』『北史』には見られず、詳細は不明である。晋陽宮と大明宮の位置関係については『永樂大典』卷5204『太原志』所引の姚最「序行記」に、

（晋陽宮）南面因大明城、西面連倉城、北面因州城。本東魏置、隋文更名新城、煬帝置宮、周七里、唐因之。

とあるように、大明宮の北に宮壁を共有して晋陽宮があった。また、隋、唐の晋陽宮は東魏・北齊のものを継承していたと考えられる。

以上から復原される北齊晋陽は、北端に晋陽宮があり、その西南に宮壁を共有する形で大明宮が造営されたという姿である。なお⑤の并州尚書省、すなわち并省尚書は、後主の天統5年（569）に大基聖寺となっていることから、宮外にあったと考えるべきであろう。

### 3、北朝期晋陽の変遷

正史の記載は北齊の京師については鄴を指すことで一貫している。晋陽が京師たりえないのは、太

廟や社稷、さらには郊壇を欠いているからである。では晋陽がなぜ「別都」と表現され、北齊歴代皇帝が居したのであろうか。東魏～北齊期の変遷を追い、その手がかりを探りたい。

#### ①東魏期

高歓、高澄の時期である。爾朱氏以来の大丞相府を継承したが、特に関中の西魏に備える上で、戦略的に極めて重要な都市であった。武定3年(545)には、早くも「晋陽宮」が置かれその特殊性は高まった。この東魏期の晋陽は、「覇府」と呼ばれるもので、実権が集中し、鄴の東魏皇帝を操っていたのである。

#### ②文宣帝期

文宣帝高洋は兄・高澄が鄴で暗殺された後、即座に晋陽に行く(註16)。高氏政権を支える「勲貴」層を取り込む必要があったことを如実に示す史料である。文宣帝は鄴で即位した唯一人の北齊皇帝だが、それは東魏からの禪譲という特殊な状況下によるものである。文宣帝は在位中の晋陽滞在期間が特に長い、その実態は対柔然、対突厥戦の指揮や、長城造営の視察など、主に軍事的な側面が目立つ。とりわけ親征記事が多く、高歓の後継者として自ら武威を「勲貴」に示す必要があったのであろう。一方で、文宣帝期は鄴城の整備が顕著である。本紀によれば、天保2年(551)に顕陽殿を昭陽殿と改名し、さらに宣光・建始・嘉福・仁壽の諸殿を造営、同7年には三台宮の修築というように、帝の治世を通じて鄴の荘厳化が進められる。これは宮内にとどまらず、都城下に大荘厳寺を建立しているように(註17)、都城全体に及ぶものであった。ところが、晋陽には目立った造営記事は見られない。文宣帝期は晋陽への行幸が多く、そのことから晋陽重視と捉えられがちであるが、それは柔然や新興の突厥、あるいは宿敵の西魏・北周戦の指揮のためであり、まさに軍事面に特化した対応だったといえる。結果として晋陽滞在期間が長くなったとはいえ、晋陽を都城として整備したことを確認することはできない。

#### ③孝昭帝期

孝昭帝の在位は2年に満たないわずかなものである。甥の皇帝を鄴で廃した後、即座に晋陽に赴き、わざわざそこで即位しているのは、文襄が暗殺された後、文宣帝が直ちに晋陽に走ったのと同じである。また、親しく北方に遠征している点も似ており、ここに北齊皇帝のあり方を垣間見ることができる。なお、孝昭帝期には、帝の在位期間の短さもあり、都城や宮殿の修築記事は見られない。

#### ④武成帝期

武成帝の即位は「南宮」であり、前後の状況から晋陽と考えられる。武成帝期には鄴、晋陽ともに大がかりな造営記事が見られる。鄴では城南の大総持寺の造営、三台宮の大興聖寺への改築が注目される(註18)。皇帝勅願の仏教寺院建立による都城の荘厳化といえよう。晋陽では前節で述べた大明殿の造営が特筆される。武成が太上皇帝となった後であるが、この宮殿の落成により大赦、文武百官の特進、租税免除が行われており、重視された宮殿であったことが分かる(註19)。

一方で歴代の皇帝と同様に、鄴と晋陽の往来が多いが、親征記事は少なく、特に北方方面への親征は見られないのが特徴である。

#### ⑤後主期

表 晋陽および周辺の北齊墓誌一覧

番号	葬地	姓名	本籍	追贈	享年	死去場所	卒年	埋葬場所	埋葬日	備考	出典
1	晋陽	夏侯念	沛国譙	優婆塞	50	晋陽	天保三年(552)十月廿日	并州城西蒙山之下	天保三年(552)十一月廿日		佐川英治 2012
2	晋陽	賀拔昌	朔州鄯無	都督滄瀛二州諸軍事瀛州刺史、右衛將軍開府儀同三司南袁州譙郡蒙泉開國子	42	—	—	晋陽城北廿五里、地勢西高、名山之下。	天保四年(553)二月廿七日		太原市文物考古研究所「太原北齊賀拔昌墓」『文物』2003年3期
3	晋陽	□莫陳		驃騎大將軍直閣正都督高平泉開國子西舞泉開國男	—	—	—	并州城西山	天保六年(555)二月二十七日	報告者は姓侯と墓主を「陳」する。	山西省考古研究所「太原西南郊北齊洞室墓」『文物』2004年6期
4	晋陽	□子輝	高柳	大都督魚龍泉開國子白水泉開國男	—	晋陽	天保七年(556)十一月十八日	晋陽去城廿里汾水之左	天保七年(556)十二月三日	碑形の墓子すも誌。「柳と輝る」もある。	王玉山「太原市南郊清理北齊墓一座」『文物』1963年6期
5	晋陽	寶興洛	扶風槐里	驃騎大將軍直齊都督軹開鎮城囑	—	—	—	—	天保十年(559)十月十三日		山西省考古研究所・太原市文物考古研究所・晋源区文物旅游局「太原開化村北齊洞室墓發掘簡報」『考古与文物』2006年2期
6	晋陽	張肅俗	代郡平城		26	鄴下	天保十年(559)七月廿七日	晋陽三角城外	天保十年(559)十一月十九日		山西省博物館『太原拓城北齊張肅墓文物圖録』中国古典芸術出版社 1958年
7	晋陽	賀婁悦	高陸阿陽	衛大將軍安州刺史太僕卿禮豐泉開國子	56	鄴之崇義里	—	并州三角城外	皇建元年(560)十一月二十六日		渠川福「北齊『賀婁悦墓誌銘』釈考」『北朝研究』1990年1期。常一民「太原市神堂溝北齊賀婁悦墓整理簡報」『文物季刊』1992年3期。
8	晋陽	劉貴		東夏州刺史	—	—	—	—	河清二年(563)		渠伝福「徐顯秀墓与北齊晋陽」『文物』2003年10期
9	晋陽	狄湛	馮翊郡高陸	車騎將軍涇州刺史朱陽泉開國子	6□	晋	—	晋陽城東北三十里	河清三年(564)十二月十九日		太原市文物考古研究所「太原北齊狄湛墓」『文物』2003年3期
10	晋陽	張海翼	代郡平城	長安侯徐州司馬	42	汾晋	天統元年(565)六月二日	并城西北	天統元年(565)十月十一日		李愛國「太原北齊張海翼墓」『文物』2003年第10期
11	晋陽	庫狄業	蔭山	儀同三司太僕卿袁州刺史	—	庫洛拔	天統三年(567)七月二日	看山之陽	天統三年(567)十二月十二日		太原市文物考古研究所「太原北齊庫狄業墓」『文物』2003年第3期
12	晋陽	韓祖念		大將軍、武功忠武王	—	—	—	—	天統四年(568)		渠伝福「徐顯秀墓与北齊晋陽」『文物』2003年10期
13	晋陽	婁叡	太安狄那汗殊里	仮黄鉞右丞相太宰太師太傅使持節都督冀定瀛滄趙幽青齊濟朔十州諸軍事朔州刺史東安王	—	—	武平元年(570)二月五日	旧塋	武平元年(570)五月八日	武明太子兄子	山西省考古研究所・太原市文物考古研究所「北齊東安王婁叡墓」文物出版社 2006年
14	晋陽	□愷		北肆州六州都督、儀同三司	—	—	—	—	武平二年(571)		渠伝福「徐顯秀墓与北齊晋陽」『文物』2003年10期
15	晋陽	徐穎(顯秀)	忠義	使持節都督冀瀛滄趙齊汾七州諸軍事冀州刺史太保尚書令、武安王	70	晋陽之里第	武平二年(571)正月七日	晋陽城東北州余里	武平二年(571)十一月十七日		山西省考古研究所・太原市文物考古研究所「太原北齊徐顯秀墓發掘簡報」『文物』2003年第10期
16	朔州	尉孌孌	代郡平城	(庫狄迴洛夫人)	51	晋陽之里	天保十年(559)	并州三角城北五里	天保十年(559)五月十七日		王克林「北齊庫狄迴洛墓」『考古學報』1979年3期
17	朔州	斛律昭男	朔州懷朔鎮	(庫狄迴洛夫人)	33	夏州	武定三年(545)秋	朔州城南	河清元年(562)八月十二日		王克林「北齊庫狄迴洛墓」『考古學報』1979年3期
18	朔州	庫狄洛(迴洛)	朔州部落	順陽郡王、使持節都督定瀛濟恒朔雲六州諸軍事定州刺史太尉公	57	鄴	大寧二年(562)三月	朔州城南門	河清元年(562)八月十二日	死後は晋寺に埋葬され、のち改葬。	王克林「北齊庫狄迴洛墓」『考古學報』1979年3期
19	祁県	韓裔	齊国昌黎賈屠	使持節瀛滄幽諸軍事、中書監、三州刺史(特進、使持節青州諸軍事、驃騎大將軍、青州刺史)	54	青州治所	天統三年(567)正月十三日	—	—	北齊末の韓鳳の父。墓は高5mの墳丘を持ち、大型。	陶正剛「山西祁県白圭北齊韓裔墓」『文物』1975年4期

※ 8, 12, 14 の墓誌については (佐川 2012) によれば (太原三晋文化研究会・「晋陽古刻選」編輯委員会 2008『晋陽古刻選 北魏墓誌』山西出版集團・山西人民出版社) に著録されているとのことだが、未見。※ 16 ~ 19 は晋陽の周辺地だが参考のため掲載した。



後主は晋陽宮で武成帝より譲位される。後主期には造営記事の多さが際立つ。これには武成太上皇帝期に、鄴の宮殿の罹災が相次ぎ、九龍殿、昭陽殿、宣光殿、瑤華殿などに被害が出たことを受けてのこともあるが(註20)、かなり華美に造営されたようである(註21)。もっとも、その記述には亡国の皇帝であることを強調する定型的な文辞もあるだろうが、宮城がかなり華美になったことは、北齊を滅ぼした北周武帝がその壮麗さを理由に破却を命じていたことから(註22)、間違いないであろう。

後主期の晋陽の改変で重要なのは仏教寺院の相次ぐ造営である。鄴でも大聖興寺の拡張などが行われているが、晋陽でも大がかりな寺院造営が行われていたようである。以下、関連する事項を列挙しておこう。

- ①天統5年、并州尚書省を大基聖寺に、郊外の晋祠を大崇皇寺に改める(註23)。②西山に大仏像を造営(註24)。③胡昭儀のために大慈寺を造営するも成らず。穆皇后のために大宝林寺を大々的に造営(註25)。

このように、城の内外に大規模な仏教寺院を建立している。いずれも皇帝の勅願寺であり、鄴、あるいは北魏末期の洛陽と同様に仏教寺院を通じて都市を荘厳化するものといえる。

以上のように武成太上皇帝と後主期に晋陽には大規模な造営が相次ぎ、面目を新たにしたのである。それでは軍都としての側面はどうなったのであろうか。後主は即位時わずか9歳であり、当然ながら即位前に武勳があるはずはない。実権は太上皇帝が握っていたため、親征する機会もなかった。それでも北齊最末期の武平7年(576)には、北周軍の晋州攻囲に際しては晋陽に出向き、晋州に軍を進めている。ここにも卓越した軍人でもあることを求められた北齊皇帝の一面を認めることができるだろう。その際、拠点となったのが晋陽であることから分かるように、依然、晋陽は軍都として機能していたのである。

#### 4、晋陽周辺の景観

晋陽の西郊には著名な晋祠があり、後主期に寺院とされたことは先述のとおりである。晋祠の背面にある西山には著名な石窟寺院である天龍山石窟が谷に沿ってやや奥まったところにあるが、山の東面、すなわち晋陽に面した側には大仏で有名な童子寺、開化寺(蒙山大仏)があった。いずれも北齊皇帝と深いつながりのある寺院であり、晋陽の西側の景観を特徴づけるものであった。

一方、他に皇帝の権威や権力を示す建造物は見られない。これは郊壇に取り囲まれた鄴とは大きく異なる点である。鄴では都城北西の丘陵地帯に皇帝陵をはじめ陪葬墓が累々と並んでいるが、そうした景観もない。晋陽の墓地のあり方を考えるために、近年の代表的な成果を見ていこう(表)。同様の表は(崔彦華2012)も作成しており、本表は崔氏の成果によりつつ近年の成果を加えたものである。これまで調査された墓には正史に立伝されているような婁叡、徐穎(顯秀)のものもある。いずれも北齊で王爵を持つ人物で、しかも婁叡は北齊の文宣、孝昭、武成の実母である婁太后の甥である。婁叡墓は晋陽の南に位置し、高大な墳丘を有し、墓誌の記述から付近は婁氏の墓地となっていたことが分かる。一方の徐穎墓は晋陽の北東、汾水の東岸に位置し、付近には武功王韓祖念の墓がある(国家文物局2006)。また汾水西岸には隋代の斛律徹の墓があることから、付近に斛律氏一族の墓地が

あったと考えられる(山西省考古研究所・太原市文物管理委員会 1992)。(崔 2012)も指摘するように、晋陽には婁氏、斛律氏、徐氏といった北齊を代表する勲貴の歴代の墓地があったのである。一方、皇族の高氏は東魏期から一貫して鄴に埋葬されており、晋陽で死去した皇帝、皇族であっても鄴に「帰葬」される(註 26)。墓地のあり方から見るならば、晋陽は北齊の重要な支柱である勲貴が本拠として埋葬される一方、皇帝や皇族、さらには漢人の朝廷有力者の埋葬はなく、「北族の拠点」の域を出ていないことが明確となるのである。

### 5、離宮・行台と晋陽

次にやや視点を変えて晋陽と北齊の離宮や行台と比較していきたい。

北齊期に離宮の存在が確認できるのは中山宮と邯鄲宮だけである。いずれも鄴の至近であり、特に邯鄲は指呼の間といえる距離である。これらの実態はあまり明らかでないが、特別な行政区が設置されたわけではない(註 27)。また鄴に比べていずれも北に位置し、当時、緊迫した対北周戦においては鄴よりも前線からは遠く、対突厥線にしても、突厥の南下ルートが山西を通過するものであることを考えれば、晋陽とは危険性において比較にならない。やはり晋陽は単なる離宮以上の存在意義を有するのであろう。

その意義の1つは、これまで述べてきた軍事的な拠点ということである。北齊皇帝親征の際は必ず晋陽の軍を用いている。鄴にも相当数の軍事力があつたことが指摘されているが(註 28)、北齊の主力ともいふべきはやはり晋陽に常駐する軍であつた。それが鄴に一元化できなかったのは、一つには北の突厥と南西からの北周の侵攻に備えるため、常に重兵を置く必要があつたからだが、それに加えて、晋陽が北族の本貫ともいえる都市となつていたことがある。前節でみた晋陽周辺で見つかる墓はそのことを雄弁に物語る。そのため、北齊皇帝は自らこの都市を頻りに訪れるか、あるいは信頼する兄弟を晋陽に置き、常に王朝側にとどめておく必要があつた。

もう1点は高氏政権発祥の地ということでもあろう。高歡が爾朱榮の信任を得、初めて滞在した都市であり、やがてここに大丞相府を置き、王朝開闢の基礎を築いた象徴的な意味を持つ都市である。高歡が最初に居を構えた陋屋が、後世まで伝承としてでも記憶されてきたのは、まさにそうした記念性に富んだ都市だった故であらう(註 29)。

晋陽の以上の地位の特殊性は、行政機構からも窺うことができる。晋陽には并省尚書が置かれている。東魏の太行台の系譜を引くものであるが、他の行台とは異なり、中央の尚書省に準じた構成となつている(註 30)。

つまり、晋陽は軍事的要衝と、王朝発祥の地という2つの要素を有する都市のため、単なる離宮ではなく北齊政権にとって京師・鄴に次ぐ特殊な都市たりえたのである。軍事的な要衝という点だけならば、例えば南朝の襄陽のようなものがあるが、それが都と表現されることはない。北齊では皇帝自身が軍事的指導者であることを証するため、親征が繰り返され、その必然として晋陽滞在期間が増えた。また一方で父祖創業の地という象徴性が付加されたことにより、鄴に次ぐ都市としての地位を築いたのであろう。

### 6、おわりに

以上、北齊期晋陽の構造、変遷、役割を見てきた。これまで述べてきたように、北齊歴代皇帝が、極めて晋陽を重視しているとはいえ、京師が鄴であることは明らかである。晋陽が「別都」となり得た理由は第4節で述べたように、軍事拠点と王朝の創業の地という2点が合わさった結果である。この条件に、北齊歴代皇帝が親征を行い、軍事的指導者であることをアピールする必要があった結果、晋陽行幸が頻繁に行われ、晋陽滞在期間が長くなるという事象が生じたのである。つまり、北齊皇帝が、勲貴とその有する軍事力を晋陽から切り離すことはできず、また当時の突厥や西魏・北周との緊張した軍事関係により、その晋陽に重兵を配置せざるを得ない政治状況が、晋陽を「別都」たらしめたと言える。武成帝、後主による晋陽の荘厳化は、そうした状況を追認し固定化するものだったのである。

このように北齊の軍事面での拠点として晋陽は突出し、また北魏末の大丞相府以来の伝統もあり、統治機構も整備もされていた。そのため晋陽は、鄴の軍事面を補完する重要な役割を有しており、後の唐の洛陽が長安の経済面、文化面を補っていたことと同様のものと言えるのである。

#### 註

(1) 中国の複都制についての概説に(朱士光・葉驍軍 1987)がある。唐代洛陽と複都制については(利光三津夫 1957)参照。

(2) 『周書』卷42・宇文神舉伝に「及高祖東伐、詔(宇文)神舉從軍。并州平、即授并州刺史、加上開府儀同大將軍。州既齊氏別都、控帶要重。平定甫爾、民俗澆訛、豪右之家、多為姦猾」とある。

(3) 寶泰墓誌。同誌には京城の西二十里に改葬された墓地の景観を謳い「左右山川、顧瞻城闕、地臨四野、道貫二都」とある。東魏北齊の墓群は鄴の西方に営まれ、ちょうど晋陽との幹線路上に位置するため、この「二都」は鄴と晋陽を指しているのであろう。

(4) 唐代の晋陽については(愛宕元 1988)が典籍史料をもとに復原を試みている。

(5) ただし、(国家文物局 2006)所掲図はスケールと城壁長の記述が一致せず、本稿では西壁の長さを3,700 mとする記述を優先させている。

(6) (張徳一・陳濤 2005)はこの東関村の城壁を唐の西城の東城壁とする。北朝期の晋陽の東城壁と見なすことも可能であろう。

(7) 大明城といわれている小城の西500 mの地点では蓮華文瓦当とともに漢白玉製の仏立像が見つかっており、寺院址の可能性がある(李愛国 2001)。

(8) (天保十年)冬十月甲午、帝暴崩於晋陽宮德陽堂、時年三十一。

(9) (天保十年十月)癸卯、發喪、斂於宣德殿(文宣帝紀)。(天保)十年十月、文宣崩。癸卯、太子即帝位於晋陽宣德殿、大赦(廢帝紀)

(10) 皇建元年八月壬午、皇帝即位於晋陽宣德殿、大赦。

(11) (皇建)二年、孝昭崩、遺詔徵帝入統大位。及晋陽宮、發喪於崇德殿。

(12) (天統三年)十一月丙午、以晋陽大明殿成故、大赦、文武百官進二級、免并州居城・太原一郡來年租。

(13) (天統五年)夏四月甲子、詔以并州尚書省爲大基聖寺、晋祠爲大崇皇寺。

(14) 例えば所引の「晋陽記」に「宮南門曰景明門、次北曰景福門、門内景福殿、殿後門曰昭徳門、次曰昭福門、

## II 研究報告

次北寢殿曰萬福殿、殿北曰玄福門、又北曰玄德門、又北即玄武樓、殿西曰西闈門、次西曰威鳳門、殿東曰東闈門、又一門曰昌明門。殿尹東少陽院、殿西射殿、次西院太液池亭子、東南九曲池。景福門西中書門下省、次西内侍省、省後嬪御院内庫」とあり、この記述を（王仲榮 1980）は北斉期の晋陽を記したものと考えるが、割注に玄宗に関連する記事が散見することからも分かるように、これは唐代の晋陽宮を記したものである。

(15) 大明宮の「周四里」という規模は大明城と呼ばれる小城の規模と近く、伝承のとおり大明城は大明宮の遺構なのであろう。

(16) 『北斉書』巻4・文宣帝紀「武定七年八月、世宗遇害、事出倉卒、内外震駭。帝神色不變、指磨部分、自禱斬群賊而漆其頭、徐宣言曰「奴反、大將軍被傷、無大苦也」。當時内外莫不驚異焉。乃赴晋陽、親總庶政、務從寬厚、事有不便者咸蠲省焉」。

(17) 『北斉書』巻4・文宣帝紀「(天保九年十二月) 是月、起大莊嚴寺」

(18) 『北史』巻8・武成帝紀「(河清二年) 五月壬午、詔以城南雙堂閨位之苑、迴造大總持寺」とあり、同年八月に「秋八月辛丑、詔以三臺宮爲大興聖寺」とある。

(19) 前掲注12参照。

(20) 『北史』後主紀から宮殿の罹災記事を挙げておこう。(天統三年正月) 鄴宮九龍殿災、延燒西廊。(天統四年) 夏四月辛未、鄴宮昭陽殿災、及宣光・瑤華等殿。

(21) 後主紀に「承武成之奢麗、以爲帝王當然。乃更增益宮苑、造偃武脩文臺、其嬪嬙諸宮中起鏡殿・寶殿・玳瑁殿、丹青彫刻、妙極當時。又於晋陽起十二院、壯麗逾於鄴下。所愛不恒、數毀而又復。夜則以火照作、寒則以湯爲泥、百工困窮、無時休息」とあるように、その造営は罹災した鄴だけでなく、晋陽にも大規模に行われていたことが分かる。大明殿の造営と合わせ、後主期に晋陽の景観が大きく変わったことが窺えよう。

(22) 『周書』巻6・武帝紀下・建德6年(577)条に「并、鄴二所、華侈過度、誠復作之非我、豈容因而弗革。諸堂殿壯麗、並宜除蕩、甍宇雜物、分賜窮民」とある。

(23) 後主紀(天統5年4月)夏四月甲子、詔以并州尚書省爲大基聖寺、晉祠爲大崇皇寺。

(24) 後主紀に、鑿晋陽西山爲大佛像、一夜然油萬盆、光照宮内とある。晋陽の西、西山山系には北斉期の大仏像が2体ある。一つは童子寺でもう一つはそのやや北方の蒙山開化寺の大仏である。この記載がそのうちいずれを指すかは必ずしも明確ではないが、(小野勝年 1954)は童子寺を、(李裕群・李鋼 2003)は蒙山大仏を指すとする。筆者は2011年に童子寺を踏査したが、ちょうど晋陽城を眼下に見下ろす位置にあり、小野氏が指摘するように文献の記載と合致する印象を持った。両大仏の遺跡については(李裕群・李鋼 2003)、童子寺については(常盤大定・関野貞 1927)(小野勝年 1954)および(中国社会科学院考古研究所边疆考古研究中心など 2010)参照。なお、童子寺大仏の造営年代について、(中国社会科学院考古研究所边疆考古研究中心など 2010)は『永樂大典』巻5203所引の「太原県志」に「童子寺、在県西一十里、天保七年北斉弘礼禪師棲道之所、有二童子于山望大石儼若尊容、即鑄爲像、遂得其名」とあるのにより、大仏の造営年代を文宣帝期に求める。文宣帝が童子寺を訪れた記事は『北史』巻55・唐邕伝に見えるが(小野 1954)も指摘するように、寺院が存在したことと大仏があったことは分けて考えるべきで、大仏の造立自体は、後主紀の記載から後主期と考えるべきであらう。

(25) 後主紀に、又爲胡昭儀起大慈寺、未成、改爲穆皇后大寶林寺、窮極工巧、運石填泉、勞費億計、人牛死者不可勝紀。とあるが、厳密にはこれが晋陽での記事か否かは不明である。ただ晋陽の西山に大仏像を築いた記事

に続くため、晋陽の可能性が高い。(封野 2013) も晋陽の寺院と見なしている。

(26) (村元 2007) に鄴出土の墓誌を集成している。

(27) 邯鄲宮については『北史』後主紀に、武平 7 年 8 月「詔營邯鄲宮」とあるだけである。一方の中山宮は『隋書』卷 27・百官志中に「長秋寺、掌諸宮閣。卿・中尹各一人、並用宦者。…領中黃門・掖庭・晋陽宮・中山宮・園池・中宮僕・奚官等署令・丞。…掖庭・晋陽・中山、各有宮教博士二人。中山署、又別有麵豆局丞。園池署、又別有桑園部丞…」とあるように、鄴の掖庭、晋陽宮、中山宮が同じ長秋寺により所管されていたことから分かるように、後宮を備えていたことが分かる。

(28) (岡田和一郎 2011) 参照。

(29) 『北齊書』卷 1・神武上「及得志、以其宅爲第、號爲南宅。雖門巷開廣、堂宇崇麗、其本所住團焦、以石墜塗之、留而不毀、至文宣時遂爲宮」とある。また『永樂大典』卷 5204『太原志』には「高歡宅」とあり、割注に「在唐存信坊。「晋陽記」曰、歡避葛榮之難、自上党来居此坊。坊中皆上党人徙晋陽者、故一名上党坊」とある。

(30) 北齊期の并省尚書や行台については(古賀昭岑 1974・1977・1979) が詳細に論じている。また行台の地方官化については(牟登松 1997) 参照。

#### 参考・引用文献

王仲榮 1980『北周地理志』中華書局

岡田和一郎 2011「北齊国家論序説—孝文体制と代体制—」『九州大学東洋史論集』39号

愛宕元 1988「唐代太原城の規模と構造」『中国都市の歴史的研究』(のち同氏 1997『唐代地域社会史研究』同朋舎所収)

小野勝年 1954「晋陽の童子寺—入唐巡礼求法行記の一節について」『佛教藝術』21 pp. 80-88

渠川福 1989「我国古代陪都史上的特殊現象—東魏北齊別都晋陽略論」『中国古都研究』第4輯

古賀昭岑 1974・1977・1979「北朝の行台について その1～3」『九州大学東洋史論集』3, 5, 7号

国家文物局 2006『中国文物地図集 山西分冊』(上) 中国地図出版社 p408

崔彦華 2012『魏晋北朝陪都研究』三晋出版社

佐川英治 2012「南北朝新出土墓誌的実地考察—南京・洛陽・西安・太原—」『早期中国史研究』第4巻第1期

山西省考古研究所・太原市文物管理委员会 1992「太原隋斛律徹墓清理簡報」『文物』1992年第10期

謝元路・張頌 1962「晋陽古城勘察記」『文物』1962年4・5期 pp. 55-58

朱士光・葉驍軍 1987「試論我国歷史上陪都制的形成与作用」『中国古都研究』第3輯(邦訳は積山洋訳 2002「中国史上の陪都制」『大阪歴史博物館研究紀要』第1号)

瀧川政次郎 1967「複都制と太子監国の制」『法制史論叢 第2冊 京制並びに都城制の研究』角川書店

谷川道雄 1988「両魏齊周時代の覇府と王都」唐代史研究会編『中国都市の歴史的研究』(のち同氏 1997『増補隋唐帝国形成史論』筑摩書房所収)

中国社会科学院考古研究所新疆考古研究中心・山西省考古研究所・太原市文物考古研究所「太原市龍山童子寺遺址発掘簡報」『考古』2010年7期 pp. 43-56

張徳一・陳濤 2005「晋陽古城的創建時間与城垣探討」『中国古都研究』20輯

## II 研究報告

常盤大定・関野貞 1927『支那佛教史蹟第三集評解』佛教史蹟研究会

封野 2013『漢魏晋南北朝仏寺輯考』鳳凰出版社

牟発松 1997（古賀昭岑訳）「北朝行台の地方官化についての考察」『九州大学東洋史論集』25号

前田正名 1976「四一六世紀における太原盆地より河北平野に出る交通路 井涇路と濁漳水路」『駒澤史学』26号

村元健一 2007「東魏北齊鄴城の復元研究」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号

李愛国 2001「太原市晋陽古城遺址出土北朝漢白玉石造像」『文物』2001年5期

利光三津夫 1957「難波京の官司について」『東洋大学紀要』11集（のち同氏 1959『律令及び令制の研究』明治書院所収）